

日本地球化学会ニュース

No. 124

1991. I. 28

1991年度日本地球化学会春季シンポジウム

主催 日本地球化学会

日時 1991年4月3日(水)~4日(木)

(3日: 口頭発表, 4日: ポスター発表の討論)

会場 共立女子大学八王子校舎

(東京都八王子市, 中央線高尾駅よりスクールバス10分)

地球惑星科学関連学会1991年合同大会の会期中に開催されます

プログラム

4月3日(水)

一般講演

(9:00~10:30) 座長 高橋和也

H21-01 Sino-Korean platform と日本の先カンブリ
ア紀変成岩類の Sr, Nd 同位体比

° 李 承求・清水 洋・増田彰正(東大理)

H21-02 西南日本に分布する後期白亜紀~古第三紀酸性
火成岩類の Sr, Nd 同位体比に関する研究

° 加々美寛雄(岡山大地球研), 飯泉 滋・
沢田順弘・松本一郎(島根大理)

H21-03 山陰地方における白亜紀~第三紀火山岩類の主・
微量成分と Sr, Nd 同位体組成: 上部マントル
と下部地殻の改変

° 沢田順弘・三宅康幸・飯泉 滋・松本一郎
(島根大理), 加々美寛雄(岡山大地球研),
武蔵野 実(京都教育大)

H21-04 イエメン台地における新生代火山岩類の K-
Ar 年代と全岩化学組成

° 折橋裕二・沢田順弘・Ashraf Al-Jailani
(島根大理), 長尾敬介(岡山大地球研)

H21-05 地震に伴う温泉ガス組成の変動

° 永峰康一郎・杉崎隆一(名大理)

H21-06 熱水環境におけるポリチオン酸の分解反応

° 前川智範・綿坂邦彦・高野穆一郎(東大教
養)

(10:30~12:00) 座長 松久幸敬

H21-07 火山ガス中の炭化水素の起源

° 浅田憲子・清棲保弘(名大理)

H21-08 秋田駒ヶ岳から放出されるヘリウムの同位体比

° 坂本 稔・野津憲治・脇田 宏(東大理),
佐野有司(広島大理), 北 逸郎(秋田大鉱山)

H21-09 A solar component in the Earth:
Ne isotope anomalies in Loihi and
Kilauea basalts, Hawaii

° M. Honda, I. McDougall, D.B.
Patterson, A.D. Doulgeris (RSES,
ANU), D.A. Clague (USGS)

H21-10 チャート中の窒素同位体比と N_2/Ar 比: 大
気窒素同位体比の進化について

° 佐野有司(広島大理), C.T. Pillinger
(The Open Univ.)

H21-11 北海道 K/T 境界の硫黄同位体比激変: 海洋
無酸素症発生か?

° 梶原良道(筑波大地科), 海保邦夫(東北大
理)

H21-12 New indicators of shock metamor-
phism

° Y. Miura(山口大理)

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号 東京大学教養学部化学教室 電話 03(467)1171

発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)

日本学会事務センター内 電話 東京 03(817)5801

- (13:00~14:15) 座長 下山 晃
- H22-01 雄牛座暗黒星雲 TMC-1 の化学組成とその進化
° 平原靖大・増田彰正(東大理), 山本 智・高野秀路(名大理), 大石雅寿・川口建太郎・石川普一・海部宣男(国立天文台)
- H22-02 宇宙線による惑星大気からの生体有機化合物の生成: 模擬実験による検証
° 小林憲正(横国大工), 斉藤 威(東大宇宙線研), 金子竹男(横国大工), 大島泰郎(東工大生命理工)
- H22-03 有機成分による人形峠ウラン鉱床出土植物化石の研究
° 村江達士・直良美鈴・細川和男(東大理), 露木孝彦(埼玉大教育), 高橋武美(日大農獣医)
- H22-04 グリーンランドアイスコア中の有機物の分布
° 河村公隆・鈴木郁子・横山和久(都立大理)
- H22-05 外洋域における沈降粒子有機物の窒素同位体比の季節変動と混合層の栄養塩収支
° 中塚 武・半田暢彦(名大水圏研)
- (14:15~15:45) 座長 蒲生俊敏
- H22-06 東マナス海盆における熱水指標成分としての Al, Mn の分布
竹内和久(広島大), ° 下島公紀(電中研), 中山英一郎(京大理), 坪田博行(広島大), 酒井 均(東大海洋研)
- H22-07 太平洋, 大西洋, バルト海, バレンツ海, ボスニア湾より採取されたマンガンノジュールの Ce, Nd, Sr の同位体比
° 天川裕史(東大理), Johan Ingri (Univ. of Luleå), 増田彰正・清水 洋(東大理)
- H22-08 チベット高原色林錯湖底堆積物の安定同位体分析による過去一万年の環境変化
° 森永速男(姫路工大理), 糸田千鶴(神戸大自然科学), 伊勢崎修弘(千葉大理), 後藤博彌(神戸大教養), 日下部 実(岡山大地球研), 安川克巳(神戸大理)
- H22-09 CO₂ 深海貯留の環境影響予測
° 大隅多加志・仲敷憲和・下島公紀(電中研)
- H22-10 大気中の過酸化水素が雨の酸性化に果たす役割
° 佐久川 弘, Issac R. Kaplan (Univ. of California, Los Angeles)
- H22-11 風化条件における鉱物の安定領域
° 八田珠郎(農水省・熱研), 野呂春文(地調), 草場 敬・齋藤貴之(農水省・農環研), 廣瀬孝(筑波大地科)

- 招待講演
(15:55~17:05) 座長 清水 洋
- H22-12 珪質堆積岩の主要・微量元素組成ならびにその堆積環境
山本綱志(神戸大理)
- H22-13 マグマ-熱水流体系の地球化学
篠原宏志(地調)
- ポスター発表 [揭示は4月2日(火)~5日(金); 討論は4日(木) 11:00~14:00]
- H22-P84 深海底堆積中の希土類元素などの微量元素について
° 葉袋佳孝・松本 良・富永 健(東大理)
- H22-P85 中国新疆タクラマカン沙漠南部における塩類の析出及び集積状況
° 矢吹貞代・岡田昭彦(理研), 樊 自立(中国科学院新疆生物土壤沙漠研)
- H22-P86 地球表層の化学を計測する: 地球化学図
° 上岡 晃・伊藤司郎・田中 剛・今井 登(地調)
- H22-P87 核分裂生成収率からみたオクロ天然原子核中の核分裂起源種の挙動
° 日高 洋・増田彰正(東大理)
- H22-P88 珪酸塩鉱物の溶解と表面層のキャラクタリゼーション
藤本光一郎(東大理)

- 口頭発表の時間 (討論時間を含む)
一般講演: 15分
招待講演: 35分
講演番号は合同大会での番号です [H 会場, 2日目].
ポスターセッションの番号は変更の可能性があります。
- 参加費 (合同大会, 地球化学会シンポジウムに共通)
一般 1,000円, 学生 500円

連絡先 〒113 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学理学部化学教室
清水 洋
TEL. 03-3812-2111 (内線4350)
FAX. 03-3814-2627

4月2日~5日に開催される, 地球惑星科学関連学会1991年合同大会 (地震学会, 地球電磁気・地球惑星物理学会, 日本火山学会, 日本測地学会, 日本地球化学会) の全体のプログラムは別途お知らせ致します。会場への交通などは合同大会プログラムを参照して下さい。

泊 JR八王子駅 (高尾駅から6分) 周辺のビジネスホテルを中心としていくつかご案内します。利用希望者は各自で御手配下さい。

名 称	所 在 地 (八王子市)	電 話 (0426)	収容人数	料金
ホテルサンマリーナ西八王子	台町 4-44-13	66-5111	79	5,000~
三恵シティホテル八王子	寺町 60-1	22-3388	82	5,500~
B & B八王子	寺町 43-2	25-0051	82	6,000
マロウドイン八王子	三崎町 6-11	23-7111	182	5,700~
セントラルホテル八王子	上野町 4	25-1311	64	5,900~
八王子プラザホテル	明神町 4-6-12	46-0111	253	8,497~
ビジネスホテルヤジマ	明神町 2-25-4	42-9111	66	4,000
ホテルニューグランド八王子	大和田町 6-1-6	45-0015	90	6,798

注: 表示料金はシングル素泊まりの税込み料金です。2人部屋の場合多少安くなります。

シンポジウム

宇宙生命科学シンポジウム “宇宙生命科学への招待
——生命の宇宙進出の条件は何か——”

主催 日本宇宙生物科学会

講演題名

1. 宇宙の夢
2. 宇宙進出計画
3. 人類の宇宙進出のための生物, 医学, 心理学的課題
4. 人類が宇宙へ進出するための環境創製技術
5. 宇宙での生命誕生 (仮)
6. 地球外生命, 文明を求めて (仮)
7. 宇宙生命科学への注文 (仮)

講師

野 田 春 彦 (放送大学)
長 岡 俊 治 (宇宙開発事業団)
渡 邊 悟 (名古屋大学)
新 田 慶 治 (航空宇宙技術研究所)
J.M. Greenberg (オランダ ライデン大学)
大 島 泰 郎 (東京工業大学)
小 松 左 京 (作家)

期 日 1991年3月30日(土) 12時10分~17時
会 場 国立科学博物館 講堂 (東京 上野公園内)
定 員 200名
参 加 費 無料
参加申し込み 往復葉書にてお申し込みください。定員になり次第締切ります。
申し込み・問い合わせ先 〒194 東京都町田市南大谷11
三菱化成生命科学研究所
河崎 行繁
電話 0427-24-6289
Fax 0427-29-1252

「創薬基礎科学研究の推進について(勧告)」を採択

平成2年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る10月17日から19日まで、第110回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その総会で採択された勧告等を中心に、同総会の議事内容等についてお知らせします。

日本学術会議第110回総会報告

日本学術会議第110回総会(第14期・第6回)は、平成2年10月17～19日の3日間開催された。

1 総会第1日目の冒頭に、先に逝去された、時永淑会員(第3部)及び大谷茂盛会員(第5部)を追悼して黙禱を捧げた。続いて、会長からの経過報告、各部・委員会報告の後、内規改正、勧告、対外報告の3案件の提案説明が行われた。これらの案件については、同日の午後の各部会での審議を経た上で、第2日目の午前中に審議・採択された。2 今回総会で採択された事項は次のとおりである。

(1)日本学術会議の運営の細則に関する内規の一部改正
本件は、①来年春の第14期最後の総会が5月(通常は4月)開催になったことに伴い、「副会長世話担当研究連絡委員会の運営に関する総会決定」の適用期間を、1か月間延長するとともに、②第14期限りの措置として、地球圏・生物圏国際協同研究計画(IGBP)のフォローアップ組織として、地理学研究連絡委員会に「IGBP専門委員会」を設置するために、関係各部等の研究連絡委員会委員定数について必要な処理を行ったものである。

(2)創薬基礎科学研究の推進について(勧告)
本件は、薬科学系の3研究連絡委員会と薬理学研究連絡委員会が従来からの検討結果を勧告案として取りまとめ、第7部提案として、今回総会に付議したものである(この勧告の詳細は、別掲参照)。この勧告は、同日午後直ちに内閣総理大臣に提出され、関係省庁に送付された。

(3)第6常置委員会報告—外国人研究者・大学院留学生受入れに関する問題点と改善の方策について—

本件は、第6常置委員会が、今期的重要課題の一つとして審議を重ねてきた結果を「対外報告」として取りまとめたものを、外部に発表することについて承認したものである(この報告の詳細は、別掲参照)。

3 以上の諸報告及び提案審議のほかに、特に、近藤会長から、前回総会で討議された南アフリカ共和国科学者の我が国入国をめぐる諸問題については、その後、外務省と折衝した結果、ビザ発給手続きの合理化措置が講じられ、国際学術連合会議(ICSU)の理解が得られたとの報告があった。また、提案事項採決後行われた自由討議では、大学等高等教育関係予算拡充問題、遺伝子操作に関する法規制問題等について意見交換が行われた。

4 第2日目午後には、「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」が開催された(この意見交換の詳細は、別掲参照)。また、第3日目の午前中には各特別委員会が、午後には各常置委員会がそれぞれ開催された。

第6常置委員会報告—外国人研究者・大学院留学生受入れに関する問題点と改善の方策について—(要旨)

(平成2年10月18日 第110回総会承認)

外国人研究者・大学院留学生の受入れを促進するうえで、言語、研究環境、外国人研究者の任用、大学院留学生の学位、外国人研究者・大学院留学生の選考が問題になる。

日本語能力は研究の対象とする学問分野や研究課題との関係が留意されねばならない。分野によっては、日本語能力は日常生活に必要なもので足り、研究のためには英語の能力が必須である。研究者の受入れに当たり、その研究に耐え得る日本語又は英語の能力を備えているかを十分に審査しておくことが、研究を実りあるものとするために必要である。

貧弱な研究設備のまま、また十分な研究費を持たないまま外国人研究者を受け入れる事は受け入れた外国人研究者を失望させるだけでなく、日本人研究者の研究を阻害する。また劣悪な居住環境や、事務局等の対応組織の不備も、外国人研究者の研究活動を妨げる。国は、研究環境を整備することに対して十分な予算措置を講ずべきである。

我が国の大学における外国人研究者の任用は、その道が開かれているとはいえ、まだ十分でない。外国人研究者の任用に関して広く情報を提供する機関の設置、あるいは大学等において外国人研究者を一定数受け入れる体制の確立が望まれる。

大学院留学生の博士学位の取得は、帰国後の処遇と関係して問題となっている。受入れ大学院において、博士学位の取得促進につき一層の改善努力が払われることが期待される。

外国人研究者の選考については、受入れ側が研究者の素質をよく理解し、公正な基準によって行うことが大切である。大学院留学生については、素質の多様化と学生数の急増に伴い多くの問題が生じており、その選考方法に対し抜本的改善が要望される。

解剖学研究連絡委員会報告—日本における解剖学の教育と研究(現状の考察と将来への展望)—(要旨)

(平成2年9月21日 第758回運営審議会承認)

自然科学の急速な発展に伴い、医学部・医科大学における教育・研究・診療のすべての分野に、大きな変化が生じた。すなわち研究手法の開発、研究機器の発達により、既存の学問領域の進歩に加えて、新たな学問分野が分化し、教育内容は多様化すると共に著しく増大した。さらに人口の増加と高齢化、経済の成長など種々の社会的要因の変化も複合されて、医学における教育と研究の重点と目標にも変化が生じた。それらは、これまで医学の基礎を形成してきた伝統的な講座に、とりわけ強い影響を与え、その在り方について検討し、改善をはかる必要性を生じさせた。

本報告は、このような状況を踏まえ、我が国における解剖学の教育と研究について、現状を考察し、今後の在り方に関する指針をまとめたものである。報告では、解剖学の定義と使命、医学教育と研究における解剖学、解剖学教室の構成、解剖学者の養成、医学部他教室及び社会との関係などの、現状と問題点について検討し、医学の変貌に対処すべき改善の方途を明らかにすると共に、将来に向けての展望が示唆された。

総会中の「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」

今回総会の第2日目の午後には、1時から4時間にわたって「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」が行われた。従来この時間帯には、その時々々の学術上の重要課題を取り上げて、会員による「自由討議」が行われてきた。今回は、これに代わり、第14期も2年余を経過し、余すところ9か月足らずとなったこの機会に、今期の当初に決定された第14期活動計画において、「緊急に調査審議を行って第14期中に適切な形で報告・提言を取りまとめるべき課題」ごとに設置された各特別委員会から、今までの審議状況を報告してもらい、それに基づいて会員間の意見交換を行って、各特別委員会の今後の審議の参考に供することにしたものである。

1 まず最初に、医療技術と社会に関する特別委員会の水越治委員長(第7部)から、同委員会における「脳死をめぐる問題」に関する審議の経過を取りまとめた「中間まとめ」について報告がなされた後、「日本人の国民性に根ざした死の概念との関わり」、「臓器移植を必要とする患者と臓器提供者の需給関係の問題」、「死の認定基準のあり方」、「前期の学術会議における脳死問題に関する審議状況との関係」等について意見交換が行われた。

2 次に、農業・農村問題特別委員会の水間豊委員長(第6部)から、同委員会が今後取りまとめることを予定している「農業・農村のもつ今日的意義と課題(仮題)」の概要について報告がなされた後、「他の先進諸国の農業との比較の必要性」、「国内外の政治との関わり」、「世界の食糧問題に対する日本農業の果たすべき役割」、「他産業を絡めた農業・農村の振興策」等について意見交換が行われた。

3 最後に、人間活動と地球環境に関する特別委員会の吉野正敏委員長(第4部)から、同委員会が現在取りまとめを行っている「人間活動と地球環境に関する日本学術会議の見解(案)」について報告がなされた後、「地球環境教育の重要性」、「国際学術協力事業等国際的対応のあり方」、「医学・保健問題との関わり」、「地球環境保全と経済成長との関係」、「南北問題との関わり」等について意見交換が行われた。

第15期日本学術会議会員選出のための登録学術団体の概況

本会議では、現在第15期(平成3年7月22日～平成6年7月21日)会員(定員210人)選出のための手続きが進められているが、先般6月末日を締切期限として、学術研究団体からの登録申請が受け付けられた。その後日本学術会議会員推薦管理会で審査が行われ、結果は次のとおりであった。

学術研究団体の登録申請の審査結果
申請団体数……………952団体
登録団体数……………915団体

※日本学術会議会員推薦管理会に登録した915団体名は、日本学術会議月報平成2年12月号に掲載されるので、御参照願いたい。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291

大 気 の 化 学

日本化学会編
(学会出版センター1990)
¥ 3,600

最近、地球環境の問題がいろいろ論議されている。地球化学は本来、地球上における化学種の挙動を明らかにし、物質収支を解明する学問であるから、この問題は地球化学の一部として取り組まねばならない。特にここ1, 2年は地球の温暖化の問題が重要視され、世界的に政治問題にまで発展している。地球温暖化は主として、大気中の温室効果気体の化学の問題である。この時期に大気の化学を理解することは、地球化学者にとっても重要である。環境科学的問題は、とすると、表面的な対処療法的発想になりがちであるが、地球化学者は少なくとも現象の本質を把握すべきである。そのためには本書の第1章大気の進化を読んでみるとよい。種々の問題点はあるにせよ地球大気の組成の変遷の様子と、それに至る謎解きのプロセスが理解でき、地球化学の面白さ、夢を見出すことができるであろう。

次に地球化学者にとって必要なことは、天然自然のデータはどのようにしてとり、その精度はどの位であるかという認識である。第2章は地球大気の測定において衛星によるリモートセンシングがいかに有効であることを示す

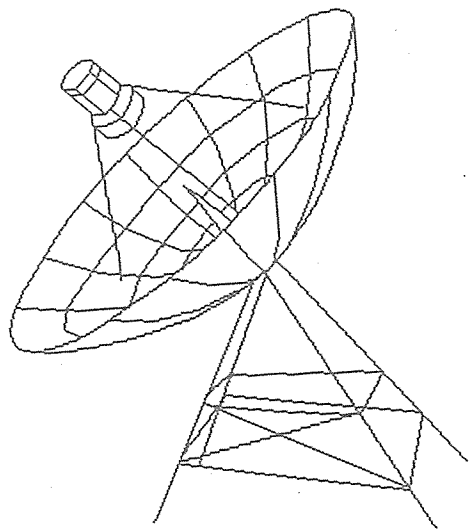
もので、例えば、地球大気中のオゾンなど、実は人工衛星による観測がなければ、本格的オゾンホールが発見とは進展しなかったであろう。

第3章は各論であるが、最初に大気の成分についての解説がある。これは地球大気組成の最新の情報を提供しており、データソースとしても我々に役立つものである。各論は更に発展し、二酸化炭素、ハローカーボン、硫黄化合物、酸性雨原因物質、ヨウ素、大気エアロゾル、対流圏のオゾンと続き、これらは全て現在の大気圏の環境問題の理解に役立つものである。特に、大気中の二酸化炭素の時間的、空間的変動は、二酸化炭素問題を論ずるなら、一度は目を通しておいてほしい内容である。

第4章は工学的な問題で、現在大気汚染防止のためにどのような技術が利用されているかを脱硫・窒素酸化物粉じんについて述べてあり、我が国の汚染防止技術がいかに高度であるかを知ることができる。これらの技術を途上国に導入すれば、少なくとも現在のエネルギー使用量も減少させることもでき、酸性雨の原因となる物質はその大半を除去できる可能性があることがわかる。

編集の苦勞もさることながら、各項の執筆者も人を得て、その内容は力作である。しかし、化学としてもう一歩を進めるためには気相反応、特に気体の光化学反応に対する勉強が必要であるが、これらは物理化学反応論の勉強に待つより仕方がないであろう。本書は季刊化学説のNo. 10として、日本化学会から刊行されたものであるが、地球化学者に一読をすすめたい本である。

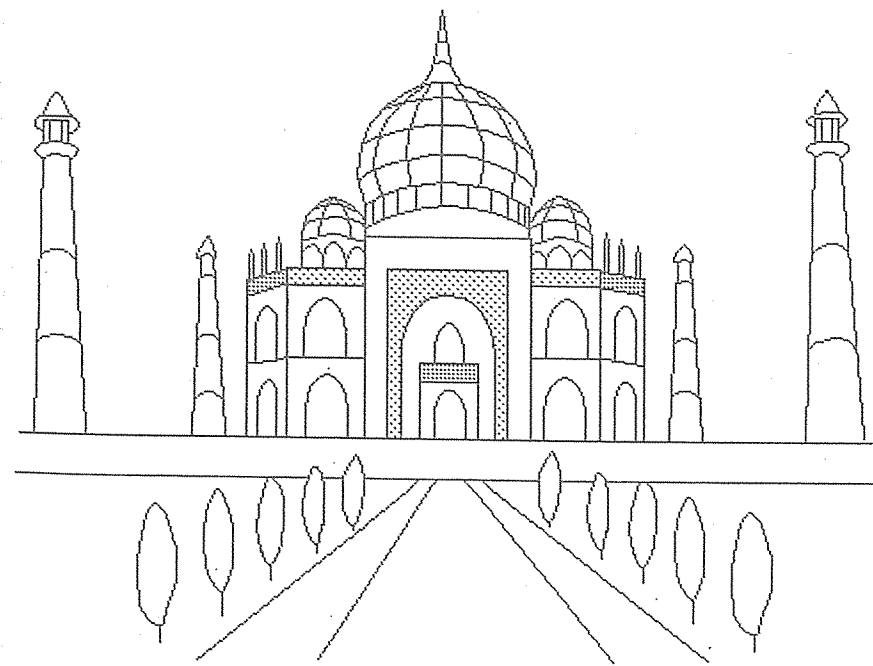
(綿祿邦彦)



“ニュースへ情報・原稿をお寄せ下さい”

年度末のためか、ニュースへの情報提供、寄稿が少なくなって困っております。情報時代と言われながら年4回発行と言うのは、如何にも発行回数が少ないのは事実ですが、会員と学会を繋ぐ重要な糸として働くことを期待され今日まで継続して参りました。シンポジウム、小集会、研究会、海外における学会開催、学会や年会への苦言、めずらしい体験、なかなか行けないフィールドの様子、などなど、1,000人もの会員になれば、面白い話が山ほどあるに違いありません。自分で書くのが嫌なら、この人ならこんな面白い話を持っている……などの情報をこっそり教えて下さい。堅い話も勿論歓迎です。学術上のトピックス、ホットな議論など長短を問いません。形式自由。一行24字のワープロにして下されば結構ですが、手書きで通常原稿用紙でも一向に構いません。首を長くしてお待ちしております。

(編集幹事 高野穆一郎)



洞窟の中を覗いてみませんか?

綿穢現地球化学会会長が「地球は宝石箱」という地球化学の啓蒙書を出されているが、科学者にとって、石灰洞は中身がまだ十分にはあらためられていない大きな宝石箱だと思います。石灰洞は、第四紀に形成、発達したものであり、地表にはもはや痕跡すら残っていないような、当時の気候や地殻変動、海水準変動等の環境変動の情報をとどめています。地球化学を志す皆さんの目を洞窟にも向けて頂きたいと思います。正しい手法でアプローチすれば、比較的容易に成果を得ることができるはずです。

そればかりでなく、洞窟にもぐっていると興味深いものに出くわすこともあります。アラゴナイト鍾乳石やコウモリグアノ中で生産されている硫酸のこともお話したいのですが、ここでは、洞窟探検・洞窟学研究の仲間と一緒にいった大金峰洞（熊本県八代郡泉村）調査で巡り会った、ムーンミルクのことについて述べたいと思います。

ムーンミルクは微晶質の集合体で粘土状物質です。湿った状態ではクリームチーズ状で柔らかく、乾燥すると粘土団子と同様に塊状となります。ヨーロッパでは民間治療薬として使われていたという記録が残っており、Monmilchと呼ばれていたのが、後に誤ってMondmilchとなったと言われています。ムーンミルクはその英語訳ということになります。大金峰洞では、天井、洞壁、床いたる所で見られます。洞窟に普通にある鍾乳石の形態（フローストン、マイクロゲール、石灰華）をとっており、指で押せば2~2cmの厚さにわたって形がくずれ、水分を多量に含むことがわかります。多量に分布する場所は限られています。傾斜60°の断層に沿って発達した洞窟を洞口から約80cm降りた所の壁を飾るフローストン状ムーンミルクは、厚い部分では15cm以上に達し、石灰岩基盤上に層状をなしています。基盤をなす石灰岩の上におおいかぶさるように成長しており、

基盤岩表面の溶解再沈殿で生成したようには見えません。

粉末X線回折強度は大きくありませんが、主要鉱物は方解石です。石灰洞という特殊環境の中で二次的に生成するものの内、最も普通に見られる鉱物ですが、洞窟内で地下水から脱二酸化炭素にともなって沈殿生成する場合は、鍾乳石は大きな単結晶の集合体となりやすく、無定形あめいは微結晶の集合体である柔らかい鍾乳石はできそうもありません。ムーンミルクは、その点で特殊な二次鉱物と言うことができます。

ムーンミルクは、これまで本邦において岩手県内間洞と山梨県青岩洞でしか存在は知られていませんでした（大出・滝川, 1979）。Hill & Forti (1986) は彼らの著書の中でムーンミルクの成因として次の4つの可能性を挙げています。

- 1) アルプス等の寒冷地で地下が凍結して、溶存していたカルシウムイオンが炭酸塩として沈殿する。
- 2) 微生物が生活史の一環としてムーンミルクをつくる。
- 3) 石灰岩基盤や鍾乳石の風化生成物。
- 4) 他の鍾乳石と同様に直接沈殿するが、何らかの理由で結晶が成長しない。微生物を特異的に染める蛍光色素を用いて大金峰洞産ムーンミルクを染色し、紫外線顕微鏡下で観察すると、多くは1μm以下の微少な細菌が極めて多数認められ、その菌数はムーンミルクの採取部にかかわらず、肥沃な耕地土壌に匹敵することが判かりました。細菌に起因する有機物（菌が死んで放出された細菌内液や生物活動にともなって放出したもの）による方解石結晶成長の阻害の可能性が最も高いと思われますが、それを直接証拠だてることができないでいるのが現状です。

コロンブスの卵と同じで、一旦見つかると、ムーンミルクと呼べそうな洞窟内二次生成物が日本国内のかなりの数の洞窟に分布することが判ってきました。成因についての今後の研究成果が待たれるところです。

九州大学教養部化学教室 吉村和久

日本地球化学会ニュース

No. 125

1991. IV. 5

1991年度日本地球化学会年会のお知らせ

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日時 1991年9月30日(月)~10月2日(水)

会場 愛媛大学教養部

松山市文京町3番

内容 一般講演(15分)

ポスターセッション

課題講演(20分)

- 1) 地球型惑星の形成とその化学的進化
- 2) 熱帯の地球化学
- 3) 陸起源物質の長距離輸送

*発表はOHPとします。スライドを希望する場合は、講演申込み時にお申し出下さい。ポスターセッションの展示法については、申込者に改めてお知らせします。

講演申込み締切

6月20日(水) 必着

本号添付の所定の申込み用紙を御使用ください。

講演要旨原稿締切

8月16日(金) 必着

別添の「講演要旨作成上の注意」に従い作成して御送り下さい。

要旨集代 4,000円

参加費 日本地球化学会会員 1,000円

非会員 2,000円、学生 無料

懇親会 10月1日(火) 18時から愛媛大学・大学会館食堂

会費 4,000円(学生 3,000円)

要旨集、参加、懇親会、小集会申込み締切

9月14日(土)

送金 要旨集代、参加費及び懇親会費は9月14日までに郵便振替で御送金下さい。

郵便振替 徳島 9-53839

日本地球化学会年会準備委員会

宿泊・航空券: 別紙のように愛媛大学生協同組合が取り扱っております。同封の所定の申込み用紙を使用して直接御申込み下さい。

年会申込み先及び連絡先

〒790 愛媛県松山市樽味3-5-7

愛媛大学農学部環境化学研究室内

1991年度日本地球化学会年会準備委員会

立川 涼 (0899-41-4171 内線 368)

田辺信介 (0899-41-4171 内線 391)

選挙公示

日本地球化学会1992・1993年度役員選挙の
立候補者および推薦候補者の届出について

本会会則により1992・1993年度役員の選挙を次の日程で行います。

立候補者・推薦候補者締切	7月31日必着
選挙広報・投票用紙・会員名簿発送	8月20日
投票締切	9月17日必着
選挙結果公表(総会)	10月1日

つきましては、下記の要領で、会長、副会長・幹事・評議員に対してそれぞれ立候補者および推薦候補者の届出をしていただくようお願いします。

1. 会長1名、副会長1名、幹事1名、評議員20名を選出します。
2. 立候補者の届出は、届書を立候補者自身が、(1)本委員会に持参するか、または(2)本委員会宛に送付して下さい。
3. 推薦候補者の届出は、推薦候補者名と推薦者名を記した届書に推薦候補者の承諾書をそえて、推薦者またはその代表者が、(1)本委員会に持参するか、または(2)本委員会宛に送付して下さい。なお役員選出細則第8条により、次の方々は次期評議員に選出することが出来ません。

小倉紀雄、鈴木俊雄、高野穆一郎、田中 剛、
角皆静男、野津憲治、松久幸敬

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号 東京大学教養学部化学教室 電話 03(3467)1171

発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)

日本学会事務センター内 電話 東京 03(3817)5801

4. 第2項と第3項に記した以外の方法で届出が行われた場合には、届出を受付けることは出来ません。郵送の場合は裏に(選挙)と記入し、「書留郵便」として下さい。

5. 届出の締切は、1991年7月31日(必着)です。

6. 本委員会の所在地は次の通りです。

〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部化学教室

高野穆一郎

電話 03-3467-1171 内線 629

FAX 03-3485-2904

日本地球化学会 1990 年度

第3回評議員会議事録

日 時: 1990年10月2日 16:30-20:30

場 所: 新潟大学理学部

出席者: 綿坂邦彦会長、脇田宏副会長、海老原 充、金森 悟、川辺岩夫(立川代理)、北 逸郎、清水 洋、下山 晃、鈴木俊雄、高野穆一郎、田中 剛、角皆静男、長尾敬介、野崎義行、松田准一、松久幸敬各評議員

1. 前回議事録を了承した。

2. 報告事項

2-1 庶務(野津評議員)

1991年度質量分析連合討論会、第28回理工学に於ける同位元素研究発表会の共催を承諾した。地下水汚染・地層汚染とその対策、第5回「大学と科学」公開シンポジウム『地球環境変動の科学』の後援を承諾した。平成2年度(第27回)秩父宮記念学術賞の受賞候補者の推薦依頼があった。学会・研究会プログラム3件が回覧された。学会に関する調査等3件があった。

2-2 幹事会(野津評議員)

9月8日東京大学理学部において幹事会を行った。出席者は、綿坂会長、脇田副会長、海老原、清水、高野、野津、松久各幹事で、第3回評議員会の議題内容について議論した。とくに、学術会議、地球化学・宇宙化学研究連絡委員会、増田委員長、柴田委員に列席をお願いし、地球化学と研連との合同WGについて、意見交換を行った。

2-3 編集

(1) Geochemical Journal(松久評議員)

Vol. 24, No. 1は配布完了。No. 2は印刷中、No. 3は校正中。今年度の投稿件数は10月2日現在32編、他に特集号(Marine Geochemistry)原稿11編。GJ論文がGeological Abstractに掲載されるように

なった。

(2) 地球化学(金森評議員)

編集委員が、金森悟委員長、小椋和子、田中 剛、崎隆一、水谷義彦各委員に決まった。Vol. 24, No. 1は印刷完了、No. 2は編集中国。

(3) ニュース(高野評議員)

No. 123は12月上旬に配布できるように準備する。

2-4 行事

(1) 1990年度新潟年会(鈴木評議員)

10月3日から5日新潟大学教養部で4会場と特別講演会場とを用いて行う。講演件数は、一般172件、課題35件、ポスター22件の計229件である。

(2) 1990年WPGM金沢会議(清水評議員)

8月21-25日に開催され、全参加者は1070名であった。なお、地球化学会分担金は10万円であった。

(3) 地球惑星科学関連学会連絡会(清水評議員)

7月31日に発足し、運営要項が決められた。

(4) 地球惑星科学関連学会1991年合同大会(清水評議員)

1991年4月2-5日に、共立女子大学八王子校舎にて開催。共通セッションと固有セッションとから成り、地球化学会は春季シンポジウムを固有セッションで行う。地球化学会が主導する共通セッションをぜひ行いたいので、テーマを会員から募っている。

(4) 1991年度愛媛年会(立川評議員代理川辺岩夫副)

1991年10月愛媛大学で行う。課題講演は、地球環境を検討中。

2-5 会員問題検討委員会(脇田副会長)

10月4日に第2回委員会を開く予定。年会期間中に新会員勧誘を行う。

2-6 学術会議

(1) IGBP 拡大分科会(角皆評議員)

IGBP が実行段階に入り、拡大分科会は解消した。

3. 審議事項

3-1 入退会承認

1990年6月1日から7月31日までの入会退会は、以下の通り承認された。

入 会 (25名)

正会員 (23名): 濱崎聡志、福島美智子、八野祐二、森永連男、西川雅高、殿内重政、尾形亜津美、オスワルド M.、ゴータム P.、内藤 耕、松田博貴、向井人史、藤本光一郎、(以下学生) 西岡澄濃、新村太郎、生田直子、原田尚美、妹崎 元、中塚 武、中村弥生、北島富美雄、永峰康一郎、山口 学、賛助会員 (2名): 大阪ガス(総企画部 (5口)、丸

文(第3事業部 (1口))。

退会 (正会員15名): 笹本和博、高谷尚人、広渡文利、渡辺栄次、小泉盛人、中田清志、西原元男、篠崎征夫、滝本幹夫、小林 功、松本 勝、西山健二、BARRON L.M.、DESSAU G.、PLIMER I.R. またその異動は、以下の通りである。

国内→海外: 白木亮司、武蔵正明(学生)

学生→一般: 森山純子、平田岳史

この結果、会員数は以下のようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1990年6月1日	911	16	5	932
入 会	23	2	0	25
退 会	15	0	0	15
1990年7月31日	919	18	5	942

学生 63、在外 35を含む

3-2 1990年度総会議事次第、および総会に提出される案件

幹事会が提出した総会議事次第案が了承された。総会に提出された1989年度事業報告、1990年度事業中間報告、1991年度事業計画、1989年度会計報告(第2回評議員会にて承認済み)、1990年度会計中間報告、1991年度予算案が審議され、原案どおり了承された。

3-3 日本学術会議第15期会員選挙に関する案件

日本地球化学会から届出る会員候補者1名、推薦人2名、同予備者1名を投票(会員候補者は単名、推薦人は2名連記)で選んだ。投票結果は、会員候補者: 脇田宏(8票)、増田彰正(5)、(以下略)、推薦人: 綿坂邦彦(9票)、増田彰正(8)、松尾禎士(5)、一國雅巳(4)、(以下略)であり、会員候補者として脇田宏副会長、推薦人として綿坂邦彦会長、増田彰正会員、同予備者として松尾禎士会員を届出ることとなった。

3-4 日本学術会議、地球化学・宇宙化学研究連絡会との合同将来計画委員会の発足について

日本学術会議、地球化学・宇宙化学研究連絡委員会(増田委員長)から地球化学・宇宙化学の推進策を検討するワーキンググループに地球化学会が対応して欲しいと要請があり、審議の結果、合同の将来計画委員会を発足させることが了承された。委員長には脇田副会長があたり、委員として研連から角皆、石渡両委員、学会から海老原、松田両評議員、和田秀樹会員(静岡大学)、平田岳史会員(地質調査所)の6名があたることが了承された。

3-5 日本地球化学会授賞規程、受賞者選考細則の改正

日本地球化学会授賞規程、受賞者選考細則見直し委員会(脇田委員長)から提案のあった授賞規程、選考細則

の改正案について、審議を行った。授賞規程は原案通り、選考細則は原案を一部手直しの上、承認された。改正点は、以下のとおりである。

	改 正 前	改 正 後
日本地球化学会授賞規程		
第4条	本会正会員 原則として、 授賞の期日 満35歳以下	本会会員 (削除) 授賞年度の4月1日 満35歳未満
第10条	1987年1月1日	1990年10月2日

日本地球化学会学会賞等受賞者選考細則

2.	その年度の <u>第一回の</u> 評議員会	<u>前年度の</u> 評議員会
5.	<u>3月末日</u> 選考委員会 推薦書 <u>推薦理由書、説明資料</u> (条文の後に追加)	<u>1月末日</u> 受賞者選考委員会 <u>所定の用紙を用いた推</u> <u>薦書</u> (削除) <u>推薦は自薦、他薦を問</u> <u>わない。</u>
8.	(条文の前に追加) 総会終了後に	<u>授賞日は総会の日とし、</u> <u>総会時に</u>

3-6 学会賞等受賞者選考委員会の委員選出

日本地球化学会授賞規程、受賞者選考細則の改正が承認されたことにより、1991年度の学会賞等受賞者選考委員会の委員の選出を行った。5名連記の投票の結果、脇田 宏(14票)、松久幸敬(11)、松尾禎士(10)、角皆静男(8)、酒井 均(7)の各氏が選出され、各氏が会長から委員長に指名された。なお、欠員が出た場合には、増田彰正(6)、一國雅巳(4)、松田准一(3)の各氏が、順次繰上がることとなった。

1991年度第1回評議員会議事録要旨

1991年度第1回評議員会は、2月16日15時より東京大学教養学部で開かれ、出席者は綿坂会長を始め17名であった。以下に議事の概要をまとめる。正式の議事録は、次回評議員会で承認されたのち、ニュースに掲載の予定である。

1. 庶務、会計、編集、行事に関する報告があった。

1992年春季シンポジウムは、地球惑星科学関連学会1992年合同大会に参加する形で、4月6日-9日の京都大学教養学部で開催の予定である。

2. 将来計画委員会は、本年の愛媛年会の前日と期間

中に、地球化学振興のためのシンポジウムを企画している。

3. 1990年8月1日から12月31日までの入会30名（正会員29名、賛助会員1名）退会20名（名誉会員1名、正会員19名）が承認された。この結果、会員数は12月31日現在、正会員929名（学生71名、在外34名を含む）、賛助会員19名、名誉会員4名、合計952名となった。
4. 名誉会員推薦に関する内規が改正され名誉会員推薦委員会が発足した。（改正された新内規は、本ニュースに掲載されています。）
5. 日本地球化学会受賞規程、受賞者選考細則の改正案にもとづき、受賞候補者の推薦を募集したが、応募件数が昨年と同じく少なかった。この問題について多くの意見交換がなされた。

名誉会員推薦に関する内規の改正

1991年2月16日の評議員会において、名誉会員推薦に関する内規の改正が承認されましたので、以下に全文を示します。

名誉会員推薦に関する内規

（1979年9月30日 評議員会承認）

改正 1991年2月16日

- 第1条：名誉会員候補者は、名誉会員推薦委員会によって推薦された者の中から、評議委員会における無記名投票によって出席者の2/3以上の賛成を得て決定される。
- 第2条：名誉会員候補者は評議員会によって総会に提案され、承認を受け、名誉会員となる。名誉会員には名誉会員証を贈呈する。
- 第3条：名誉会員推薦委員会は、会長または副会長経験者若干名、評議員若干名、副会長とから構成され、副会長が委員長の任に当たる。委員会委員は評議員会の承認を経て、会長が委嘱する。
- 第4条：名誉会員は原則として10名を越えない。
- 附則：本内規は1979年9月30日より発効する。

新会員紹介（1990年8月1日～12月31日分）

正会員（29名）（Sは学生）

池田英史 電力中央研究所
伊藤和男 大阪府立工業高等専門学校工業化学科
溝口次夫 国立公害研究所計測技術部分析室
太田久仁雄 動力炉・核燃料開発事業団中部事業所
瀬尾俊弘 動力炉・核燃料開発事業団中部事業所

平岡義博 京都府警察科学捜査研究所化学科
園田和彦 ㈱志賀ボーリング地質調査部
武内富二夫 ㈱志賀ボーリング
田辺信介 愛媛大学農学部
脇本忠明 愛媛大学農学部生物資源学科
柴正敏 弘前大学理学部地球科学科
三瓶良和 島根大学理学部地質学教室
橋本伸哉 東京水産大学海洋環境学講座
森下祐一 通産省工業技術院地質調査所鉱物資源部
田中雅文 ㈱日本気象協会北海道本部網走支部
石倉文子 弘前大学医療技術短期大学部
芳賀信彦 姫路工業大学理学部生命科学科
柳澤文孝 山形大学理学部地球科学教室
矢吹貞代 理化学研究所
S小谷祐司 岡山大学大学院理学研究科
S石井暁 愛媛大学理学部地球科学大学院
S三島康史 香川大学農学部海洋生化学研究室
S李承求 東京大学理学部化学教室
S山下勝行 九州大学理学部地球惑星科学科
S斎藤元治 岡山大学地球内部研究センター
S南秀樹 東海大学海洋学部海洋学科海洋化学研究室
S矢板毅 青山学院大学理工学部
S北川浩之 名古屋大学水圏科学研究所
S市橋秀樹 愛媛大学農学部環境保全学科環境化学研究室

賛助会員（1名）

新潟県衛生公害研究所（1口）

Geochemical Journal 特集号

「希土類元素の挙動からみた地球・惑星系」 原稿募集

本年4月2～5日八王子で開催された地球惑星科学関連学会1991年合同大会において、地球化学会は火山学会・地震学会とともに標記共通セッションを持ちました。セッションの主旨は日本地球化学会ニュース123号で紹介しましたように、「日本の地球化学者が世界に先がけて考察した地球科学の道具“希土類元素存在度パターン”が生まれて30年になる。隕石と頁岩の関係から始まったその解釈は、先太陽系時代の超新星から生体内でのトレサにまで拡大されてきた。ここに、原始太陽系の形成と分化、マントルと地殻におけるマグマの生成と分化、さらには岩石圏と水圏・生物圏の相互作用、……など希土類元素を中心とした微量元素の挙動から把握される地球・惑星科学的事象について、観測・実験・理論の三面から議論を進める」というものでした。

今回の発表では、その企画の段階から、同様なテーマでGeochemical Journalに特集号を出したらどうか、との意見がありました。合同大会のおり、演者の方々の御意見を伺ったところ、多くの賛同を得、1992年第2号を目標に特集号を組むことにしました。御存知のようにG.J.は開かれた雑誌で、今回の合同大会で発表をされなかった方々からも標記分野の論文を募集することになりました。特集号のメリットは同じ分野の論文が1つの冊子に集中することにより、より多くの読者が得られるところにあります。奮って投稿をいただけるよう案内申し上げます。

①G.J. 1992年2号（1992年6月頃発行予定）とする。

②特集の領域は合同大会講演の募集領域とするが厳密な区分はしない。

③特集号ではあるが、投稿規定、論文査読はG.J.一般論文と同一とする。したがってレビュー講演をお願いした方でも論文はオリジナルなものであることが必要。

④講演者以外からの論文も歓迎する。講演者が投稿する場合、論文の内容が講演と大きく異なっても、また全く別の内容でもかまわない。

⑤原稿の〆切は9～10月頃とし、完成原稿は1月末頃までとする。特集号の論文として投稿いただいても、修正などで期間内に印刷原稿とならない時は一般号へまわる場合もある。

⑥田中および富樫がAssociate Editorとして編集にたずさわる（査読者の決定、査読者と著者との間の橋渡し、採否についての助言をする）が、論文の採否の最終判断は松久編集長とする。（従来2回特集号を出しているが、約15%の論文は却下されたそうです。）

⑦特集号への印刷を希望される方は、通常どおりのG.J.への原稿に“特集号を希望”と印し、松久編集長あて原稿をお送り下さい。

不明の点がありましたら下記へ御連絡下さい。

田中 剛（名古屋大学理学部地球科学科）

052-781-5111（3558）

富樫茂子（地質調査所同位体地学課）

0298-54-3557

「地球化学の振興に関するミニシンポジウム」 のお知らせ

近年、地球温暖化、大気中のCO₂上昇、環境汚染の進行など地球規模の環境変化の問題が研究者のみならず広く社会的にも問題となっています。問題の解明と将来予測には地球の成立、自然制御の仕組みなど、地球に

についての深い理解が必要であることが分かってきております。地球環境問題から離れても、今日地球科学研究の重要性が認識されてきています。その中で、地球化学は基幹の一つとなるべき学問であり、さらに一層の振興を図る必要があります。

第14期地球化学・宇宙化学研連委では発足時から、わが国の地球化学の振興の方策、若い研究者をどのようにして育てるかなど審議、模索してきました。この度、2月22日の委員会で第一歩を踏み出すことを決めて、日本地球化学会将来計画委員会との共催で表記のミニシンポジウムを開催することにいたしました。活発な議論を期待しておりますので、関心のある方々はふるってご出席下さい。（文責 石渡良志）

地球化学の振興に関するミニシンポジウム

主催：地球化学・宇宙化学研連委員会

日本地球化学会将来計画委員会

日時：1991年6月24日（月） 午後1時～5時まで

場所：日本学術会議第4部会議室

1. 開会のあいさつ 増田彰正（地球化学・宇宙化学研連委員長）
2. 報告と提言
大学教育の経験から 立川 涼（愛媛大学）
外国で教育を受けた経験から 高柳和史（中央水産研究所）
大学院教育の経験から 松尾禎士（電気通信大学）
3. 関連分野からのコメント
地質学の立場から 秋山雅彦（信州大学）
隕石学の立場から 高岡宣雄（九州大学）
地球物理学の立場から 藤井直之（名古屋大学）
生物海洋学の立場から 小池勲夫（東大海洋研究所）
4. 総合討論
5. 閉会のあいさつ 脇田 宏（地球化学会
（今後に向けて） 将来計画委員長）

1991年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」 の受賞候補者および研究助成候補者の推薦 依頼について

下記の推薦依頼がありました。

〔三宅賞〕

1. 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は、1年1件（1名）とします。
4. 規定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題

目、推薦理由(400字程度)主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務所まで送り下さい。

[研究助成]

1. 研究助成は地球化学の研究者で、海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者、ならびに海外における学術調査研究などに参加する者に対して行われます。
2. 助成金は1件10万円とし、年に3件とします。
3. 規定の用紙に推薦候補者(各締切日において満40才迄とする)のシンポジウム出席については略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、開催年月日)、論文題目、推薦理由等を、海外学術調査に関しては、略歴、研究業績、調査地(国名、地域名)、調査目的・計画、推薦理由、同行者などを記入して、協会事務所まで送り下さい。
三宅賞の贈呈および研究助成者の発表は、1991年12月7日(土)、東京で行います。

申込締切日は、三宅賞は、1991年9月3日(火)、研究助成は、第1回締切1991年9月3日(火)、第2回締切1992年1月末日。

地球化学研究協会

〒166 東京都杉並区高円寺北 4-29-2-217

電話 03-3330-2455 (FAX 兼用)

IGC ニュース No. 6

29th IGC 事務局 (1991年2月)

第6回組織委員会開催

平成3年1月30日(水)午後2時~4時10分にわたり、東京大学総合資料館会議室において、第6回組織委員会が開催された。以下に議事録の抜粋をお知らせする。なお討議資料や質疑については、各学・協会代表の組織委員あてに詳しい議事録を送付してあるのでお問合わせ下さい。

出席者: 有田忠雄(和達清尾夫代理)、佐藤 正、石原舜三、井上英二、垣見俊弘、衣笠善博、小倉義雄、小出 仁、近藤皓二、佐倉保夫、斎藤茂幸(橋本好一代理)、嶋崎吉彦、砂川一郎、鈴木尉元、田切美智雄、田中義則、床次正安、西村進、野沢 保、藤井敬三、星野一男、本座栄一、鞠子 正、横山卓雄、米倉伸之、吉田鎮男(久城育夫代理)、渡辺 隆、和知 登(青木 豊代理)。

◎報告事項

<組織委員長報告>

1. 1月16~25ブラジルのサンパウロで開催されたIUGS 執行委員会に参加し、29th IGC の準備状況

について報告し、おおむね了承された。参加費が高すぎるとの意見が前回のIUGS から出されていたが、了解してもらった。政府予算等の都合で事前登録の期限までに予算が確保できないような場合でも、事前に連絡があれば割引制度をみとめる等考慮したい。

<事務総長報告>

1. 昨年12月31日段階でのファースト・サーキュラーのアンケート回収状況は合計4,078通であった。回答数のもっとも多かったのは、国別ではソ連(667)、2番目は日本(616)、地域別ではアジアであった。実際の参加者は最終回答数の約8割とすれば、4,000人に近くなるであろう。

<募金委員会報告>

1. 第1回募金委員会を1990年12月17日に学士会館で開催した。これに先立ち従来の募金準備委員会を解散した。
2. 地学協会内に募金財務事務所を開設した。同事務所の電話番号は03-5275-7344。また、募金口座を富士銀行麹町支店に開設した。
3. 経団連や電事連、全地連等と募金額や募金方法について具体的な打ち合わせを進めている。また募金活動を全国的に行うため、東北、中部、関西、中国、四国、九州に募金体制を構築中。さらに北海道、北陸にも設置すべく人選中。
4. 学会・個人募金についても、方法を検討中。

<財務委員会報告>

1. 平成2年10月1日から同12月31日までの会計を報告し、了承された。

◎審議事項

1. 副会長設置について
和達会長の意向もあり、副会長を2名程度新設することにした。
2. セカンド・サーキュラー発行について
最終原稿について、記載事項、レイアウト等を審議し、了承された。

セカンド・サーキュラー発行

1月30日に開かれた第6回組織委員会において、セカンド・サーキュラーの原稿が審議され承認された。これをうけて現在事務局では、4月1日発行を目標にサーキュラーの印刷に取り組み中。ファースト・サーキュラーとくらべて大きく変わった内容は以下のとおり。

今回の表紙は写真のように、葛飾北斎「富嶽三十六景」から、「神奈川沖浪裏の富士」をバックに作成された。カラーは前号と同じもえぎ色をベースにして統一している。総ページは前号のおよそ4倍になる。

会期中の科学プログラムとしては、3つの特別シンポジウムと3つの学際的なシンポジウム、そして24の分野別セッションが提示されている。その他2つのレクチャー・シリーズ、8つのワークショップ、5つのショート・コース、9つのユース・コンGRES、科学展示、科学映画、そして22コースの1日~半日の観光ツアーなど、盛りだくさんな催しが用意されている。
サーキュラーに挟み込まれた様式[A]の登録用紙を用いて、1992年2月1日までに申し込むと、下表のような割引の特典がある。

	1992年2月 1日以前	1992年2月 2日以降
会議参加者	¥45,000	¥50,000
年長者(誕生日が1922.7.30 以前の参加者)	20,000	25,000
学生(1992年度)	15,000	17,000
同伴者	18,000	20,000
非出席者(出版物のみ)	15,000	15,000

上記の科学プログラムの発表希望者は様式[C]にしたがってアブストラクトを作成し、12月1日までに送ること。原稿は50%に縮小してそのまま写真製版される。

ファースト・サーキュラーではA巡検(会期前)25コース、C巡検(会期後)37コースが提示されたが、セカンド・サーキュラーではそれぞれ17コース、25コースに縮小された。逆にB巡検(会期中)は18コースから25コースに拡大された。参加希望者は様式[B]の申し込み用紙に第2希望まで記入し、10,000円の登録料をそえて、1992年2月1日までに申し込むこと。

セカンド・サーキュラーはファースト・サーキュラーの回答者全員に送られますが、その他でもご希望の方は、一部につき郵便切手260円をそえて下記にお申し込み下さい。また、今年国際研究集会にご出席の方には、是非サーキュラーを持ち込んで宣伝していただきたいと思いますので、事務局にご連絡下さい。以上運営資金に困難が生じておりますので、御協力をお願いします。

〒305 筑波学園郵便局私書箱65号

第29回万国地質学会議事務局

(29th IGC 事務局)

*地質調査所の「地質ニュース」では毎月号に「IGC 事務局ニュース」を連載しています。併せてご覧下さい。

1991年度質量分析連合討論会

主催: 日本質量分析学会

共催: 日本地球化学会、ほか

会場: 1991年5月15日(水)~17日(金)

会場: 中央大学駿河台記念館

東京都千代田区神田駿河台3-11-5

電話 03-3292-3111

プログラム

第1日 5月15日(水)

【通常講演】(9:00~10:00)

1-O-1 電子ビーム衝撃による表面分析の試み

° 関 節子(拓殖大工)、住谷弘幸・田村一二三(日立計測)、岩本 寛(日立那珂)

1-O-2 重水素化マトリックスを用いた[RuCl₂(bpy)₂]および[Ru(CN)₂(bpy)₂]錯体のLiquid SIMS スペクトル

° 田中幹夫・永井 俊(日医大化)、三木瑛一・石森達二郎(立教大理)

1-O-3 MO-B₂O₃(M=Sr, Ba)系化合物の蒸発と熱化学的性質

° 朝野 満・康 智行・原田敏夫・水谷保男(京大原子エネルギー研)

1-O-4 食品添加シリコン消泡剤のサーモスプレイ質量分析による検出と同定

° 西村俊秀・青木優規美・檜山行雄(アップジョン筑波総研)

【シンポジウム】(10:10~12:15)

【生物活動と地球環境: 軽元素同位体比の変動から物質の流れを解説する】

1-S-1 温室効果ガスの同位体比の変動

° 吉田尚弘・米口敬浩・岩月輝希(富山大理)

1-S-2 南アラビアの降水の¹⁸O/¹⁶O, D/H 特性

° 牛木久雄(理研)

1-S-3 土壌中の浸潤過程における水移動の不均一性

° 倉持寛太・佐久間敏雄(北大農)

1-S-4 酢酸の分子同位体分布とその意義

° 杉本敦子(三菱生命研)

1-S-5 キャピラリー GC/炭素同位体分析法の地球化学への応用

° 石渡良志・河村公隆(都立大理)、和田英太郎(三菱生命研)

【シンポジウム】(13:15~15:20)

【生物活動と地球環境: 軽元素同位体比の変動から物質の流れを解説する】

1-S-6 アミノ酸の炭素・窒素分子間同位体分布: 食物

- 連鎖モデルとの関係
 ° 南川雅男・江川早穂(三菱生命研)
- 1-S-7 植物窒素代謝における窒素同位体分別
 ° 米山忠克(農研センター)
- 1-S-8 炭素・窒素安定同位体から見た湖沼の物質循環
 ° 吉岡崇仁(信大理)
- 1-S-9 安定同位体比の変動から解釈される生物および人間活動による物質流と環境変化—南極、日本、ジャマイカにおけるケーススタディー—
 ° 水谷 広(三菱生命研), D.M. McFarlane (L. A. 自然史博物館), 蒲谷裕子(三菱生命研)
- 1-S-10 窒素、炭素安定同位体比を用いた海洋の物質循環の研究
 ° 才野敏郎(東大海洋研)
- 【通常講演】(15:25~16:10)
- 1-O-5 FT-ICR セル内のイオンの運動解析Ⅲ—加速交流電場の周波数掃引方向による影響
 ° 藤原 真・三浦健児・村松靖啓・井上雅夫(電通大)
- 1-O-6 大気圧マイクロ波プラズマをイオン源とした質量分析法
 ° 志村聡司・岡本幸雄(日立中研)
- 1-O-7 可変像倍率質量分析計のイオン光学
 ° 松田 久(阪大名誉教授)
- 【ポスター発表】(16:15~18:00)
- 1-P-1 哺乳動物の AMS-¹⁴C 年代測定—ナウマンゾウ、オオツノシカを中心として—
 ° 中井信之・有田陽子(名大理), 中村俊夫(名大年代測定資料センター)
- 1-P-2 ⁸¹Kr を用いた南極産ユークライトの落下年代測定
 ° 長尾敬介・中村弥生(岡山大地球内部研究センター)
- 1-P-3 Sr, Nd 同位体によるユレイライト隕石 MET-78008 の年代学的研究
 ° 高橋和也(理研), 増田彰正(東大理)
- 1-P-4 同位体比の変動からみたオクロ天然原子炉内での核分裂起源核種の移動
 ° 日高 洋・増田彰正(東大理)
- 1-P-5 ウランの自発核分裂および中性子誘導核分裂の Ru 同位体比に及ぼす影響
 ° 狩野直樹・日高 洋・増田彰正(東大理)
- 1-P-6 Re-Os 年代決定法のもリブデナイトへの応用に関する分析化学的研究; 特に同位体平衡の問題について
 ° 鈴木勝彦・其 魯・清水 洋・増田彰正(東大理)

- 1-P-7 試料混合導入システムを用いた高周波誘導結合プラズマイオン源質量分析による微量元素の分析
 ° 平田岳史(地質調査所), 増田彰正(東大理)
- 1-P-8 レーザー ICP 質量分析装置による縄文土器の分析
 ° 斎藤 努(国立歴史民族博物館), 上野佳也(東大文), 小野正文(山梨県埋蔵文化財センター), 山形真理子(東大文), 田口 勇(国立歴史民族博物館)
- 1-P-9 ICP 磁場型高分解能質量分析の開発
 ° 岩永光恭・大塚紀一郎・久保田英次(日本電子), 伊藤裕康・植弘崇嗣・森田昌敏(国立環境研)
- 1-P-10 超高アバダンス感度 TIMS MAT 262 PRQ 概要と性能
 ° 岡野 修・徐 紅・松本 晋(フィニン・マット)
- 1-P-11 超低加速質量分析の試み
 ° 伊藤啓行(阪大教養), 交久瀬五雄(阪大理)
- 1-P-12 フラッシュソープション CIMS 法の評価
 ° 代島茂樹・飯田芳男(成蹊大工)
- 1-P-13 FT-ICR による C₃H₆ 系のイオン—分子反応
 ° 片倉久雄(横河電機), 高橋 晃・鈴木康夫・井上雅夫(電通大)
- 1-P-14 Ray tracing 法による減速レンズの設計
 ° 石原盛男(日本電子), 松尾武清(阪大教養)
- 1-P-15 アレイ検出を用いた高感度分析
 ° 国広文夫・石原盛男・田中孝治(日本電子), M.H. Frey・R.B. Cody(JEOL USA)
- 1-P-16 ESI-MS のドリフト電圧 CID によるフラグメンテーション
 ° 加藤義昭・三村忠男・松村和美・沼尻陽子(日立那珂)
- 1-P-17 LC/ESI によるアゾ染料の測定
 ° 三村忠男・加藤義昭・松村和美(日立那珂)
- 1-P-18 大気圧噴霧 LC/EI による無極性、弱極性物質の測定
 ° 沼尻陽子・加藤義昭・田口安男(日立那珂)
- 1-P-19 大試料量注入によるキャピラリー GC/MS—Negative CI による環境汚染物質の分析—
 ° 牧野将治(日本電子), 貝瀬光男(日本電子データム), 片山裕子・樋口哲夫(日本電子), 渡辺忠一(ダウ・ケミカル日本)
- 1-P-20 TLC プレート上での試料濃縮法を用いた FABMS
 ° 岡 尚男・猪飼蒼友・近藤文雄・河村典久

早川順子(愛知衛研), 原田健一・益田勝吉・鈴木真言(名城大薬)

第2日 5月16日(木)

【通常講演】(9:00~11:50)

- 2-O-1 リフレクトロン TOF 質量分析システムを用いた芳香族分子クラスターの蒸発・解離過程の研究
 ° 篠原久典・落合智弘・三輪昌彦・小林 誠・佐藤博保(三重大工)
- 2-O-2 分子イオンの統計的分解と非統計的分解
 ° 西村俊秀(アップジョン筑波総研), 丹羽吉夫(化技研)
- 2-O-3 エレクトロスプレーによる多価イオンの生成機構
 ° 久高一郎・平岡賢三(山梨大工)
- 2-O-4 有機ケイ素のイオン化によるフラグメンテーション過程の量子化学的研究(I)
 ° 竹内孝江・小林容子・横田佳子・山本正夫(奈良女子大理)
- 2-O-5 偶数電子イオンにおける転位を伴う開裂機構Ⅱ. α -アミノ酸エステル MO 法による検討
 ° 池田芳浩・小西英之・中田尚男(愛知教育大)
- 2-O-6 FABMS によるアルキルアンモニウムカチオンのキラリティーの識別—修飾単糖類の分子設計に基づく新機能創出—
 ° 澤田正實・静間基博・高井嘉雄・山田 等・花房昭静(阪大産業科学研)
- 2-O-7 FAB-MS のイオン化(IV)—MH⁺ イオンの生成—
 ° 高山光男・野村太郎(東邦大薬)
- 2-O-8 有機ケイ素化合物のメタステーブル分解(VII). トリメトキシメチルシランとトリエトキシメチルシラン
 田島 進・飛田成史・° 荻野和夫(群馬高専), 田部井栄一・岡田文夫・森 滋(信越化学リサーチセンター)
- 2-O-9 [G+BX+U]⁺ のフラグメンテーションの研究
 竹内 健・° 伊佐公男・平井香織(福井大教育), 小西英之(愛知教育大)
- 2-O-10 ウミホタルルシフェリン類似体のマスマスペクトロメトリー
 ° 米田道明・西淵真敏・大谷新樹・辻本和雄・大橋 守(電通大)
- 2-O-11 N-アシルラクタム類縁体のフラグメンテーション

ソーアシル部分にフェニル基のない系における二重水素転位相当イオンの出現—

° 山岡寛史・堀 伊津美(大阪女子大), 中山 充(大阪府大農)

【日本質量分析学会総会】(11:55~12:20)

【奨励賞受賞講演】(13:10~13:40)

レーザー多光子・飛行時間型質量分析法を用いた分子クラスターの研究

° 篠原久典(三重大工)

【特別講演】(13:50~14:50)

The D/H ratios in tree-cellulose and their implication to global warming

° Samuel Epstein(Cal. Tech., U.S.A.)

【通常講演】(15:00~16:00)

2-O-12 立体異性体の LC/APCI マスマスペクトル

° 橋本圭二・隅田芳男・寺田俊二(京薬大)

2-O-13 プロリン含有ペプチド誘導体の負イオン FABMS におけるフラグメンテーション

恒松英明・° 花園弘志・中島しづ子・吉田史郎・山本孫兵衛(福岡大薬), 磯部隆一(九大薬)

2-O-14 ESI(エレクトロスプレーイオン化)による低分子量、高極性化合物の測定

° 松村和美・加藤義昭・三村忠男・沼尻陽子(日立那珂)

2-O-15 SFC/FABMS によるポリマーの分析

° 松浦健二・野嶋一哲(日本電子応研)

【ポスター発表】(16:00~17:45)

2-P-1 NIST MSDB 1990年版プロファイル—1983年版との比較—

° 和知孝宣(DBS), 有井 忠・高田義博・岸 證(理学電機), 前田浩五郎(東京家政学院筑波短大)

2-P-2 NIST-MSDB に於ける CAS 化合物名の側鎖部分(その2)登録済み基本単位による自動構造解析の試み

° 仲久保正人・仲久保公子(筑波研究学園専門短大), 笠間健嗣(東医歯大機器分析), 前田浩五郎(東京家政学院筑波短大)

2-P-3 CAPS パソコンプログラム

° 丹羽吉夫・石川啓一郎(化技研)

2-P-4 蛋白質 ESI マスマスペクトル解析用デコンボリューションソフトウェアの開発

° 谷川健一・加藤義昭・三村忠男・松村和美(日立那珂)

2-P-5 FAB における分子イオン種の生成過程—分子軌道法を用いた基礎検討—

- ° 嶋原 淳・市川 紘(星薬大物理)
- 2-P-6 大気圧スプレー(APS)イオン化におけるアミノ酸分子イオンの生成過程
° 高田安章(日立中研), 梅村雄太・伊藤治彦・朽津耕三(長岡技科大), 平林 集・神原秀記(日立中研)
- 2-P-7 FAB-MS のイオン化(III) - M^+ イオン生成と化学構造 -
高山光男・羽野芳生・深井俊夫・° 野村太郎(東邦大薬)
- 2-P-8 アルカリ金属付加型イオンのフラグメンテーションイオン化位置の考察 -
° 椎名園子・絹巻明生(田辺製薬有機化学研)
- 2-P-9 有機金属化合物の表面電離スペクトル: Carbonyls, Acetylacetonates, Lithium amides
° 藤井敏博・石井宏征(国立環境研)
- 2-P-10 MIKE スペクトル法によるアニソイルフロライド分子イオンの分子イオンの分解機構
田島 進・飛田成史(群馬高専), ° 三谷元宏・阿久澤和子・沢田英夫・中山雅陽(日本油脂筑波研)
- 2-P-11 アルキルジシランのイオン化による分解反応過程(3)
° 田中基子・竹内孝江・山本正夫(奈良女大理)
- 2-P-12 S_1 vibronic band を選択励起したハロベンゼンのMPI-TOF-MS スペクトル
伊藤好光・° 沼田 靖・石井義人・鈴鹿 敢(日大工)
- 2-P-13 N-アシルラクタム類緑体のフラグメンテーションにおける転位水素の分子内受け皿としての ω -チオカプロラクタムの評価 - 対応するオキソ体との比較 -
° 山岡寛史・堀 伊津美・松本裕子(大阪女大), 中山 充(大阪府大農)
- 2-P-14 2-Methylcyclopentanone のEI マススペクトルのフラグメンテーション
° 川本三紀子・竹内孝江・山本正夫(奈良女大理)
- 2-P-15 二価陽イオンの構造とフラグメンテーション V. フェノール類
村田 譲・° 小西英之・中田尚男(愛知教育大)
- 2-P-16 有機高分子化合物の熱分解「TG-DTA/MS による解析」
° 有井 忠・高田義博(理学電機), 和知孝宣(DBS), 岸 証(理学電機), 前田浩五郎(東

- 京家政学院筑波短期大)
- 2-P-17 FAB MS における金属錯体のイオン構造とフラグメンテーション
° 黒野 定・小西英之・尾嶋平次郎(愛知教育大)
- 2-P-18 金属ポルフィリン誘導体の FAB マススペクトロメトリー - tetraphenylporphyrin (TPP) 類について -
° 竹田直仁・立松 晃・鈴木真言(名城大薬), 小西英之(愛知教育大), 阪田 功(東洋薬大)
- 2-P-19 FAB MS における尿素分子の異性化機構の検討
° 南野 智・小西英之(愛知教育大), 伊佐公男(福井大教育)
- 2-P-20 サーモスプレー LC/MS による天然色素の分析と誘導体による感度向上の検討
° 柴山伸子・白川朝子・山岡亮平・佐藤昌憲(京都工繊大)
- 【懇親会】(18:00~21:00)
- 第3日 5月17日(金)
【通常講演】(9:00~10:15)
- 3-O-1 ESI-LC/MS/MS の試作
丹羽吉夫・° 石川啓一郎(化技研)
- 3-O-2 エレクトロスプレーイオン化法の二重収束質量分析計への応用
° 尾崎悦夫・大塚紀一郎・貫名義裕(日本電子), B.D. Musselman, R.B. Cody, D.B. Kassel(JEOL(USA))
- 3-O-3 大気圧下における複数のイオン源を備えた液体クロマトグラフィー/質量分析法の開発
° 坂入 実(日立中研), A.L. Yergey, N.E. Viera, D. Vicchio(NIH)
- 3-O-4 大気圧噴霧 LC/MS インターフェース, LC/ESI, LC/APCI, LC/EI の開発
° 加藤義昭・矢野正義・三村忠男(日立那珂)
- 3-O-5 磁場形質量分析計用 ESI(エレクトロスプレーイオン化)の開発と応用
° 三村忠男・松村和美・沼尻陽子・矢野正義・加藤義昭(日立那珂)
- 【ポスター発表】(10:20~12:05)
- 3-P-1 1000 amu 以上の HR-FAB 測定の精度向上について
° 石崎文子・橋本 豊(日本化薬総研)
- 3-P-2 LC/ESI-MS におけるクロマト条件の検討
° 松村和美・加藤義昭・三村忠男(日立那珂)
- 3-P-3 LC/ESI による抗生物質, 生薬の測定

- ° 谷川健一・加藤義昭・三村忠男・松村和美(日立那珂)
- 3-P-4 LC/ESI-MS によるペプチド, 蛋白質の測定
° 加藤義昭・三村忠男・松村和美(日立那珂)
- 3-P-5 ESI-磁場形二重収束質量分析計による高極性物質の測定
° 矢野正義・加藤義昭・三村忠男・松村和美・沼尻陽子(日立那珂)
- 3-P-6 エレクトロスプレーイオン化によるバイオポリマーの分析
° 馬 丹・金井みち子・瀬田和夫(フィニガン・マット)
- 3-P-7 高分解能質量分析計とエレクトロスプレーイオン化法による高感度分析
° 白根義治・P. ドベルシュタイン・E. シュレーダー(フィニガン・マット)
- 3-P-8 生体高分子分析用大型質量分析計 V
° 桜井 達・伊藤啓行・松尾武清(阪大教養), 交久瀬五郎(阪大理), 和田芳直(大阪府母子医療センター), 松田 久(関西医大)
- 3-P-9 HSCCC と Frit/MS の結合
° 原田健一・鈴木真言(名城大薬), 岡 尚男・猪飼誉友・河村典久・早川順子(愛知衛研), 伊藤洋一郎(米 NIH)
- 3-P-10 HR-SIM によるシロアリ道するベフェロモンの種特異性の検討
° 所 雅彦・高橋旨象(京大木材研), 山岡亮平(京都工繊大), 雫石賢一(日立那珂), 中田豊哉(日立テクノロジー)
- 3-P-11 誘導体化したレチナール類似体の SIMS におけるフラグメンテーション
° 辻本和雄・長尾美昭・大橋 守(電通大)
- 3-P-12 液体イオン化質量分析による模擬原始大気実験生成物の分析(第3報) 微量核酸塩基同定法の検討
° 小林憲正・長谷川 励・赤池昌二・大森直之・小林利武・金子竹男・土屋正彦(横浜国大工)
- 3-P-13 EPA 酸化生物の FRIT-FAB LC/MS 法による分析
° 國領明彦(京都工繊大), 堀 正典(日東技術情報センター), 佐藤昌典・柄谷 肇(京都工繊大)
- 3-P-14 TSP-LC/MS/MS による薬物の抱合体の分析 - 分析条件の最適化検討 -
° 山口順一・小勝 順・諏訪俊男(大正製薬総研)

- 3-P-15 配糖体およびポリヒドロキシ天然物の FAB-MS による分析 - Na 付加イオンの解析 -
° 森崎尚子・小林久芳・岩崎成夫(東大応微研), 関根利一・斎藤和孝・村越 勇(千葉大薬)
- 3-P-16 FRIT-FAB LC/MS を用いたラン藻類中の microcystin の迅速同定法
° 近藤文雄・猪飼誉友・岡 尚男・石川直久(愛知衛研), 原田健一・鈴木真言(名城大薬)
- 3-P-17 LSIMS 及び GC/MS による Thromboxane A_2 receptor 拮抗薬(S-1452)の代謝物の構造決定
° 岩谷宏治・吉森丈夫・乗鞍 良・中西真智子・溝尻顕爾・渡辺文彦・成定昌幸・中川有造(シオノギ研)
- 3-P-18 アラニン系ジペプチドの CAD スペクトル
養輪潤子・° 伊佐公男・平井香織・面 登志子(福井大教育)
- 3-P-19 FRIT-FAB LC/MS を用いたペプチド系抗生物質の構造解析
° 猪飼誉友・岡 尚男・河村典久・早川順子(愛知衛研), 原田健一・鈴木真言(名城大薬)
- 3-P-20 遺伝子組換えヒトリゾチームの同定 - 多量の塩を含む微量タンパク質の精密分子量測定 -
丹羽吉夫・° 石川啓一郎・村本三智郎・地神芳文(化技研)
- 【通常講演】(13:05~16:00)
- 3-O-6 脂質の FAB CAD スペクトル
° 大橋陽子・永井克孝(東大医2生化)
- 3-O-7 渦鞭毛藻の生産する抗カビ成分アンフィジノールのタンデムマススペクトルによる構造解析
° 直木秀夫・藤田剛司(サントリー生物有機科学研), 佐竹真幸・村田道雄・安元 健(東北大農)
- 3-O-8 プロスタグランジン類の SRM 法による GC/MS/MS 定量分析
° 小林信博・中川明彦・中村皖一(三共分析代謝研)
- 3-O-9 ESI-LC/MS と LC/MS/MS によるペプチドの構造解析
° 馬 丹・金井みち子・瀬田和夫(フィニガン・マット)
- 3-O-10 アミロイド A 蛋白の酵素消化物分析へのマイクロ HPLC/MS の応用
° 高橋利枝(浜松医大機器センター), 馬場聡(浜松医大第二病理), 笠間健嗣(東医歯大

- 機器分析)
- 3-O-11 ESIMS, Frit-FAB LC/MS を用いた蛋白質の一次構造研究
 ° 古屋真美・明石知子・福原健一・平山和雄(味の素中研)
- 3-O-12 LC/MS, LC/MS/MS による難揮発性化合物の構造解析(3) Plasmaspray 法による反応の応用
 ° 中村健道・大木康子・名垣秀実・木下 武(三共分析代謝研)
- 3-O-13 コリスチンおよびその類縁化合物の構造解析
 ° 坂部輝御・大槻 暁・一氏哲雄・市川茂彰(旭化成解析センター)
- 3-O-14 FRIT-CI-LC/MS による血中メラトニンの定量
 ° 笠間健嗣(東医歯大機器分析)
- 3-O-15 LC/MS による高度不飽和脂肪酸含有油脂の分子種分析
 ° 堀 正典・奥田直雄(日東技術情報センター), 佐藤裕子(日東電工機能研), 小池誠治(旭電化工業食油研)

3-O-16 血清および滲出液中脂質の液体イオン化 MS による分析
 橋本雅樹・° 横山幸男・土屋正彦(横浜国大工)

【懇親会】 5月16日(木) 18:00~中央大学駿河台記念館 2階会議場
 会費 5000円

【参加費】 主催, 共催, 協賛学協会員 5000円
 (学生 3500円, 非会員 6000円, 要旨を含む)。

送金は郵便振替, 申し込みは文書郵送で行って下さい。

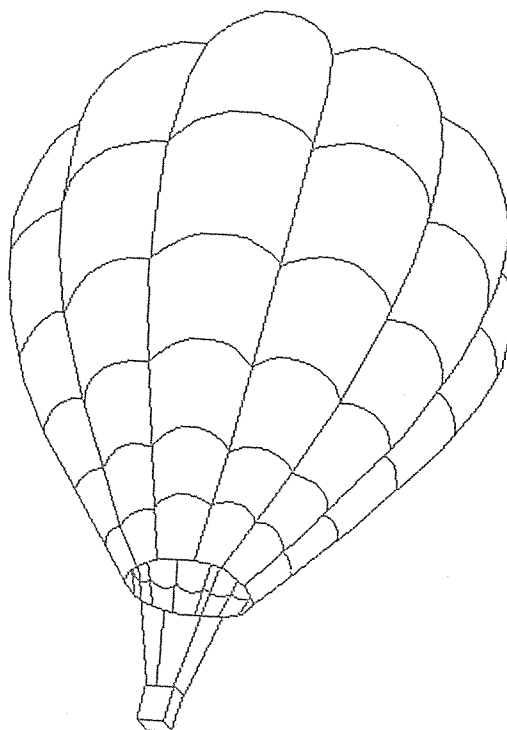
振込先: 日本質量分析学会91年度大会実行委員会

口座番号: 東京 4-546599番

【連絡先】 〒110 東京都台東区上野公園 7-20
 国立科学博物館 理工学研究部 島 正

TEL 03-3822-0111

FAX 03-3824-3298



日本学術会議だより №20

公開講演会成功裡に開催さる

平成3年2月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、例年どおり、平成2年度においても、主催の公開講演会を3回開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その講演会に加えて、本会議の国際的活動や最近公表された「委員会報告」などについてお知らせします。

平成2年度日本学術会議主催公開講演会

本会議は、本会議の会員が、学術の成果について広く市民と語り合う機会として、時宜にかなったテーマを選定して、毎年、公開講演会を開催している。本年度は、次の3回の講演会を開催したが、いずれも成功裡に終了した。

I 公開講演会「高度技術と市民生活」

標記講演会は、去る平成2年10月13日(土)13時30分~17時に、兵庫県加東郡社町の社町福祉センターホールで、約250人の聴講者を得て開催された。各演題と講師は、①「高齢化社会と高度技術」原沢道美(第7部会員, 東京通信病院院長), ②「消費生活と高度技術」正田杉(第2部会員, 上智大学教授), ③「地域振興と人間主導型高度技術」竹内啓(第3部会員, 東京大学教授)であった。

II 公開講演会「資源エネルギーと地球環境に関する展望」

標記講演会は、去る平成2年10月30日(火)13時~17時に、本会議講堂で、約330人の聴講者を得て開催された。各演題と講師は、①「人間と環境」大島康行(第4部会員, 早稲田大学教授), ②「エネルギーと環境」石井吉徳(第5部会員, 東京大学教授), ③「エネルギーと経済問題」剛武保夫(第3部会員, 立正大学教授), ④「エネルギーとCO₂対策」上之園親佐(第5部会員, 摂南大学教授)であった。

III 公開講演会「人間は21世紀を生きられるか」

標記講演会は、去る平成3年2月19日(火)13時30分~17時に、本会議講堂で約200人の聴講者を得て開催された。各演題と講師は、①「科学・技術・政策」杉本大一郎(第4部会員, 東京大学教授), ②「科学と人間一生存のための条件づくり」下山瑛二(第2部会員, 大東文化大学教授), ③「人間の適応能力とリスク」土屋健三郎(第7部会員, 産業医科大学長)であった。

いずれの講演会も、時期にあった、関心の呼ぶ企画であったため、外くの聴講者が来場する盛会となり、また、各講師の講演後の質疑応答では、聴講者から活発な質問や意見の開陳がなされ、まさに市民との対話の感があり、極めて有意義であった。

なお、これらの講演会については、後日、「日学双書」として、(財)日本学術協力財団から出版される予定である。

平成2年度二国間学術交流事業

本会議では、二国間学術交流事業として、毎年2つの代表団を外国に派遣し、各訪問国の科学者等と学術上の諸問題について意見交換を行って、相互理解の促進を図る事業を行っている。

この事業は、昭和58年度から実施されており、これまで、アメリカ、マレーシア、西ドイツ、インドネシア、スウェーデン、タイ、フランス、大韓民国、連合王国、シンガポール、チェコスロヴァキア、ポーランド、カナダ、イタリア、スイス及びビンドの16か国に代表団を派遣してきた。

平成2年度には、①9月11日から22日まで、中華人民共和国へ、渡辺格副会長以下4名の会員等から成る代表団を、②9月17日から27日まで、オーストラリア及びニュー・ジーランドへ、大石泰彦副会長以下5名の会員等から成る代表団をそれぞれ派遣した。

中華人民共和国派遣代表団は、中国科学院、中国社会科学院、中国医学科学院、北京大学、西安交通大学、復旦大学など約20機関を訪問し、中華人民共和国の学術や今後の交流の推進策などについて会談、意見交換を行った。中華人民共和国側からは、すでに、日本の多くの大学、研究機関と交流を行っているが、さらに交流を拡大したいとの期待が表明され、両国間の今後のより積極的な交流・協力をめぐる活発な意見の交換が行われた。

オーストラリア及びニュー・ジーランド派遣代表団は、オーストラリアでは、オーストラリア科学アカデミー、オーストラリア国立大学、シドニー大学、連邦科学・産業研究機構など、ニュー・ジーランドでは、ニュー・ジーランド王立協会、マッセイ大学、ヴィクトリア大学、科学技術研究機構など、両国合わせて20を超える諸機関を訪問し、それぞれの国の学術、今後の交流の可能性などについて、会談、意見交換を行った。特に、両国では近年、国家、国民に実際に役立つ技術の発展を目指した科学技術の大きな改革が進められており、これらの問題等について、熱心に意見の交換が行われた。

今回の成果は、代表団派遣時だけのものではなく、今後のわが国の学術の国際交流・協力の進展に大きく役立つものと期待される。

平成3年(1991年)度共同主催国際会議

本会議は、国際的な活活の一環として、毎年、日本で開催される学術関係国際会議を関係学術研究団体と共同主催してきている。平成3年(1991年)度には、次の6件の国際会議を開催する。

■第21回国際農業経済学会議

開催期間 平成3年8月22日～29日
開催場所 京王プラザホテル(東京都新宿区)
参加者数 国外550人、国内950人、計1,500人
共催団体 日本農業経済学会外4学会

■国際医用物理・生体工学会議(第16回国際医用生体工学会議・第9回国際医学物理会議)

開催期間 平成3年7月7日～12日
開催場所 国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外1,000人、国内1,500人、計2,500人
共催団体 (社)日本エム・イー学会、日本医学物理学会

■国際純正・応用化学連合1991国際分析科学会議

開催期間 平成3年8月25日～31日
開催場所 日本コンベンションセンター(千葉市)
参加者数 国外500人、国内1,000人、計1,500人
共催団体 (社)日本分析化学会

■第22回国際シミュレーション&ゲーミング学会総会

開催期間 平成3年7月15日～19日
開催場所 立命館大学、国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外170人、国内300人、計470人
共催団体 日本シミュレーション&ゲーミング学会

■一般相対論に関する第6回マーセルグロスマン会議

開催期間 平成3年6月23日～29日
開催場所 国立京都国際会館(京都市)
参加者数 国外380人、国内170人、計550人
共催団体 (社)日本物理学会

■第22回国際動物行動学会議

開催期間 平成3年8月22日～29日
開催場所 大谷大学(京都市)
参加者数 国外400人、国内400人、計800人
共催団体 日本動物行動学会

経営学研究連絡委員会報告—経営学教育改善のために—(要旨)

(平成2年11月26日 第763回運営審議会承認)
企業環境の激変、就中技術革新、高度情報化、国際化等々の急進展に伴って、経営学教育は、大きく見直され、かつ新たな体系化と一層の内容の充実の必要性に迫られている。すなわち、学術的分野の広がり、国際化や情報化の急進展は、経営学の外延的拡大を要請し、また経営管理の高度化、複雑化および戦略的視点の重要性増加は、斯学の多面的な内容の充実強化を要求している。本報告は、かかる状況下において経営学教育の現状分析を行い、かつ(1)教育体系(とくにカリキュラム)の再編成と(2)教育方式の新たな在り方を探り、もって経営学に対する社会的ニーズへの即応と経営学教育の総合的な体系化への試みを展開したものである。とくに教育する側、される側両面での人材育成を強く念頭に置いて経営学教育改善の方途を示すとともに、大学院教育へのつながりを意識しながら将来への展望を示唆しようとしたものである。

統計学研究連絡委員会報告—統計学研究教育体制の整備のための具体的方策について(要旨)

(平成2年12月21日 第764回運営審議会承認)

現今、高度情報化の進展による情報資源の多激な蓄積にともない、統計的情報処理を適切に行える人材に対する社会的需要が著しく高まっている。現在米国では60を超える大学に統計学科が存在するのに対し、我が国では統計学関連の大学院専攻はただ一つあるのみである。最近の学術研究における、調査、実験、観測等の活動の急速な増大を考慮するとき、データ有効利用の学としての統計学の研究教育体制の不備は、我が国の学術研究の将来に対し、国際的に見て著しく不利な状況を生み出しつつある。

本報告では、統計学を一つの専門分野として狭く捉える従来の考え方を避け、本来学際的な性格を持つ統計学研究の実態に即して、諸科学との関連をより重視する統計科学の概念を確立し、広範な関連分野の研究者の協力により統計科学研究所あるいは専攻等を設立することの推進を提案する。この提案を具体化することにより、国際的に見ても先進的な統計学研究教育体制を実現することが可能になるものと期待される。

実験動物研究連絡委員会報告—動物実験を支援する人材育成について—(要旨)

(平成2年12月21日 第764回運営審議会承認)

医学、生物学領域において、動物を用いた実験研究が先導的な形で寄与し、社会に貢献してきたことの意義は大きい。遺伝子・分子・細胞の各レベルにおける研究成果を統合して個体の生物機能・生理現象を理解し、病的現象に正確な対応を計るために、個体レベルの研究、すなわち、動物実験による研究の必要性はますます増加し、多種類かつ高品質の動物が精細な計画・技術のもとで実験に供されるようになった。以上の観点から動物実験を取り囲む現状を詳しく検討した結果、動物実験の高度化・多様化に対応できる、専門的知識と技術を習得した技術者の数が著しく不足していることを強く認識するに至った。

本報告は、このような現状に対する改善の方向を明らかにするとともに、バイオサイエンス研究支援体制を一層整備するための方策として、特に動物実験技術者の教育機関の設立を中心に、技術の審査・認定制度の確立、技術者の採用制度の検討、身分・処遇保障等についての将来展望を示唆するものである。

日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録をもとに編集された次の日学双書が刊行されました。

・日学双書No.10「くらしと学問の近未来」

(定価) 1,000円(消費税込み、送料210円)

※問い合わせ先:

(財)日本学術協力財団(〒106 東京都港区西麻布3-24-2、交通安全教育センタービル内、TEL 03-3403-9783)

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

講演要旨作成上の注意

- 1) ワードプロで記入してして下さい。
- 2) 全体の記入枠は、A4の用紙に縦横それぞれ235×165mm内に設定して下さい。刷り上がりはB5版になります。
- 3) 枠内左上端に横40mm×4行サイズの講演番号記入用の空白を残して下さい(例参照)。番号は印刷に廻す時に委員会で挿入します。
- 4) 演題、所属、発表者(講演者の左側に○を付す)は例示に準じて記入し、本文は5行目から始めて下さい。
- 5) 下欄の2～3行に英文で演題、所属、発表者(講演者の左側に○を付す)をお書き下さい(例参照)。
- 6) 図表が必要な場合は、本文欄内に直接記載もしくは貼りつけて下さい。
- 7) 用紙は、A4版のワードプロ専用用紙か、それに相当する上質紙を縦型に使用して下さい。
- 8) 印字は鮮明をお願いします。そのためには24ドット以上であることが望ましいですが、24ドット以上でも、プリントの薄いものや不鮮明なものはご遠慮下さい。
- 9) 一般講演は1枚、課題講演は2枚の用紙にお書き下さい。

(例)

1A 01

熱帯における化学物質の使用とその地球汚染への影響

○立川 涼・田辺信介・A. Ramesh・岩田久人(愛媛大農)

最近、北極圏における農薬汚染の実態が明らかにされ、およそ8,500トンにのぼる大量のBHCが海水に残存し、毎年500トンを超える量が海流によって南下していると報告された。人工化学物質による北極圏の汚染は急速に進行し、その原因は東欧やソビエトなど極域周辺の国々ばかりでなく、低緯度開発途上国における人間活動や産業活動の影響もか

Use of Chemicals in the Tropical Environment and Impact on Global Pollution

○R. Tatsukawa, S. Tanabe, A. Ramesh and H. Iwata

(Faculty of Agriculture, Ehime University)

1991 年度地球化学会年会

[B] 参加申込用紙

9月14日(土) 必着

ふりがな

氏 名 _____

所 属 _____

連絡先(自宅・勤務先)

〒 _____

○参加登録(いずれかを○で囲んで下さい)

講 演:	有	無	
要旨集:	要	4,000円	不要
懇親会:	参加・一般	4,000円	不参加
	参加・学生	3,000円	
	送金合計	円	

○送金先

郵便振替 徳島9-53839 1991年度 日本地球化学会年会
送金日 月 日

○要旨集送付先(必ず御記入下さい)

住所 〒 _____

氏名 _____ 様

○送付先 〒790 愛媛県松山市樽味3-5-7

愛媛大学農学部環境化学研究室
日本地球化学会年会準備委員会

立 川 涼

1991 年度地球化学会年会

[A] 講演申込用紙

* * 6 月 20 日 (木) 必着 * *

演題

氏名

(発表者に○をつけて下さい)

所属 (略記)

○課題講演を御希望の場合は、次の何れかを○で囲んで下さい。

課題講演 (口頭発表): 課題 1, 課題 2, 課題 3

○一般講演の御希望の場合は、次のそれぞれのいずれかを○で囲んで下さい。

発表形式: 口頭, ポスター, どちらでもよい

発表分野: 大気・降水, 岩石・地殻, 鉱床, 有機物, 生物, 陸水, 温泉, 熱水, 地球外物質,
海洋, 堆積物, 火山,

その他 ()

○プログラム編成のため、発表内容を簡単に記して下さい。

○例にならって英文で、氏名、所属機関名、演題を書いて下さい。

(必ずタイプもしくはワープロにしてください。)

例: T. Tokyo and J. Niigata (Fuji Univ., Niigata Univ.) Geochemical studies of hot
springs.

○返送用 (上記と同じものをお書き下さい)

演題

氏名 (所属)

住所 〒

氏名

様

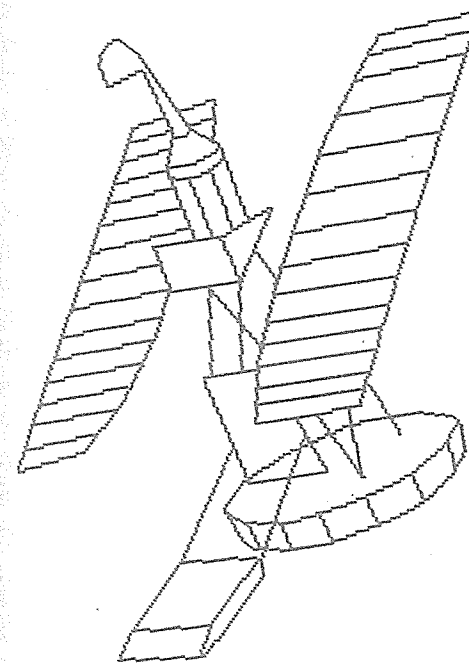
(16ページより続く)

ホスフィン発生過程は存在して欲しいし、またこの実証は筆者の夢でもある(筆者自身助手時代に大学院生と共に、狐火が出ると噂のある福島県の湿地体など数種類の土壌にリンの放射性同位体を混入させ、1週間大気を捕集したが、ついにリンを含む気体の発生は検証できなかった。この詳細は、Hashimoto, S. (1986) Dissertation thesis for Doctor Degree, Faculty of Science, The University of Tokyo)。

本稿のおわりに、初めに引用した Burford の論文の結論だけ述べておきたい。すなわちホスフィン自身きわ

めて吸着性の高い気体であり、たとえ土壌中で発生したとしても、土壌粒子に吸着されて大気へ放出されることはないということである。やはりヒト玉は安らかに土に眠らせて置けと言うことであろうか。

(追記)：こうしたフィールドでの発光は、メタンの燃焼や放電が原因とするのが現在の通説である。街路燈などが整備され。漆黒の闇夜を歩くという経験はほとんど不可能である今日では、狐火やヒト玉に出くわすこともまたほとんど不可能というのが現実であろう。



ヒト玉は大気中でのホスフィンの燃焼か？
一地圖から気圏へのリンのフラックスは
存在するかー

広島大学総合科学部 藤原祺多夫

夏祭りなどの幽霊屋敷に入ると、必ずお墓の周辺で、ヒト玉がいくつか燃えているのに出くわすが、このヒト玉の正体がホスフィンの燃焼であると言う俗説はよく聞かれるものである。茶毘に付された人骨の灰に含まれるリン酸が土壌微生物により還元されてホスフィンとなり、お墓などの周辺で燃えていると言う構図は、日本ばかりでなく、西洋では Ignis fatuus または Will-o'-the-wisp と呼ばれ、夜中泥炭地やスワンプ等の湿原地帯に揺らめく光の原因ではないかとされてきた (Burford, R., J. M. Bremner (1972) Soil Biol. Biochem., 1972, 4, 489-495)。

この過程がもし本当であるならば、地球化学的には、地圖から気圏へのリンのフラックスが存在していることを意味し、また生物化学的には窒素や硫黄の場合と同様にリン酸の還元に伴う一群の興味ある反応と付随した酵素系が存在していることになり、その化学的意義は重大である。

ホスフィン (PH₃) は沸点-87.7°C、常温では気体の極めて有毒な化合物である。化学兵器にも使用されると言われ、ラッドに対する実験では致死量は 60ppm である。ボンベのアセチレンの臭気は、ホスフィンに由来するものとされている。一般的には、ホスフィンが空気中で燃焼し五酸化リンと水を与えるとされているが、空気中で自然発火するにはかなり高濃度である必要がある。高濃度のホスフィンは大気中で激しく燃焼するが、この時赤橙色に発光する。この発光スペクトルは 500-900nm の波長領域にまたがり、675 および 740nm にピークを持つ。しかし減圧下で穏やかに燃焼させると、HPO に由来する鮮やかな緑色の化学発光を与える。一方 100ppm 以下の低濃度ではなかなか自然発光せず、これを燃焼させるためには、酸素より強力なオゾンとの混合が必要であるが、この発光スペクトルは 350-750nm に幅広く分布し、ヒトの目には白っぽく見えるのみである。確かに高濃度のホスフィンを燃焼させると、狐火のように激しく赤い炎が見え、続いてゆらゆらと揺らめく緑色の発光と白いほのかな光が生じる様子は奇怪であり、

ホスフィンがヒト玉の主役にふさわしいものである。土壌中において生物化学的にリン酸がホスフィンに還元されると報告した論文は、調べた限りでは過去 2 例ある。まずソ連の Rudakov は、1927 年に嫌気的条件下においてリン酸を亜リン酸、次亜リン酸およびホスフィンに還元する土壌バクテリアを単離したと報告した (Rudakov, K. J., (1927) Zentralbl. Bakteriologie, Parasitenkd. Infektionskr. Hyg. Abt. II, 79, 229-245)。

その後多くの化学者がこの実験を追試したが肯定的な結果は得られなかった。しかし 1959 年栃木農業試験所の坪田五郎は栃木県の畑から採取した大腸菌や土壌菌にリン酸からホスフィンへ還元能をもつものを見いだしたと発表した (Tsubota, Goro (1959) Soil Plant Food, 5, 10-15)。

この研究は、酒造の権威として知られる東大農学部坂口謹一郎教授の研究室でまとめられたが、(ただしこの時坂口先生は外遊中だったとのことである) この坪田氏の研究を追試しようとして、日本の様々な大学の大学院生が泣きを見たと言う話もある。何れにしても多くの努力がなされたにもかかわらず、この 2 例の他には、リン酸からホスフィンへの生物学的な還元反応の存在は確認されていない。ただし、Ehrlich によってまとめられた Geomicrobiology (Ehrlich, H. L. (1981) Marcel Dekker, pp 144) という本の中で、酵母抽出物中で Desulfovibrio 菌が Fe(II) 化合物から Fe₃P₂ を生成したことや、牛の血液の腐敗にともない有機リン化合物からホスフィンが発生した等の報告を紹介している。こうした過程の存在が事実とすれば、ホスフィンが発生して当然とも言える。一方 Liebert によれば、硝酸呼吸や硫酸呼吸のように、リン酸の酸素を用いる呼吸反応は、熱力学的に全くエネルギー的利得を生物体にもたらさないと指摘し、この過程 (リン酸呼吸あるいはリン酸の還元による酸素の吸収) はきわめて特殊な環境が必要であるとしている (Liebert, F. (1927) Zentralbl. Bakteriologie, Parasitenkd. Infektionskr. Hyg. 72, 369-374)。

こうした経緯を総合すると生物化学的過程によりホスフィンとしてリンが地圖から気圏へ放出されるフラックスの存在は、ありそうでなさそうで、まさにヒト玉の状況にあると言える。生物地球化学的な意味から言っても

(15 ページへ続く)

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場 3 丁目 8 番 1 号 東京大学教養学部化学教室 電話 03 (3467) 1171
発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル (4 F)
日本学会事務センター内 電話 東京 03 (3817) 5801

日本地球化学会ニュース

No. 126

1991. VIII. 1

1991年度地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

開催日時: 9月30日(月)~10月2日(水)

会場: 愛媛大学教養部(〒790 松山市文京町 3)

準備委員会: 愛媛大学農学部環境化学研究室内(委員長: 立川 涼)

〒790 松山市樽味 3-5-7

TEL 0899-41-4171 ext. 368・391, FAX 0899-43-5242, 郵便振替 徳島 9-53839

会場特設電話(年会開催中): TEL 0899-27-0686

参加費: 会員 1,000円, 非会員 2,000円, 学生無料

講演要旨集: 1冊 4,000円



	会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
30日 (月)	A	受付 8:30 ~	課題講演 1 [地球型惑星…] 9:40 ~ 11:00 ~ 12:00			昼 食 休 憩	課題講演 1 [地球型惑星の形成とその化学進化] 13:00 ~ 14:00 ~ 15:20 ~ 16:40					
	B		課題講演 3 […長距離輸送] 9:40 ~ 10:40 ~ 12:00				一般講演 [陸 水] 13:00 ~ 14:30 ~ 15:45 ~ 17:15					
	C		一般講演 [大気・降水] 9:30 ~ 10:45 ~ 12:00				一般講演 [大気・降水] 13:00 ~ 14:15 ~ 15:30 ~ 16:30 ~ 17:30					
	D		一般講演 [火 山] 9:30 ~ 10:45 ~ 12:00				一般講演 [火 山] 13:00 ~ 14:00 ~ 15:00		一般講演 [熱水・鉱床] 15:00 ~ 16:00 ~ 17:00			
1日 (火)	A	課題講演 1 [地球型惑星の形成…] 9:00 ~ 10:40 ~ 12:00			昼 食 休 憩	P会場 13:00 ~ 14:00 ポスター セッション 討論時間		S会場 14:00 ~ 15:00		S会場 (教養大講義室) 15:00 ~ 18:00 [懇 談 会]		18:00 ~ 懇 親 会
	B	課題講演 2 [熱帯の地球化学] 9:00 ~ 10:40 ~ 12:00				特 別 講 演		柴田賞授賞式 柴田賞受賞講演 議 事				
	C	一般講演 [温 泉] 9:00 ~ 10:00 ~ 11:00 ~ 12:00										
	D	一般講演 [海 洋] 9:00 ~ 10:30 ~ 12:00										
2日 (水)	A	一般講演 [地球外物質] 9:00 ~ 10:00 ~ 11:00 ~ 12:00			昼 食 休 憩	一般 [地球外] 13:00 ~ 14:15						
	B	一般講演 [堆積物] 9:00 ~ 10:15 ~ 12:00				一般講演 [土壌] 13:00 ~ 14:45						
	C	一般講演 [温泉] 9:00 ~ 9:45 ~ 10:30		一般 [岩・地] 11:00 ~ 12:00		一般講演 [岩石・地殻] 13:00 ~ 14:00 ~ 14:45 ~ 15:30						
	D	一般講演 [海 洋] 9:00 ~ 10:30 ~ 12:00				一般講演 [海洋] 13:00 ~ 14:30						
	E	一般講演 [有機物] 9:00 ~ 10:45 ~ 12:00				一般 [有機] ~ 14:00	一般講演 [生物] 14:00 ~ 15:30					

A: 11番講義室 B: 21番講義室 C: 24番講義室 D: 35番講義室 E: 45番講義室 P: 31番講義室 S: 教養大講義室

懇親会会場: 生協食堂

講演時間(討論時間を含む): 一般講演15分, 課題講演20分

懇親会: 10月1日(火) 18:00~20:00, 大学会館 1F 生協食堂。会費 4,000円(学生 3,000円)

第1日目9月30日(月)

A会場

課題講演1 [地球型惑星の形成とその化学的進化]

コンピーナー: 中村 昇・川辺岩夫

(9:30~11:00) 座長: 清水 洋

30A01 化学組成より見た始源的エコンドライトの初期進化(神戸大・理) ○鳥越紀子・山本鋼志・中村 昇

30A02 K-Ar系からみた地球型惑星に関連する隕石の年代と熱史(東大・地震研) ○兼岡一郎

30A03 ユレイライト隕石母天体の分化過程に関する、年代学的及び化学的研究(1)理研、2)東大・理) ○高橋和也²⁾・増田彰正²⁾

30A04 南極ユレイライトの化学組成とその起源(都立大・理) ○海老原充

(11:00~12:00) 座長: 中村 昇

30A05 ダイヤモンドの光物性からみたユレイライト母天体の起源(1)東大・理、2)理研) ○鍵 裕之²⁾・高橋和也²⁾・増田彰正²⁾

30A06 炭素質物質のシミュレーション実験からみたユレイライトの生成環境(阪大・理) ○松田准一

30A07 アレンジ隕石高温凝縮物中の元素拡散プロファイル(1)筑波大・地球科学、2)学習院大・理) ○坂本尚義²⁾・長沢 宏²⁾・大石和正²⁾・末野重穂²⁾

(13:00~14:00) 座長: 海老原 充

30A08 月隕石とエコンドライト母天体(極地研) ○矢内桂三

30A09 月隕石の地球化学—化学組成由来と月地殻の組成—(学習院大・理) ○福岡孝昭

30A10 希ガスからみた月隕石の生成環境(九大・理・地球惑星) ○高岡宣雄

(14:00~15:20) 座長: 兼岡一郎

30A11 地球の初期過程と希土類元素の分別の試算(1)学習院大・理、2)筑波大・地球科学) ○長沢 宏²⁾・坂本尚義²⁾・赤荻正樹²⁾

30A12 火成活動・マントル対流結合系の数値モデルとそのマントル進化への応用(愛媛大・理) ○小河正基

30A13 マントル脱ガス(阪大・理) ○小嶋 稔

30A14 地球のオリビン中の窒素(東大・理) ○杉浦直治・清田 馨・橋爪 光

(15:20~16:40) 座長: 下山 晃

30A15 窒素と希ガスのシリケートメルトの溶解度(東大・理) ○宮崎明子・比屋根肇・橋爪 光・杉浦直治

30A16 衝突脱ガスに関する基礎実験(東大・理) ○比

屋根肇・羽生 毅

30A17 陽子線照射による原始地球及び地球圏外環境下での生体有機化合物の生成。II. 照射条件によるアミノ酸収率の変化(1)横浜国大・工、2)東大・宇宙線研、3)東工大・生命理工) ○小森憲正²⁾・斉藤 威²⁾・金子竹男²⁾・土屋正彦²⁾・小池惇平²⁾・大島泰郎²⁾

30A18 隕石中の高分子有機化合物の構造(東大・理) ○北島富美雄・増田彰正

B会場

課題講演3 [陸起源物質の長距離輸送]

コンピーナー: 田辺信介・植松光夫

(9:30~10:40) 座長: 植松光夫

30B01 有機塩素化合物の長距離輸送と外洋における動態(1)愛媛大・連合農学研究科、2)愛媛大・農) ○岩田久人²⁾・田辺信介²⁾・境井典生²⁾・立川 涼²⁾

30B02 クウェートの油田火災によるとみられるススの特性(1)島根大・理、2)島根県工技センター) ○田崎和江²⁾・島根大学環境自主ゼミナール²⁾・野田修司²⁾

30B03 グリーンランド氷床コア中の炭化水素の深度分布からみた過去450年間の人間活動の評価(都立大・理) ○鈴木郁子・河松公隆

(10:40~12:00) 座長: 田辺信介

30B04 山形県の日本海沿岸部におけるエアロゾルおよび降下物中陸源成分の同時観測(山形大・理) ○鈴木裕子・鈴木利孝

30B05 北太平洋海洋コアロゾル試料中のジカルボン類の分布(都立大・理) ○河村公隆・白倉浩一

30B06 海洋堆積物中の隆起源有機物II, 化合物の特徴(1)都立大・理、2)長崎大・教育) ○石渡良志²⁾・谷本和彦²⁾・平川義行²⁾・鶴崎 実²⁾・近藤 寛²⁾

30B07 アジア大陸から海洋大気を通して輸送される陸起源物質の化学成分の特徴(1)北海道東海大・工、2)ソ連太平洋海洋研) ○植松光夫²⁾・V. V. Anikiev²⁾・A. N. Medvedev²⁾

一般講演 [陸水]

(13:00~14:30) 座長: 金森 悟

30B08 イオンクロマトグラフィーを用いた環境試料水中のシアニ化物イオンの間接定量(鹿児島大・理) 坂元隼雄・○満窪文彦・富安卓滋・米原 伸

30B09 溶存セレン濃度をコントロールする吸着過程(大阪府立高専) ○伊藤和男・船木忠治

30B10 アルカリハライド水溶液における水の酸素同位体分別(学習院大・理) ○垣内正久

30B11 コンロン山北東の河川・湖沼の水質(1)横浜国大・教育、2)中国科学探検協会) ○村山治太²⁾・韓 春雨²⁾

30B12 淀川中流域の水質変動特性(1)大阪市環科研、2)大阪工大) ○土永恒彌²⁾・中土井隆²⁾・宇野源太²⁾・川島 普²⁾

30B13 降雨流出時の土壌水・地下水の挙動と水質変化(電中研) ○池田英史・大隅多加志

(14:30~15:45) 座長: 片瀬隆雄

30B14 河川水を媒体とした農薬の輸送と河口域への負荷(大阪市環科研) ○山口之彦・福島 実

30B15 有機スズ化合物の汚染実態と沿岸海域の負荷量の推定—琵琶湖・淀川水系・大阪湾—(大阪市環科研) ○張野宏也・福島 実・森 義昭

30B16 地下水、河川水など陸水中の溶存有機化合物と発光物質について(1)近畿大・理工、2)近畿大・環境研) ○青野辰雄²⁾・平山 宏²⁾・中口 譲²⁾・平木敬三²⁾

30B17 陸水域および内湾からのメタンフラックスについて(1)国立環境研、2)東京水産大) ○野尻幸宏²⁾・中村岳史²⁾・大槻 晃²⁾

30B18 水田土壤中におけるメタン生成経路と炭素同位体組成(三菱化成・生命研) ○杉本敦子・和田英太郎

(15:45~17:15) 座長: 野尻幸宏

30B19 南極マクマード・ドライバレーの湖沼水中のリチウムの起源(1)東邦大・理、2)東邦大・医、3)湘南工大・化学、4)弘前大・理、5)日本極地研究振興会) ○高松信樹²⁾・加藤尚之²⁾・松本源喜²⁾・中谷 周²⁾・鳥居鉄也²⁾

30B20 わが国地表水の酸素および酸素同位体組成分布図(1)岩手大・農、2)岡山山大・地球研、3)大阪市立大・理) ○溝田智俊²⁾・日下部実²⁾・益田晴恵²⁾

30B21 富士山周辺域の地下水の同位体組成とその由来(II)(1)名大・理、2)静岡大・理) ○菊田直子²⁾・中井信之²⁾・篠原智子²⁾・土 隆一²⁾

30B22 沖縄本島の湧水中のウランおよびラジウム同位体比について—その1(琉球大・理) ○棚原 朗・平良初男・塚本達彦

30B23 扇状地の湧水中のラドン濃度(1)都立大・理、2)山梨医大・RI) ○堀内公子²⁾・石井 忠²⁾

30B24 岩手県龍泉洞地域の水のSr同位体組成および元素組成(筑波大・地球科学) ○中野孝教・田瀬則雄

C会場

一般講演 [大気・降水]

(9:30~10:45) 座長: 金森暢子

30C01 大気中の臭素化ダイオキシン類の分析法(1)大阪府公衛研、2)愛媛大・農) ○渡辺 功²⁾・立川 涼²⁾

30C02 半導体レーザーによる大気中のメタンの高感度連続測定(1)東京ガスIT研、2)慶大・理工) ○田井秀男²⁾・上原喜代治²⁾

30C03 大気中の超微量成分としての気体状あるいは微粒子状金属化合物に関する研究(近畿大・理工) ○小松 圭・森田道隆・中口 譲・平木敬三

30C04 大気中のクロロフルオロカーボンに関するモニタリング手法(1)兵庫県公害研、2)兵庫県衛生研) ○辻 正彦²⁾・沖 典男²⁾・藤森一男²⁾・中野 武²⁾・梅田弘志²⁾・奥野年秀²⁾

30C05 沿岸大気中のヨウ素の化学形態別分析(放医研) ○吉田 聡・村松康行

(10:45~12:00) 座長: 松枝秀和

30C06 大気中のN₂Oの窒素・酸素同位体比測定(富山大・理) ○岩月輝希・吉田尚弘

30C07 重力の下での気体の熱平衡状態(学習院大・理) ○木越邦彦

30C08 陸上大気における硫黄化合物の挙動(名大・水圏研) ○伊藤正義・金森 悟・金森暢子

30C09 日本上空の成層圏大気中二酸化炭素の¹⁴C濃度鉛直分布(1)名大・年代測定センター、2)名大・理、3)東北大・理、4)名大・水圏研、5)宇宙研) ○中村俊夫²⁾・中井信之²⁾・中澤高清²⁾・町田敏信²⁾・北川浩之²⁾・本田秀之²⁾・伊藤富造²⁾・松本英二²⁾

30C10 山口県秋芳洞カルスト地下水の溶存成分濃度の洪水時応答(1)九大・教養、2)九大・農) ○吉村和久²⁾・井倉洋二²⁾

(13:00~14:15) 座長: 鶴見 実

30C11 大気における⁷Be、¹⁰Be生成率の鉛直分布(1)東大・核研、2)日大・文理、3)東大・原子センター) ○今村峯雄²⁾・柴田誠一²⁾・永井尚生²⁾・小林紘一²⁾

30C12 沖縄本島の炭酸塩地域におけるラドン濃度について—その1(琉球大・理) ○棚原 朗・平良初男・蔵当康吉・宮原京子

30C13 新潟市における大気・降水、河川水、水道水中のトリチウム濃度(新潟県衛生公害研) ○殿内重政・皆川 恵

30C14 水圏における光化学反応素過程の検討—硫化カルボニル等の含硫気体の発生について—(広島

大・総科) ○藤原祺多夫・加島敏之・折田 晋・坪田博行

- 30C15 降水の化学成分の長期変動について—特に酸性雨との関連性— (1)京大・防災研, 2)神戸大・工, 3)鳥取大・農) ○吉岡龍馬¹⁾・沖村 孝²⁾・奥村武信³⁾

(14:15~15:30) 座長: 藤原祺多夫

- 30C16 西南北海道胆振地域における降雨・雪の鉛同位体比(室工大) ○白幡浩志・中村精次・大浦宏照
30C17 水の水素同位体分析用金属亜鉛の改良 (1)三菱マテリアル中研, 2)三菱マテリアル秋田製錬所, 3)岡山大・地球研, 4)理研) ○上田 晃¹⁾・荒城 勉²⁾・窪田康宏³⁾・日下部実⁴⁾・牛木久雄⁴⁾
30C18 ICP による雨水中の化学成分の分析 (東邦大・理) ○大森禎子・吉池雄蔵・岡村 忍・岩崎岩次
30C19 降下物に含まれる可溶性化学種の起源物質とそのキャラクターゼーション (東京工大・総合理工) ○鶴見 実
30C20 沙漠の砂に含まれる炭酸塩の量について (名大・理) ○田中 剛

(15:30~16:30) 座長: 松本英二

- 30C21 北極圏氷床コア中の Pb-210 (1)山形大・理, 2)極地研) ○鈴木利孝¹⁾・藤井理行²⁾・渡辺興亜²⁾
30C22 南極みずほ高原のエアロゾルと雪の地球化学(1) (1)名大・水圏研, 2)国立極地研, 3)国立環境研) ○金森 悟¹⁾・金森暢子²⁾・古川晶夫³⁾・渡辺興亜²⁾・青木周二²⁾・溝口次夫³⁾・西川雅高³⁾
30C23 南極みずほ高原のエアロゾルと雪の地球化学(2) (1)名大・水圏研, 2)国立極地研, 3)国立環境研) ○金森暢子¹⁾・金森 悟²⁾・古川晶夫³⁾・渡辺興亜²⁾・溝口次夫³⁾・西川雅高³⁾
30C24 海洋エアロゾル中の新しい極性有機化合物の検出と地球化学的意義 (都立大・理) ○坂口 太・河村公隆

(16:30~17:30) 座長: 河村公隆

- 30C25 太平洋上大気中 DMS 濃度の緯度分布測定 (国立環境研) ○横内陽子・向井人史・野尻幸宏
30C26 1987年から1991年にかけての太平洋上の大気中メタン濃度について (気象研) ○松枝秀和・井上久幸・杉村行勇
30C27 上層大気中のメタン濃度の緯度分布について (気象研) ○松枝秀和・井上久幸・杉村行勇
30C28 太平洋上の大気中二酸化炭素の放射性炭素同位体比について (気象研) ○石井雅男・井上久幸・杉村行勇

D 会場

一般講演 [火山]

(9:30~10:45) 座長: 水谷義彦

- 30D01 歴史的な噴火に伴う大気への硫黄及びハロゲン放出量のみつもの (1)岡山大・地球研, 2)信州大・理) ○河野美香¹⁾・日下部実²⁾・山口佳昭²⁾
30D02 レーザープローブ法によるガラス包有物の分析に基づいたマグマ中の水および二酸化炭素濃度の推定 (岡山大・地球研) ○斎藤元治・日下部実・河野美香
30D03 酸性水溶液中における硫黄の反応性 (出光中研) ○本名幸作・飯田 博
30D04 火口湖底熔融硫黄の地球化学 (1)北里大・衛生, 2)東大・教養) ○高野 悦¹⁾・斎藤博子²⁾・高野穆一郎²⁾
30D05 活動的火山湖水中の準安定溶存硫黄化合物の同時観測による火山活動の評価 (東大・教養) ○大沢信二・綿菰邦彦・高野穆一郎

(10:45~12:00) 座長: 清棲保弘

- 30D06 Arsenic and Phosphorus in fumarolic gases at Japanese active volcanoes. (1) Dept. Chem., Tokyo Inst. Tech., 2) Dept. Chem., Univ. Telcom.) ○V. S. Mambo¹⁾・M. Yoshida²⁾・S. Matsuo²⁾
30D07 雲仙地熱地域の気体特性—九州のマグマ起源気体との関係— (1)秋田大・鉱山, 2)岡山大・地球研, 3)福岡大・理) ○北 逸郎¹⁾・新田恒造²⁾・長尾敬介³⁾・田口幸洋³⁾
30D08 タイ北部の非火山性地熱地域の気体特性 (1)秋田大・鉱山, 2)岡山大・地球研, 3)富山大・理) ○北 逸郎¹⁾・新田恒造²⁾・長尾敬介³⁾・吉田尚弘³⁾
30D09 立山地獄谷の噴気凝縮水の同位体比 (富山大・理) ○水谷義彦・堀 雅明
30D10 低温噴気孔ガスの測定 (武蔵高校) ○高江洲堂
一般講演 [火山・熱水・鉱床]
(13:00~14:00) 座長: 日下部 実
30D11 空気中炭化水素の連続測定 (東大・理) ○遠嶋康徳・脇田 宏
30D12 火山ガス中の炭素化合物について (名大・理) ○浅田憲子・清棲保弘
30D13 火山噴気のエンタルピー測定 (東工大・草津白根火山観測所) ○大場 武・平林順一
30D14 火山噴出物地層から抽出した石英粒子の青・緑・赤色域熱蛍光の観測 (新潟大・理) ○橋本哲夫・白井更知・市野正廣・小林禎子・小嶋素志

(14:00~15:00) 座長: 大場 武

- 30D15 阿蘇火砕硫の K-Ar 年代 (1)地調, 2)応用地質, 3)熊本大) ○松本哲一¹⁾・宇都浩三²⁾・小野晃司³⁾・渡辺一徳³⁾
30D16 伊豆大島火山スコリアの風化による微量元素の挙動 (地調) ○富樫茂子・Graziella Caprarello
30D17 Preliminary ⁸⁷Sr/⁸⁶Sr and ¹⁴³Nd/¹⁴⁴Nd data of Vesuvius recent (1631-1944) volcanic lava flows. (1)Geol. Surv. Japan, 2)Univ. Federico II) ○G. Caprarello¹⁾・S. Togashi²⁾・M. Cortini²⁾
30D18 雲仙火山の噴火活動に関連した地球化学観測 (東大・理) ○野津憲治・石橋純一郎・遠嶋康徳・脇田 宏
(15:00~16:00) 座長: 北 逸郎
30D19 「しんかい2000」(第546潜航)による沖縄トラフ熱水活動調査 (1)琉球大・理, 2)山形大・理, 3)東大・海洋研, 4)岡山大・地球研) ○大森 保¹⁾・棚原 朗²⁾・大城 学³⁾・小泉宝之⁴⁾・藤村行弘⁵⁾・平良初男⁶⁾・酒井 均⁷⁾・蒲生俊敬⁸⁾・千葉 仁⁹⁾
30D20 ビスマルク海・マヌス背弧海盆東部で発見された海底熱水活動の化学的特徴 (1)東大海洋研・2)山形大・理) ○蒲生俊敬¹⁾・酒井 均²⁾・KH 90-3 乗船研究者一同
30D21 Sr 同位体比から見た中部沖縄トラフ熱水系 (1)岡大・地球研, 2)東大・理, 3)山形大・理) ○千葉 仁¹⁾・石橋純一郎²⁾・酒井 均³⁾
30D22 沖縄トラフ熱水鉱床の地球化学的研究 (琉球大・理) ○大城 学・大森 保・棚原 朗・平良初男・木村政昭
(16:00~17:00) 座長: 橋本哲夫
30D23 ボーキサイトから溶出するウランと²³⁴U/²³⁸U 放射能比 (地調) ○金井 豊
30D24 Re-Os 年代決定法のモリブデナイトへの応用に関する分析化学的研究; 特に Os 同位体平衡の問題について (東大・理) ○鈴木勝彦・其魯・清水 洋・増田彰正
30D25 Rb-Sr 法によるミシシッピ・ヴァレイ型鉱床の閃亜鉛鉱の年代測定 (1)東大・理, 2)ミシガン大) ○中井俊一¹⁾・A. N. Halliday²⁾・S. E. Kesler²⁾・H. D. Jones²⁾
30D26 ウラニナイト中の Ru, Pd, Te 同位体異常による自発核分裂の検証 (東大・理) ○日高 洋・狩野直樹・増田彰正

第2日目 10月1日(火)

A 会場

課題講演 1 [地球型惑星の形成とその化学的進化]

コンピーナー: 中村 昇・川辺岩夫

(9:00~10:40) 座長: 長沢 宏

- 1A01 同位体比からみた地球の揮発性物質の起源 (電通大・自然科学) ○松尾禎士
1A02 海洋の進化について (東大・海洋研) ○野崎義行
1A03 アーキアンのチャートにみられる化学組成の多様性とその起源 (1)名大・教養, 2)名大・理) ○杉谷健一朗¹⁾・杉崎隆一²⁾・足立 守²⁾
1A04 マントル起源物質中の希ガス同位体からみる大陸マントルの起源と進化 (東大・理) ○佐々田俊夫・比屋根肇
1A05 チャルノッカイトの成因と炭素同位体組成 (1)静岡大・理, 2)トリバンドラム地球科学センター) ○和田秀樹¹⁾・安藤隆丸²⁾・M. サントッシュ²⁾

(10:40~12:00) 座長: 田中 剛

- 1A06 周縁島孤性地殻の発達とその大陸成長へのかかわり (1)岡山大・地球研, 2)島根大・理) ○本間弘次¹⁾・飯泉 滋²⁾・加々美寛雄²⁾
1A07 Sr・Nd 同位体からみた島弧・背弧海盆の形成と発達 (京都産業大) ○能田 成
1A08 東アジアの先カンブリア紀大陸の化学進化・Ce, Nd 同位体比及び REE パターンによる研究 (1)東大・理, 2)中国科学院, 3)韓国水産大・理, 4)名大・理) ○李 承求¹⁾・清水 洋²⁾・増田彰正³⁾・天川裕史⁴⁾・赴 振华⁵⁾・楊瑞瑛⁶⁾・宋 用善⁷⁾・足立 守⁸⁾
1A09 分化した隕石より見た地球型惑星の初期進化 (東大・理) ○武田 弘

B 会場

課題講演 2 [熱帯の地球化学]

コンピーナー: 立川 涼・門谷 茂

(9:00~10:40) 座長: 脇本忠明

- 1B01 熱帯雨林生産—大気 CO₂ の濃度と δ¹³C との関連性 (1)名大・水圏研, 2)東大・生産研) ○加藤喜久雄¹⁾・本多嘉昭²⁾・村井俊治²⁾
1B02 タイ中央平原における水田からのメタン発生 (1)農業環境技研, 2)タイ国農業局, 3)熱帯農研センター) ○八木一行¹⁾・Prapai Chairroj²⁾・鶴田治雄³⁾・神田健一³⁾・村上敏文³⁾・上野義視³⁾・Wisit Cholitkul³⁾・陽 捷行³⁾
1B03 マレーシア泥炭土壌中のフェノール酸の存在

と予想される挙動 (日大・農獣医) ○片瀬雄

1B04 熱帯土壌中における粘土鉱物の変化-タイにおけるケーススタディー (愛媛大・農) ○吉永長則・松枝直人

1B05 チャオブラヤー川がバンコク湾に運び込む陸起源有機物量の推定 (1)香川大・農, 2)チュラロンコン大・理) ○門谷 茂¹⁾・ガラヤ・ワッタヤコン²⁾

(10:40~12:00) 座長: 門谷 茂

1B06 ベンガル湾のセジメント・トラップの実験におけるアミノ酸について(2) (1)東大・海洋研, 2)ハンブルグ大・海洋生物地球化学研) ○石塚明男¹⁾・Venu. Ittekkot²⁾

1B07 赤道域西太平洋における ¹³⁷Cs および ^{239,240}Pu について (放医研) ○中村 清・長屋 裕・成田尚史

1B08 ベトナム土壌中ダイオキシン類の分布とその給源について (愛媛大・農) 武井陽一・○船野博之・松田宗明・脇本忠明

1B09 熱帯アジアにおける有機塩素化合物の動態 (1)愛媛大・農, 2)愛媛大・連合農学研究科, 3)愛媛大・工) ○田辺信介¹⁾・境井典生²⁾・西村 淳³⁾・A. Ramesh³⁾・岩田久人³⁾・武岡英隆³⁾・立川 涼³⁾

C 会場
一般講演 [温泉]

(9:00~10:00) 座長: 高野穆一郎

1C01 鹿児島市およびその周辺の温泉水の化学組成 (鹿児島大・理) ○坂元隼雄・田中利明・満窪文彦・富安卓滋・米原範伸

1C02 長崎県壱岐湯の本温泉について (九大・理) ○池見洋明・島田允堯・太田一也

1C03 長野県中の湯・白骨の温泉について (1)中央温泉研・2)志賀ボーリング) ○佐藤幸二¹⁾・園田和彦²⁾・竹内富二夫²⁾

1C04 山梨県増富鉱泉の微量元素およびストロンチウム同位体組成 (1)青山学院大・理工, 2)理研) ○矢板 毅¹⁾・木村 幹¹⁾・高橋和也²⁾・矢吹貞代²⁾・安部文敏²⁾

(10:00~11:00) 座長: 坂元隼雄

1C05 箱根湯本、塔の沢温泉の化学成分の研究 (神奈川温地研) ○石坂信之・平野富雄

1C06 秋田県玉川温泉の最近の泉質変化と北投石の化学組成 (1)香川大・教育, 2)東大・教養) ○佐々木信行¹⁾・綿拔邦彦²⁾

1C07 秋田県玉川温泉の硫酸の硫黄及び酸素同位体比 (岡山大・理) ○古川孝文・山本雅弘

1C08 妙高火山における熱流体の起源 (名大・理) ○清棲保弘・宮島秀晴・浅田憲子

(11:00~12:00) 座長: 佐々木信行

1C09 有馬温泉天神泉沈殿物中に産する珪酸塩鉱物の産状 (1)東大・教養, 2)東京学芸大・地学) ○大下克己¹⁾・岡村三郎²⁾・本間久英²⁾

1C10 有馬温泉天神泉沈殿物中に産する Mn に富むアルケン石 [Ca(Fe, Mn)(CO₃)₂] の産状と生成条件 (1)東大・教養, 2)東京学芸大・地学) ○大下克己¹⁾・岡村三郎²⁾・本間久英²⁾

1C11 雌阿寒『湯の滝』におけるマンガン酸化物沈殿形成と酸化細菌 (1)地調, 2)微工研, 3)筑波大・地球科学) ○三田直樹¹⁾・丸山明彦²⁾・伊藤 孝³⁾・金井 豊³⁾・東原孝規³⁾

1C12 雌阿寒『湯の滝』のマンガン沈着に関する生物・化学的要因 (1)微工研, 2)地調, 3)筑波大・地球科学) ○丸山明彦¹⁾・三田直樹²⁾・伊藤 孝³⁾・東原孝規³⁾

D 会場 (35番講義室)
一般講演 [海洋]

(9:00~10:30) 座長: 前田 勝

1D01 深海用現場間隙水抽出装置の試作(1)装置の構造と作動 (1)名大・水圏研, 2)東海大・海洋) ○増澤敏行¹⁾・加藤義久²⁾・南 秀樹²⁾

1D02 深海用現場間隙水抽出装置の試作(2)駿河湾堆積物間隙水の化学組成 (1)東海大・海洋, 2)名大・水圏研) ○加藤義久¹⁾・増澤敏行²⁾・南秀樹²⁾・深沢理朗²⁾

1D03 キレート樹脂濃縮-化学発光検出法を用いた海水中の鉄(II)と鉄(III)の自動分析法の開発 (京大・理) ○小畑 元・桑本 融・中山英一郎

「休 憩」

1D05 水圏における光化学反応素過程の検討-過酸化水素の発生とその前駆体について- (広島大・総科) ○後田俊直・竹田一彦・藤原祺多夫・坪田博行

1D06 地球環境保全の実践的研究 (社会地球化学)-ヤマギシの村を研究素材として- (広島大・総合科学) ○早瀬公司

(10:30~12:00) 座長: 石渡良志

1D07 赤潮発生に係るセレンの起源に関する研究 (1)近畿大・理工, 2)和歌山県水試) ○中口 謙¹⁾

小池祐一¹⁾・竹内照文²⁾・平木敬三²⁾

1D08 沿岸海洋における赤潮発生に及ぼすセレン分子種の影響 その2 (1)近畿大・理工, 2)和歌山県水試) ○小池祐一¹⁾・中口 謙²⁾・青野辰雄²⁾・竹内照文²⁾・平木敬三²⁾

1D09 C, N 安定同位体から見た東京湾熱塩フロント近傍におけるけんたく粒子の動態 (東大・海洋研) ○才野敏郎

1D10 沿岸域における水酸化物除掃担体による微量必須元素の沈殿挙動 (近畿大・理工) ○梅内一芳・中口 謙・小池祐一・平木敬三

1D11 相模湾から採取されたシロウリガイの $\delta^{14}\text{C}$ と $\delta^{13}\text{C}$ (1)防災科研・2)学習院大・理) ○吉田則夫¹⁾・塚原弘昭²⁾・垣内正久²⁾

1D12 イガイ中有機スズ化合物濃度の変動要因に関する研究 (国立環境研) ○白石寛明

P 会場
一般講演 [ポスター・セッション]

(13:00~14:00) : 討論時間

1P01 水蒸気の水素および酸素同位体比 (富山大・理) ○米口敬浩・吉田尚弘

1P02 西南北海道胆振地域における降雨・雪中の重金属濃度 (室工大) ○白幡浩志・中村精次・川口 淳一

1P03 沖縄本島における大気粉塵の化学的研究 (琉球大・理) ○彭 金輝・平良初男・棚原 朗・諸田大一郎・徳元武光

1P04 沖縄トラフ熱水活動の地球化学的研究 (琉球大・理) ○平良初男・大森 保・棚原 朗

1P05 西表群発地震と竹富海底温泉の調査 (琉球大・理) ○大森 保・棚原 朗・大城 学・岩本和正・小泉宝之・藤村行弘・武村盛久・安里博子・渡口 輝・彭 金輝・王 奇偉・平良初男

1P06 島弧におけるヘリウム同位体比の分布 (1)広島大・理, 2)東大・理) ○佐野有司¹⁾・坂本 稔²⁾・脇田 宏²⁾

1P07 夏油温泉沈殿物の走査電子顕微鏡写真 (東北大・教養) ○鈴木励子

1P08 地熱熱水から生成したケイ酸質沈殿物中のホウ素とモリブデン (九大・教養) ○横山拓史

1P09 REE patterns and ¹⁴³Nd/¹⁴⁴Nd ratios of rock samples from deep geothermal wells of the Phlaeagraean Fields (Naples, Southern Italy). (1)Geol. Surv. Japan, 2)Nagoya Univ.) ○G. Caprarelli¹⁾・S. Togashi¹⁾・T. Tanaka²⁾

1P10 中国タクラマカン砂漠における砂質試料の化学組成 (1)地調, 2)中国科学院新疆生物土壤砂漠研) ○金井 豊¹⁾・寺島 滋¹⁾・石井武政²⁾・水野清秀²⁾・宮田雄一郎²⁾・銭 亦兵²⁾

1P11 炭酸カルシウムの結晶成長と微量金属の分配 (琉球大・理) ○大森 保・王 奇偉・平良初男

1P12 カロチノイド分布から推定する手賀沼、霞ヶ浦の藻類 (国立環境研) ○相馬悠子・八木圭一・稲葉一穂・春日清一

1P13 ASV 法による間隙水中銅の状態別定量の試み (東京水産大) ○前田 勝・桂 秀光・鎌谷明善

1P14 海水中のテクネチウム-99の測定法の研究 (九大・理) ○百島則幸・ムハマド・サヤド・高島良正

1P15 鮮新世貝化石中のストロンチウム同位体比 (地調) ○上岡 晃・柴田 賢

1P16 K, Ca, Rb, Sr 因子からみた花崗岩類の分類 (奈良教大) ○三辻利一

1P17 アノーサイト単結晶の合成 (1)東大・RI センター, 2)筑波大・地球科学・3)学習院大・理) ○森岡正名¹⁾・坂本尚義²⁾・長沢 宏³⁾

1P18 日本地質調査所岩石標準試料の放射化分析-主に堆積岩シリーズについて- (1)金沢大・理, 2)金沢女子短大) ○大浦泰嗣¹⁾・小三田 栄¹⁾・青田尚美²⁾・奥井利行²⁾・亀田保夫²⁾・坂本 浩²⁾

1P19 β 線測定による岩石・隕石中の Y の放射化分析 (日大・文理) ○米田成一・浦郷賢也・岩岡博幸・篠塚一典・永井尚生・本田雅健

1P20 接触変成作用における流体の移動 (化学フロントと同位体フロント) (静岡大・理) ○和田秀樹・安藤隆丸

S 会場
[特別講演]

(14:00~15:00) 座長: 立川 涼

1S01 地球環境保全に関する研究調査および観測監視の動向 (環境庁・地球環境部・研究調査室長) ○飯島 孝

[学会賞 (柴田賞) 受賞講演]

(15:15~16:15) 座長: 坂本 浩

1S02 太陽系初期におけるプルトニウム-244の存在の発見および天然原子炉の予言 (ネバタ大学教授) ○黒田和夫

第3日目10月2日(水)

A 会場

一般講演 [地球外物質]

(9:00~10:00) 座長: 杉浦直治

- 2A01 金属鉄・シリケート間の希ガスの分配 (1)神戸大, 2)阪大) ○周藤正史¹⁾・松田准一²⁾・小嶋 稔²⁾
- 2A02 合成マグネタイト中の希ガス (1)神戸大, 2)阪大) ○松本拓也¹⁾・丸尾和幸¹⁾・土山 明¹⁾・松田准一²⁾

- 2A03 テクタイトにおける希ガスの捕獲サイト (1)神戸大・自然科学, 2)阪大・理) ○松原佳代¹⁾・松田准一²⁾

- 2A04 レーザー抽出法による隕石希ガスの測定 (岡山大・地球研) ○長尾敬介・三浦弥生・尾形亜津美

(10:00~11:00) 座長: 高岡宣雄

- 2A05 南極及び非南極ユークライトの希ガス組成 (岡山大・地球研) ○三浦弥生・長尾敬介
- 2A06 ダイヤモンドの衝撃合成実験と希ガスの捕獲機構 (1)神戸大, 2)阪大, 3)東北大) ○久住晶子¹⁾・松田准一²⁾・草馬啓治³⁾・床野安彦³⁾
- 2A07 始源隕石中の Kr 及び Xe の同位体構造—星内合成の理論計算との照合— (金沢大・理) ○大浦泰嗣・坂本 浩
- 2A08 非平衡コンドライト中の窒素とアルゴン (東大・理) ○橋爪 光・杉浦直治

(11:00~12:00) 座長: 高橋和也

- 2A09 非平衡オーディナリ・コンドライト母天体の化学進化 (1)都立大・理, 2)岡山大・地球研) ○海老原充¹⁾・長尾敬介²⁾
- 2A10 衝突溶融した L-コンドライトの Rb-Sr 系 (1)神戸大・自然科学, 2)神戸大・理, 3)東大宇宙線研) ○藤原敏記¹⁾・中村 昇²⁾・山越和雄³⁾

- 2A11 マーチソンコンドリュールの希土類元素パターン (神戸大・理) ○井上睦夫・中村 昇

- 2A12 Allende Chondrule の Sr 同位体組成 (1)神戸大・理, 2)京都産業大・教養) ○下田 玄¹⁾・鳥越紀子¹⁾・中村 昇²⁾・能田 成²⁾

(13:00~14:15) 座長: 米田成一

- 2A13 隕石物質からのアルカリ元素の蒸発に及ぼす全圧の影響 (1)神戸大・自然科学, 2)神戸大・理) ○島岡太郎¹⁾・中村 昇²⁾

- 2A14 隕石中の難揮発性元素存在度は何を意味するのか? (1)地調, 2)東大・理) ○平田岳史¹⁾・増田彰正²⁾

- 2A15 隕石中の宇宙線生成核種の生成率とその規則性 (1)日大・文理, 2)東大・核研, 3)東大・原子センター) ○永井尚生¹⁾・本田雅健²⁾・今村孝雄³⁾・小林紘一³⁾

- 2A16 炭素質コンドライト中のジカルボン酸 (筑波大・化) ○下山 晃・重松隆助

- 2A17 炭素質隕石中の有機物の熱分解実験による研究 (筑波大・化) ○古宮正利・下山 晃・原田 肇

B 会場

一般講演 [堆積物]

(9:00~10:15) 座長: 才野敏郎

- 2B01 湖底, 海底堆積物中の硼素同位体組成 (1)上智大・理工, 2)東工大・原研) ○山崎智廣¹⁾・小坂知子¹⁾・大井隆夫¹⁾・向田政男¹⁾・野村雅夫²⁾・岡本真実²⁾

- 2B02 半遠洋性堆積物中の間隙水とアミノ酸組成 (1)地調, 2)東大・海洋研) ○川幡穂高¹⁾・石塚明男²⁾

- 2B03 ODP Site 808 から得られた火山灰堆積物の初期続成過程における鉍物と化学組成の変化 (1)大阪市大・理, 2)東大・海洋研, 3)静岡大・理) ○田中宏明¹⁾・益田晴恵²⁾・蒲生俊敬³⁾・徐 垣³⁾・平 朝彦³⁾

- 2B04 中央太平洋における堆積物中の Ba の鉛直分布 (北大・水産) 原田 晃・○小野寺毅・角皆静男
- 2B05 底質からリン溶出と水質に及ぼす影響 (横浜市環境科学研) ○白柳康夫

(10:15~12:00) 座長: 和田秀樹

- 2B06 炭酸カルシウムの結晶化における界面活性剤の影響(2) (大阪府立高専) ○伊藤和男・石倉 真

- 2B07 炭酸塩岩の生成過程におけるバリウムの挙動 (群馬大・工) ○相沢省一・赤岩英夫

- 2B08 炭酸カルシウムへのイオンの吸着機構—亜鉛イオンの吸着 (新潟大・理) ○澤田 清・渡辺奈津子・鈴木俊雄

- 2B09 関東山地炭酸塩岩中の微量成分 (地調) ○岡井貴司

- 2B10 本邦 P/Tr 境界の硫黄同位体的研究 (1)筑波大・地球科学, 2)宮崎大・教, 3)東大・理) ○梶原良道¹⁾・山北 聡²⁾・小林 大³⁾・今井亮³⁾

- 2B11 Stevns Klint 堆積物 (K-T boundary) 中の白金の濃度 (1)東大・理, 2)J. T. Baker Inc.) ○藍川昌秀¹⁾・M. B. Shabani²⁾・増田彰正³⁾・R. Ganapathy³⁾

- 2B12 ネパール, アルン・コーラーティナウ・コーラ

地域に分布するシワリク古土壌の炭素同位体比 (新潟大・自然) ○田中里志

一般講演 [土壌]

(13:00~14:45) 座長: 吉永長則

- 2B13 土壌様物質からみた都市環境における元素挙動 (1)愛媛大・農, 2)徳島大・医療技術短大) ○市橋秀樹¹⁾・市川真樹¹⁾・森田秀芳¹⁾・立川 涼¹⁾

- 2B14 中国, 新疆, 吐魯番盆地における硫酸マグネシウムの析出 (1)理研, 2)中国科学院新疆生物土壤沙漠研) ○矢吹貞代¹⁾・岡田昭彦²⁾・樊自立²⁾・季 媛²⁾

- 2B15 熱帯・亜熱帯域の土壌に残留する有機塩素化合物 (1)愛媛大・連合農学研究科, 2)愛媛大・農) ○Vu Duc Thao¹⁾・河野公栄²⁾・山本真一²⁾・田辺信介²⁾・立川 涼²⁾

- 2B16 土壌の蛍光 X 線分析 (花崗岩質土の地域差に関する研究) (京都府警・科捜研) ○平岡義博

- 2B17 8000年前堆積土壌中のダイオキシシン類 (1)財団法人食品分析センター, 2)愛媛大・農) ○橋本俊次¹⁾・脇本忠明²⁾・立川 涼²⁾

- 2B18 水田残留ダイオキシシン類の光分解性について (愛媛大・農) ○小野光司・松田宗明・脇本忠明

C 会場

一般講演 [温泉・岩石・地殻]

(9:00~9:45) 座長: 千葉 仁

- 2C01 チベット高原の高温熱流体の起源 (1)東大・理, 2)中国科学院蘭州地質研, 3)雲南省地球科学研) ○中井俊一¹⁾・脇田 宏²⁾・王 先彬³⁾・徐 勝³⁾・楊 輝³⁾・薛 嘯峰³⁾

- 2C02 地熱系に關与する起源水の地球化学的分類 (地調) ○野田徹郎・高橋正明

- 2C03 竹富海底温泉と西表群発地震 (1)琉球大・理, 2)東大・海洋研, 3)東大・理) ○大森 保¹⁾・棚原 朗²⁾・平良初男²⁾・蒲生俊敬²⁾・石橋純一郎²⁾・脇田 宏²⁾

(9:45~10:30) 座長: 野津憲治

- 2C04 地球潮汐・地震による道後温泉井の水位変化 (愛媛大・理) ○大和田淳子・川辺岩夫

- 2C05 温泉の地震地球化学観測 (名大・理) ○永峰康一郎・杉崎隆一

- 2C06 ラドン濃度異常と地震との関連性の統計的検討 (東大・理) ○五十嵐丈二・中谷正生・森 俊哉・田辺清人

(10:45~12:00) 座長: 豊田和弘

- 2C07 琉球石灰岩の年代学的研究 (琉球大・理) ○青木大茂・平良初男・棚橋 朗・河名俊男

- 2C08 沖縄トラフ中軸部から得られた火山岩の急冷ガラス中の F-Cl-S の挙動について (1)大阪市大・理, 2)岡山大・地球研, 3)山形大・理, 4)高知大・理) ○松本哲志¹⁾・益田晴恵²⁾・日下部実³⁾・酒井 均⁴⁾・石塚英男⁴⁾

- 2C09 花崗岩・大理石の一軸圧縮変形に伴う水素ガスの放出 (1)動燃, 2)愛媛大・理) ○澤田 淳¹⁾・川辺岩夫²⁾

- 2C10 カルボナード・ダイヤモンド中のヘリウム拡散実験 (1)東大・理, 2)阪大・理) ○座主繁男¹⁾・比屋根肇²⁾・小嶋 稔²⁾

- 2C11 堆積岩中のセレンの存在状態 (甲南大・理) ○玉利祐三・若森達也・山畑寿夫・茶山健二・辻 治雄・日下 譲

(13:00~14:00) 座長: 富樫茂子

- 2C12 韓国東部優白一花崗岩質片麻岩の希土類元素のテトラド現象 (東大・理) 李 承求・○増田彰正

- 2C13 ブラジル産カーボナタイトの地球化学的研究 (1)東大・理, 2)大阪市大・理, 3)姫路工大・理) ○豊田和弘¹⁾・堀内弘之²⁾・小沢 徹³⁾・床次正安³⁾・湊 秀雄³⁾・相川信之³⁾・芳賀信彦³⁾・J. Nakashima

- 2C14 酸性火成岩類中の Eu 異常の大きさの変動について (1)神戸大・教養, 2)海技大, 3)京大・原子炉) ○寺門靖高¹⁾・藤谷達也²⁾・高田実弥³⁾

- 2C15 Ce 異常を示す島弧火山岩の Ce・Nd 同位体比: ソロモン及び小笠原島弧下のマンツルの REE の特徴について (東大・理) ○清水 洋・猿渡英之・河田陽介・増田彰正

(14:00~14:45) 座長: 福岡孝昭

- 2C16 伊豆諸島火山噴出物中のウラン・トリウム同位体 (青山学院大・理工) ○宮本由美・矢板 毅・斎藤裕子・木村 幹

- 2C17 天然ジルコン中のモリブデンの同位体組成 (1)東大・理, 2)理研) ○川島敦道¹⁾・高橋和也²⁾・増田彰正²⁾

- 2C18 島弧火山のマグマ水の水素および酸素同位体組成 (地調) ○松久幸敬

(14:45~15:30) 座長: 佐野有司

- 2C19 レーザープローブを用いた岩石・鉍物中の酸素同位体比の測定 (岡山大・地球研) ○塩田敦士・千葉 仁

- 2C20 北上山地, 白亜紀深成岩類の O・Sr 同位体と微量元素組成 (地調) ○氏家真澄・松久幸敬・富樫茂子

- 2C21 Rb-Sr 法による西南日本内帯の白亜紀酸性火

成岩類の年代学 (1)神戸大・教養, 2)京都産大・教養) ○寺門靖高¹⁾・能田 成²⁾

D 会場

一般講演 [海洋]

- (9:00~10:30) 座長: 蒲生俊敏
- 2D01 噴火湾底層水中の ^{226}Ra (北大・水産) ○川端一史・原田 晃・角皆静男
- 2D02 海水中のトリウムとウランの化学形について (気象研) ○広瀬勝己
- 2D03 世界中の海の ^{210}Pb , ^{210}Po と Ra 同位体 (1)東大・海洋研, 2)東海大・海洋) ○野崎義行¹⁾・土橋 史²⁾・武田明久²⁾
- 2D04 黒潮域における大気および海水中の DMS, CS_2 , (北大・水産) 渡辺修一・○村田周和・角皆静男
- 2D05 高緯度海域の沈降粒子における脂肪酸組成について (名大・水圏研) 半田暢彦・○早川和秀
- 2D06 日本海溝域における沈降粒子の起源について (名大・水圏研) 半田暢彦・○原田尚美・中塚武・杉本多津宏

(10:30~12:00) 座長: 増澤敏行

- 2D07 様々な海域より採取されたマンガンノジュールの Ce, Nd, Sr の同位体比 (1)東大・理, 2) Univ. Luleå) ○天川裕史¹⁾・Johan Ingri²⁾・増田彰正³⁾・清水 洋³⁾
- 2D08 海洋底マンガン酸化物の Sr 同位体層序学 (筑波大・地球科学) ○伊藤 孝・中野孝教
- 2D09 大陸縁海の海底におけるモリブデンの循環 (東海大・海洋) ○加藤義久・棚瀬ますみ
- 2D10 大陸斜面堆積物間隙水中のヒ素の挙動 (東海大・海洋) 加藤義久・○南 秀樹
- 2D11 サンゴ礁群集による有機・無機炭素生産とその共役効果 (1)東北大・理, 2)地調) ○鈴木淳¹⁾・中森 亨¹⁾・茅根 創²⁾
- 2D12 間隙水中の全炭酸の $\delta^{13}\text{C}$ からみた南海トラフ付加体の有機物統成過程 (ODP 131 航海) (1)東大・海洋研, 2)スクリップス海洋研, 3)ドイツ地質調査所) ○蒲生俊敏¹⁾・M. Kastner²⁾・U. Berner³⁾・J. Gieskes³⁾

一般講演 [海洋]

- (13:00~14:30) 座長: 加藤義久
- 2D13 最終氷期の最大氷床拡大期以降に海洋から大気に付加された CO_2 量の推定 (名大・水圏研) ○加藤喜久雄
- 2D14 過去35000年間の太平洋深層水循環の変化 (1)名大・水圏研, 2)東大・海洋研) ○岩倉央和¹⁾・

松本英二¹⁾・村山雅史²⁾・平 朝彦³⁾

- 2D15 ODP Leg 127日本海深海掘削の Site 795 コアの微量元素組成と硫黄同位体比 (続報) (1)名大・水圏研, 2)京大・原子炉, 3)東大・理) ○増澤敏行¹⁾・高田実弥²⁾・多田隆治³⁾
- 2D16 太平洋深海マンガンノジュールに見られるランタニドテトラド効果 (愛媛大・理) ○石井 暁・榊原正幸・水野篤行・川辺岩夫
- 2D17 先カンブリア紀稿状鉄鉱層にみられるランタニドテトラド効果 (1)愛媛大・理, 2)名大・教養, 3)名大・理) ○石井 暁¹⁾・川辺岩夫²⁾・杉谷健一郎³⁾・杉崎隆一³⁾
- 2D18 ODP Leg 126 で得られた発泡性玄武岩のスメクタイト (1)愛媛大・教養, 2)島根大・理, 3)愛媛大・理) ○田崎耕市¹⁾・田崎和江²⁾・福本朋代³⁾
- 1D04 岩石-水系における希土類元素の溶出に関する実験的研究 (東大・理) ○松田直子・清水 洋・増田彰正

E 会場

一般講演 [有機物]

(9:00~10:45) 座長: 大田啓一

- 2E01 土壌の有機物組成 II。ステロイド化合物 (都立大・理) ○清水賢一・石渡良志
- 2E02 熱水条件下における堆積有機物の化学変化 II。ステロイド化合物 (都立大・理) ○小林俊一・石渡良志
- 2E03 中新世女川頁岩中の C_{26} ステロイド炭化水素 (島根大・理) ○鈴木徳行・三瓶良和
- 2E04 沿岸堆積物中の脂質成分の分布について 4. 伊万里湾, 橘湾 (1)長崎大・教育, 2)都立大・理, 3)創価大・教育) ○近藤 寛¹⁾・石渡良志²⁾・山本修一³⁾
- 2E05 湖沼堆積有機物の環境指標性 I。水月湖柱状試料の脂肪酸成分 (都立大・理) ○上村 仁・清水賢一・石渡良志
- 2E06 生体中の Non-Solvent Extractable Lipids の組成分布の特徴 (愛知学院大・教養) ○西村弥重
- 2E07 酸性/酸性化湖沼堆積物の地球化学的研究 (1)都立大・理, 2)長崎大・教育) ○福島和夫¹⁾・上村 仁²⁾・無藤直子³⁾・近藤 寛³⁾・石渡良志³⁾
- (10:45~12:00) 座長: 西村弥重
- 2E08 草津白根火山の強酸性湖 (湯釜) における有機地球化学的研究 (1)湘南工大・化学, 2)東大・教養) ○松本源喜¹⁾・綿祿邦彦²⁾

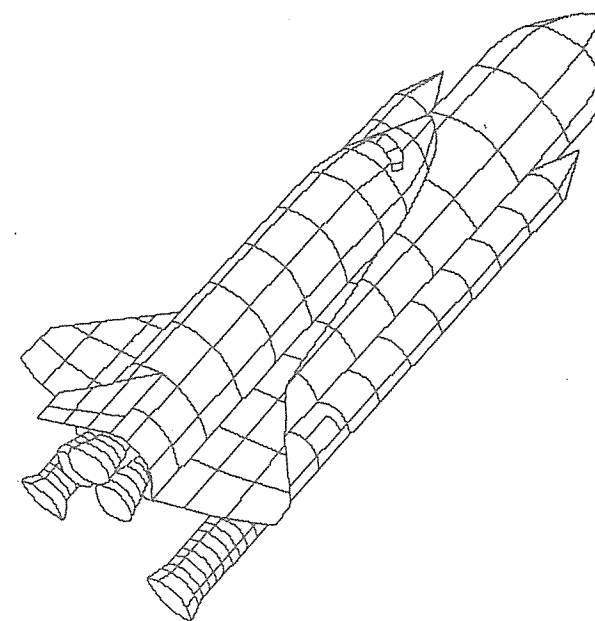
- 2E09 霞ヶ浦, 手賀沼底質中のクロロフィル類について (地調) 寺島美南子・井内美朗
- 2E10 泥岩の統成作用に伴うメチルフェナントレンの異性体組成変化 (1)島根大・理, 2)帝国石油 (株) ○三瓶良和¹⁾・中井 正²⁾・鈴木徳行²⁾・関口嘉一²⁾
- 2E11 リグニンの統成変化に関する研究 (1)名大・水圏研, 2)UC ロサンゼルス) ○大田啓一¹⁾・M. I. Venkatesan²⁾
- 2E12 深海底への投棄汚泥由来の汚染物質の輸送 (1)東京農工大・農, 2)Woods Hole 海洋研, 3)U. S. 地質調査所) ○高田秀重¹⁾・John Farrington²⁾・Michael Bothner³⁾
- (13:00~14:00) 座長: 寺島美南子
- 2E13 新庄盆地新第三紀の堆積岩中の低級ジカルボン酸 II。立体異性体について (筑波大・化) ○重松隆助・下山 晃・原田 馨
- 2E14 油田水に含まれるカルボン酸について (石油資源開発(株)・技術研) ○武田信従・鈴木 優・安田善男・星 一良
- 2E15 秋田・新潟より産する天然ガスの炭化水素組成について (地調) ○猪狩俊一郎
- 2E16 火山岩貯留炭化水素の有機地球化学 II。石油の炭素同位体組成 (地調) ○坂田 将・松久幸敏・

猪狩俊一郎

一般講演 [生物]

(14:00~15:30) 座長: 松田宗明

- 2E17 哺乳類化石の AMS- ^{14}C 年代測定と $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ からみた古気候変動 (1)名大・理, 2)名大・年代測定センター, 3)信州大・理) ○中井信之¹⁾・有田陽子²⁾・森 育子³⁾・中村俊夫³⁾・亀井節夫³⁾・秋山雅彦³⁾・沢田 健³⁾
- 2E18 哺乳類の骨の酸素同位体比と環境変動 (1)富山大・理, 2)名大・理, 3)名大・年代測定センター) ○渋谷 敏¹⁾・吉田尚弘²⁾・中井信之³⁾・有田陽子³⁾・中村俊夫³⁾
- 2E19 重金属を用いた海生哺乳類の系群識別 (1)愛媛大・農, 2)遠洋水研) ○野田香織¹⁾・市橋秀樹²⁾・馬場徳寿²⁾・清田雅史²⁾・立川 涼²⁾
- 2E20 生物性炭酸殻中のマンガン含有量 (1)愛知教育大, 2)都立科技大) ○吉岡小夜子¹⁾・榊原洋子²⁾・寺井 稔²⁾
- 2E21 鳥の羽の Sr 同位体地球化学 (1)筑波大・地球科学, 2)東邦大・理) ○中野孝教¹⁾・長谷川博²⁾・伊藤 孝²⁾
- 2E22 土壌-植物系における重金属元素の移行 (青山学院大・理工) ○竹内正行・斎藤裕子・木村 幹



日本地球化学会1991年度 第1回評議員会議事録

日 時：1991年2月16日15：00～18：30

場 所：東京大学教養学部

出席者：綿袂邦彦会長、脇田 宏副会長、海老原充、小倉紀雄、金森 悟、北 逸郎、佐野有司、清水 洋、高岡宣雄、高野穆一郎、田中 剛、長尾敬介、野津憲治、藤原祺多夫、松久幸敬、柳 哮、吉田 稔各評議員

1. 前回議事録を了承した。

2. 報告事項

2-1 庶務（野津評議員）

日本宇宙生物科学会シンポジウム、日本宇宙生物科学会第5回大会の協賛を承認した。研究公募1件、奨励金募集1件、献本3件が報告され、要項等が回覧された。平成3年度学術定期刊行物の出版助成を申請し、日本学術会議第15期会員選出にかかわる届出を行った。

2-2 幹事会（野津評議員）

2月9日東京大学理学部において幹事会を行った。出席者は、綿袂会長、脇田副会長、海老原、清水、野津、松久各幹事で、第1回評議員会の議題内容について議論した。

2-3 会計（海老原評議員）

1990年度の決算をまとめており、監査を受けた後、次回評議員会で報告の予定。

2-4 編集

(1) Geochemical Journal（松久評議員）

Vol. 24, No. 4およびNo. 5は間もなく配布、No. 6は校正中。Vol. 24は全体で400頁弱になる予定。1990年の投稿件数は54編（特集号原稿13編含む）。1991年は2月15日までで3件。Vol. 25では、日本の地球化学の特集を組む予定。

(2) 地球化学（金森評議員）

Vol. 24, No.2は校正中。4月に編集委員会を開催の予定。

(3) ニュース（高野評議員）

No. 123は12月上旬に配布完了。No. 124は準備中。

2-4 行事

(1) 地球惑星科学関連学会1991年合同大会（清水評議員）

1991年4月2～5日に、共立女子大学八王子校舎にて開催。共通セッション11テーマと固有セッションとから成り、8会場で発表件数は790件。地球化学会は春季シンポジウムを固有セッションで行う。地球化学会が提案した共通セッションとして、「希土類元素の挙動からみた地球・惑星系」を行う。なお、1992年度合同大会は4月京都大学教養部で開催予定。

(2) 1991年度愛媛年会（立川評議員からの文書連絡）
会場の都合で、1991年9月30日～10月2日愛媛大学教養部に変更して開催する。

(3) 1992年度年会（小倉評議員）

10月初旬、東京農工大学で、安部会員を実行委員にして開催予定。

2-5 将来計画委員会（脇田副会長）

1990年11月30日日本学術会議会議室にて第1回会議。1991年2月9日東京大学理学部にて第2回会議を開催。地球化学振興のためのシンポジウムを計画しているが、学術会議で行うのは日程的にかなり難しい。愛媛年会の前日に一般向け、初日の夜に会員対象のシンポジウムを計画している。

2-6 学術会議

(1) 陸水研連（小倉評議員）

1993年国際陸水科学連合の大会が日本で開催され、日本地球化学会からは福島会員が準備委員会に加わった。

3. 審議事項

3-1 入退会承認

1990年8月1日から12月31日までの入会退会は以下の通り承認された。

入会（30名）

正会員（29名）：池田英史、伊藤和男、溝口次夫、太田久仁雄、瀬尾俊弘、平岡義博、園田和彦、竹内富三夫、田辺信介、脇本忠明、柴 正敏、三瓶良和、橋本伸哉、森下祐一、田中雅文、石倉文子、芳賀信彦、柳澤文孝、矢吹貞代、（以下学生）小谷祐司、石井 暁、三島康史、李 承求、山下勝行、斎藤元治、南 秀樹、矢板 毅、北川浩之、市橋秀樹

賛助会員（1名）：新潟県衛生公害研究所（1口）

退会（20名）

名誉会員（1名）：三宅泰雄（逝去）

正会員（19名）：M. L. Jensen、伊東敬祐、柳田昭平、安藤直行、加藤拓紀、掛川一夫、勝井義雄、村上悠紀雄（逝去）、太田直一、島田昱郎、与良三男、江角比出郎、今原広次、森 一司、阿部 巖、仁科淳司、佐藤夫二男、ゴータム P、（以下学生）塩沢拓也

また、その他の異動は、以下の通りである。

学生 → 一般：成田尚史

この結果、全員数は以下のようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1990年8月1日	919	18	5	942
入 会	29	1	0	30
退 会	19	0	1	20
1990年12月31日	929	19	4	952

学生 71、在外 34 を含む

3-2 長期会費滞納者の取り扱い

1991年2月現在の会費納入状況について説明があった。2年から11年の会費滞納者の総計は84名（一般69名、学生14名、在外1名）で、5年以上の滞納者は27名（一般25名、学生1名、在外1名）であった。7年以上の滞納者14名について、庶務から会費納入を促す手紙を出し、会にとどまる希望のない会員は除籍することとした。

3-3 1992～1993年度役員選出のための選挙管理委員会の委員選出

日本地球化学会1992～1993年度役員選出のための選挙管理委員会を小倉、高野、野津評議員で構成し、委員長には高野評議員があたることが了承された。

3-4 名誉会員推薦に関する内規の改正

会員問題検討委員会（脇田委員長）から提案のあった名誉会員推薦に関する内規の改正案について審議を行い、原案どおり承認された。改正点は、以下の通りである。

	改 正 前	改 正 後
第1条	評議員若干名による推薦文を添えて	名誉会員推薦委員会によって
第3条		（新第3条を追加） 名誉会員推薦委員会は、会長または副会長経験者若干名、評議員若干名、副会長とから構成され、副会長が委員長の任に当たる。委員会委員は評議員会の承認を経て、会長が委嘱する。
第4条 附則		（旧第3条を移動） （旧第4条を移動）

本内規には、名誉会員に推薦されるための要件が明示されておらず、委員会毎その要件が変わるのは好ましくないことが指摘された。そのため新たに発足する名誉会員推薦委員会では、選考基準をまず検討し、評議員会で了承の上、具体的な人選にはいることが申し合わされた。

3-5 名誉会員推薦委員会の委嘱

名誉会員推薦に関する内規の改正が承認されたことにより、名誉会員推薦委員会委員が会長より提案され、承認された。委員は、会長および副会長経験者から一國前会長、増田元会長、評議員から清水、吉田、野津評議員、および脇田副会長から構成され、脇田副会長が委員長の任に当たることとなった。

3-6 学会賞等受賞者選考委員会からの提案

本年度の学会賞等受賞者選考の経過について、脇田選考委員会委員から説明があり、審議、投票の結果、現在の応募者から選考することになった。

1991年度第2回評議員会議事録要旨

1991年度第2回評議員会は、6月24日18時より南青山会館会議室で開かれ、出席者は綿袂会長を始め22名であった。以下に議事の概要をまとめる。正式の議事録は、次回評議員会で承認されたのち、ニュースに掲載の予定である。

1. 庶務、編集、行事に関する報告があった。1992年春季シンポジウムは、地球惑星科学関連学会1992年合同大会に参加する形で、4月7日～10日の期間中に京都大学教養部で開催される。地球化学会からの実行委員は松田准一評議員（大阪大学）。1992年度の年会は10月1日～3日東京農工大学を予定している。

2. 1991年1月1日から4月30日までの入会13名（すべて正会員）、退会16名（すべて正会員）が承認された。この結果、会員数は4月30日現在、正会員926名（学生69名、在外31名を含む）、賛助会員19名、名誉会員4名、合計949名となった。

3. 1990年度会計決算報告案が提出され、鳥居監事の監査結果報告に続いて、審議の結果、了承された。

4. 学会賞等受賞者選考委員会（角皆委員長）から1991年度の受賞者の選考結果が報告され、以下の通り授賞を決定した。

柴田賞：Paul Kazuo Kuroda（黒田和夫）博士

（Navada 大学教授）

「太陽系初期におけるプルトニウム-244の存在の発見および天然原子炉の予言」

日本地球化学会奨励賞：中井俊一博士（東京大学理学部助手）

「鉱床の年代と成因に関する同位体地球化学的研究」

5. 名誉会員推薦委員会（脇田委員長）から「名誉会員推薦に関する申し合わせ」が提案され、審議の結果了承された。さらに、この申し合わせの要件を満たしている2名の会員の名誉会員推薦が提案され、審議、投票の結果、名誉会員推薦を本年度の総会へ提案することが決まった。

新入会員紹介（1991年1月1日～4月30日入会）

正会員（13名）

酒井隆太郎

池谷 元伺

遠嶋 康德

早稲田 周

武田 信従

坪 俊彰

池田 和隆

応用地質（東京事業本部）

大阪大学理学部宇宙地球科学科

東京大学理学部地殻化学実験施設

石油資源開発（技術研究所）

石油資源開発（技術研究所）

日本工営（地質部）

（エースヘリコプター空中探査

技術研究所）

斎藤 貴之 農林水産省農業環境技術研究所
東原 雅実 三井金属資源開発㈱
佐野 栄 愛媛大学教育学部理科教育
金 栄華 (在外) 韓国 Seoul 特別市
鈴木 淳 (学生) 東北大学理学部地質学古生物学教室
岩田 尚能 (学生) 山形大学大学院理学研究科地球
科学専攻

地球惑星科学関連学会合同大会及び連絡会報告

行事幹事 清水 洋
(東京大学理学部)

1. 地球惑星科学関連学会1991年合同大会

標記の1991年合同大会は、地震学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、日本火山学会、日本測地学会、日本地球化学会の5つの学会の共催により、4月2日(火)～5日(金)の4日間、東京都八王子市の共立女子大学八王子校舎において開催された。1990年の東京工業大学における5学会の合同大会とはほぼ同様に、5学会の各々の固有セッション、11の共通セッション及び地球電磁気・地球惑星圏学会と気象学会の共催によるシンポジウムが行われた。発表件数は5学会の固有セッション(493件)、11の共通セッション(282件)、シンポジウム(6件)の合計781件であった。これは1990年の766件よりもやや多い数である。また、参加者総数も約1400名で、1990年の約1200名を大幅に上回り、活発な発表・討論が行われ、大きな成功をおさめた。合同大会の大きな趣旨である「関連分野間の緊密な研究交流」は着実に成果を上げつつあるとの感想が多く聞かれた。

今後の課題としては、地質学会、海洋学会、気象学会等の他の関連学会との開催時期の調整、またこれらの学会との部分的にしる共催の可能性、更には合同大会を毎年開催することの是非、開催時期としては春、秋のいずれが良いのか、等の問題がある。

2年目の合同大会に対する地球化学会の取り組みとしては、①地球化学会春季シンポジウムをさらに充実させること、②共通セッションに地球化学会が主体性をもったテーマをとりあげること、この2点を幹事会・評議員会で確認した。そして「希土類元素の挙動からみた地球・惑星系」を共通セッションとして提案し、田中剛・富樫茂子の両氏にコンビーナをお願いした。この共通セッションについては本号の両氏の報告に記されているように、合同大会ならではの、様々な分野の多くの研究者の参加のもとで活発な意見交換のセッションとなった。

2. 地球化学会春季シンポジウム

地球化学会春季シンポジウムは、合同大会の固有セッションの1つとして行われた。口頭発表25件を4月3日

に行い、ポスター発表5件は合同大会全体のポスター発表の時間にあわせて4月4日に行った。この春季シンポジウムへの参加者も150名を越え、盛況であった。また、他学会の方の参加も多く認められることも、春季シンポジウムの大きな特徴である。一方、海洋学会、気象学会、陸水学会等が合同大会に参加していないため、海洋化学、大気化学、陸水化学等の研究者の参加が少なかった。

会員各位の積極的な参加により、発表件数が大幅に増加し、そのため冊子状の「要旨集」の作成が可能となり、春季シンポジウムとしては初めて「要旨集」冊子を作成した。また、秋の年会と同様に「Geochemical Journal」にプログラムを掲載することとした。

来年以降も、積極的な御参加をいただき、春季シンポジウムをさらに盛り上げていただきたいと思います。春季シンポジウムの発展は、秋の年会の充実のためにも大きなプラスになると確信しています。

3. 地球惑星科学関連学会連絡会

標記連絡会は「長期的視野に立って地球惑星科学関連学会間の情報交換を行い、緊密な交流を促進するとともに、各学会固有の活動に便宜を計り、もって地球惑星科学の一層の発展を実務的に支援する」ことを目的として、1990年7月31日に地震学会、地球電磁気・地球惑星科学会、日本地球化学会、日本火山学会を構成学会として発足した。他の関連学会にも参加を呼びかけ、1991年4月現在は前記4学会の他に、日本海洋学会、日本岩石鉱物鉱床学会、日本気象学会、日本鉱物学会、日本地質学会、日本測地学会の6学会も加わり、合計10学会が参加している。幹事学会は、昨年に引き続き地震学会となり、地震学会代表の末広潔氏(東京大学海洋研究所)が連絡会の今年度の世話役をつとめる。

1991年4月26日に第1回連絡会を開催し、会の今後の運営方針、各学会間の情報交換等を行った。特に、合同大会の今後のあり方についての議論が中心となった。合同大会の試行期間3年の最終年度にあたる1992年については、4月7日～10日の日程で京都大学教養部で、1990年、1991年とはほぼ同様の形式で行うことを確認した。ただし、参加学会については最終的な確定には至っていない。1992年合同大会準備委員会は、京都大学の方が中心となる(実行委員会委員長は加藤進京都大学教授)。地球化学会からの実行委員は、松田准一評議員(大阪大学理学部)に決定した。

試行期間終了後の1993年以降の合同大会については、開催場所、時期、参加学会などの一般論を討議した。1993年以降も合同大会の継続を強く希望している学会も複数ある。地球化学会としてはどうするのか? 個人的には、地球化学会年会をますます充実させるとともに、合同大会にも積極的に参加する方が良いと思っている。松尾

博士元会長の Western Pacific Geophysical Meeting 報告(本ニュース123号)の、「合同化が進むほど各学会のidentityが問い直されることになる。本会がもっとひらかれた学会に成長するためにも、積極的に loose coupling に参加すべきである」との意見に賛成である。連絡会は、年に数回のニュースレターを編集し、各学会のニュース誌に掲載することとした。世話役は地球電磁気・地球惑星圏学会の本蔵義守氏(東京工業大学理学部)が務める。このニュースについての地球化学会の連絡役は「連絡会」と同様、行事幹事の清水洋(東京大学理学部)が担当致します。「連絡会」、「合同大会」についての御意見、また学会・シンポジウムの日程等の情報を行事幹事まで御連絡下さい。

地球惑星科学関連学会1991年合同大会

共通セッション報告

はじめに

地球化学会が春期シンポジウムを合同大会に合流させて、今年は2年目です。その詳細は清水洋氏により、地化ニュース本号に報告がなされます。この合同大会には地球化学会春季シンポジウムのように、それぞれの学会が独自で開く固有のセッションに加えて、複数の学会が共同で開く共通セッションがあります。昨年は合同大会の初年度でもあり、地球化学会主導の共通セッションは持ちませんでした。本年度は早くから地球化学会のP.R.も兼ね、他の学会にも興味をもってもらえそうな共通セッションを開こうではないかとの声がありました。

展開

地球惑星科学において、地球化学の貢献が大きい分野の1つに、希土類元素存在度による地球惑星の研究があります。本年は増田・松井本会々員による世界をリードする研究が始まって30年(近く)になることから、「希土類元素の30年」という企画はどうかとの提案がありました。合同大会の運営委員会にはかったところ、より他分野からの発表を受け入れ易い標題を!ということで「希土類元素の挙動からみた地球・惑星系」にしました。コンビーナは仕事をしていない「会務を担当していない」評議員ということで、田中と地質調査所の富樫が務めることになりました。学問分野の性格からすれば、希土類元素の挙動云々といえ、Sm-NdやLa-Ceなどの同位体系を含めると議論を深めることができると思われましたが、セッションの時間が5時間ということで、元素存在度にテーマを絞りました。

他学会からの応募がどれほどあるか見当がつかなかったこともあり、相当数(8名)の方にあらかじめ講演をお願いしました。公募により、7件の発表申込みがあり、

計15件になりました。プログラム順に紹介すると、隕石・宇宙、地球深部、鉱物粒界、元素拡散、テトラド効果、リン酸塩、花崗岩、スカルン鉱床、火山岩、酸性火山岩、セリウム異常、元素分配の扱い……と多様な発表が組まれました。

会場でのようす

標記合同大会は高尾にある共立女子大学八王子校舎で開催されました。共立女子大学には宇宙・地球科学関係で杉憲子氏ただ1名の教官しかおられないにもかかわらず、参加人員千名を越す大研究集会を引きうけていただきました。会場はごみや貼り紙の多い国立大学からは想像もできないほど清潔で快適な場所で、全8会場は無理なく能率的に配置されたものでした。JR 高尾駅から会場までのスクールバスの運行、会場の受付、懇親会、等々共立女子大学の全面的なバックアップをいただきました。ここに心から御礼申し上げます。

さて、合同セッション会場にはOHPとスライドプロジェクターが各一台づつ配置されていました。講演は12～15分を発表に、3～5分を討論にあてました。それぞれの講演には2～3件の質問があり、十分に時間を割いたつもりではあったが、講演が長目であったこともあり、やや討論時間不足とも感じられました。セッションは予想以上の人気で、常時100名以上の参加者があり、時には立つ人もいたほどでした。これは発表内容が魅力あるものであったことはもちろんですが、プログラムの配置で、午前中の隕石・高圧実験とかち合う地球・惑星の進化やマントルの物質構造など他会場のプログラムが午後から始まり、午後に火山岩とかち合う他会場のセッションが午前中に終わっており、それぞれの参加者をうまく吸収できたという合同大会ならではの利点もあったように思われます。

これからの活動

この共通セッションの企画は合同大会のみならず、地球化学会にとっても大きな成果を得たと思われます。来年の合同大会は関西地方で開かれる予定とのこと。地球化学会として、より魅力のあるプログラムを組みたいものです。夏ごろまでに個人案を作り、秋の年会のおり、実行体制を組めば、活動にも余裕があると思われます。

Geochemical Journalにはこの地球化学会ニュース125号でお知らせ致しましたように、今回の共通セッションで発表されたことを軸に、特集号を組むことになりました。たくさんの投稿をお願い致します。

(共通セッション

コンビーナ 田中 剛・富樫茂子)

第14期最後の総会終わる

平成3年6月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る5月29日から31日まで第111回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その総会で採択された勧告を中心に、同総会の議事内容等についてお知らせします。

日本学術会議第111回総会報告

日本学術会議第111回総会（第14期・第7回）は、平成3年5月29日～31日の3日間開催された。

総会冒頭に逝去された大谷茂盛、石原智男両会員の冥福を祈り黙禱を捧げた。会長からの経過報告の後各部・各委員会の報告があった。続いて規則の一部改正1件、国際対応委員会の設立等運営内規の改正1件、申し合わせ2件、勧告1件、要望1件、対外報告等3件、計9議案の提案があった。これらの議案については、同日午後の各部会での審議を経て、第2日目の午前に採決された。

なお、総会前日の午前には連合部会を開催し、これらの議案の説明、質疑を行った。また、総会に平行し、第1日目の夕方には第771回運営審議会が開催されて、これら議案についての各部の審議状況が報告された。

第2日目の午後は、「ポスト湾岸をめぐる諸問題」について自由討議が行われた。

第3日目の午前には各特別委員会が、午後には各常置委員会が開催された。

今回の総会では、「大学等における人文・社会科学系の研究基盤の整備について（勧告）」と「公文書館の拡充と公文書等の保存利用体制の確立について（要望）」が採択され、同日（30日）午後、内閣総理大臣に提出され、関係各省に送付された。

日本学術会議としての国際対応組織の問題は、前期からの懸案事項であったが、今期においてもこの問題は新たに増幅され、国際対応委員会を当分の間設立することが決まり、それに伴い運営内規の一部を改正することとなった。

対外報告としては、「人間活動と地球環境に関する日本学術会議の見解」を〔人間活動と地球環境に関する特別委員会〕が、「『医療技術と社会に関する特別委員会報告—脳死をめぐる問題に関するまとめ—』について」を〔医療技術と社会に関する特別委員会〕がまとめ採択された。また、会長提案のバイオテクノロジー国際科学委員会及び国際微生物学連合への加盟も採択された。

「ポスト湾岸をめぐる諸問題」についての自由討議は、大石泰彦副会長の司会で、はじめに話題提供として第2部の西原道雄部長、第2常置委員会の星野安三郎委員長、平和及び国際摩擦に関する特別委員会の川田 侃委員長がそれぞれ部・委員会の審議状況を報告した。それに基づき、会員間での意見交換が行われた。

大学等における人文・社会科学系の研究基盤の整備について（勧告）

国家・社会の健全な発展は、人文・社会科学と自然科学のバランスのとれた学術研究の成果が常にその土壌となっている。ところが、戦後の我が国では、自然科学の急速な進展に比して、人文・社会科学がそれに対応できない状況にある。それは、大学等における人文・社会科学系の研究基盤が整備されないまま放置されていたことに起因する。その上、これからの我が国は、国内的には広く生涯教育を推進し、国際的には各国との研究交流や留学生の受け入れなどを一層積極的に行うことを要請されている。すでに日本学術会議は、第13期において「大学等における学術予算の増額について（要望）」などを要望しており、これを踏まえて第14期では、さきに、主として自然科学系の「大学等における学術研究の推進について—研究設備等の高度化に関する緊急提言—（勧告）」の勧告をした。それに続いてここに人文・社会科学系の大学等における研究基盤を早急に改善し、整備するよう勧告する。

まず、人文・社会科学系の研究基盤を改善し、整備するためには、研究に関わる人的構成の強化を必要とする。したがって、なによりも研究者の増員が必要であり、それに関連して、特に若手研究者の養成と研究補助者の増員が求められる。今日、人文・社会科学も自然科学と同様に、研究分野が細分化されるとともに総合化も図られ、それに伴って新しい分野が開発され、それぞれの分野において総合的かつ多面的な研究方法が採られるようになったからである。

また、国内外でのフィールド・ワーク等の研究調査や外国人研究者の招へいなどがより活発に行われるためには、研究費の大幅な増額を必要とする。なお、国公立大学等における研究費の実験系と非実験系による区分は適正な基準により是正する必要がある。

さらに、人文・社会科学系の研究基盤の整備には、図書や資料の収集・保管など学術情報の充実に要求される。それを充たすには、それぞれの研究室における情報処理機器を整備・充実するとともに、図書館・情報センターなどの学術情報機関の拡充を図るべきである。その際、情報処理機器の購入と維持のために相対的に図書購入に当てる費用が圧迫されてはならず、図書費全体についても特段の増額が必要である。

以上のように人文・社会科学の人的・物的な研究基盤の速やかな整備が、国公立大学のみならず、すべての研究機関において今日切実に要望されている。なお、大学等における研究基盤の整備に役立つ民間からの寄付等の援助には、それに対する包括的かつ柔軟な免税措置等が講じられるよう配慮すべきである。

公文書館の拡充と公文書等の保存利用体制の確立について（要望）〔要旨〕

わが国の公文書等の保存体制は、公文書館法が公布・施行されて大きく前進したが、その体制はなお国際的にみて大きく立ち遅れた状況にある。公文書等はきわめて重要な学術情報であり、かつ、国民共有の文化的・歴史的資産として貴重であることから、その保存・利用体制を確立するために以下の措置を早急に講じられるよう要望する。

1. 国立公文書館の拡充とその権限の強化
現在の国立公文書館はその設備・人員等がきわめて貧弱であり、また、権限が著しく弱小である。国の公文書等の保存利用体制の確立のために、まず国立公文書館の権限を強化し、その設備・人員を大幅に拡充整備する必要がある。
2. 地域文書館の設立・整備のための国の支援の強化
公文書館法の公布以後、地方公共団体において公文書館を設立する動きがあるが、まだ、その動きは限られている。設立を促進し機能を強化するために、国の財政的援助を拡充すると共に、地方公共団体の自主性を尊重しつつ国の技術的な指導・助言を強化する必要がある。あわせて、公文書等の保存に関して、文書館の権限を強化する必要がある。

3. 公文書館専門職員養成制度と資料学・文書館学研究体制の整備
公文書館専門職員の養成・確保は緊急な課題であり、わが国にふさわしい専門職養成制度を早急に確立すべきである。この確立のために、資料学・文書館学の研究者を確保し研究を推進するための体制を整備する必要がある。
4. 公文書館法の整備
以上のような措置を講じる上で、現在の公文書館法は、公文書館の設置義務とその権限、専門職員の資格と地位、地域文書館への国の支援などについて不十分な点が多くみられるので、これを早急に整備して、公文書等の保存利用体制の確立を推進する必要がある。

人間活動と地球環境に関する日本学術会議の見解〔要旨〕

日本学術会議は、人間活動と地球環境に関する問題に強い関心を持ち、特別委員会や多数の研究連絡委員会において学術情報を集め、問題を総括し、研究体制の検討等を行ってきた。これらを基礎として見解を表明する。

日本はその自然環境の多様性や、近年の人間活動の急速な進展により環境問題に対して厳しい見方が必要である。この関連の研究は従来必ずしも十分ではなかった。国際協力の下に多岐にわたる学問分野がこれまでの枠を拡大し、多分野の学協会が融合化して活動し、新しい分野の研究活動の強力な推進を図るべきである。また、地球環境問題はグローバルな問題であるが、個々の人間の対応から出発する問題でもあるから教育や啓蒙活動が急務である。

わが国では多数の省庁が研究を行っているが、相互関係や全体を見渡した有機的・体系的な研究推進政策が必要である。日本学術会議はこれらのための助言、連絡、調整等にその組織と能力を生かして活動し努力する。

医療技術と社会に関する特別委員会報告—脳死をめぐる問題に関するまとめ—

医療技術は不断に進歩するが、その進歩が著しければ著しい程、医療技術と人々のものの考え方や社会的な習慣との間に調和を欠く状況が生じている。脳死の取扱をめぐる問題はその一つである。今期の本特別委員会では「脳死は人の死か」についての直接的な審議は保留し、「もし脳死をもって人の死とすると、あるいは臓器移植を視点にみると、何が問題になり、それを如何に考えるか」などについて論議した。本報告はその結果を整理したものである。

（原文のまま、以下項目のみ）

- 1 脳死患者の医療上の取扱
- 2 意思の個別的確認について
- 3 死亡時刻の考え方に関して
- 4 医療提供側の問題点
- 5 医療費の取扱について

日本の学術研究環境—研究者の意識調査から—（第3常置委員会）刊行される

第3常置委員会は、第13期の「学術研究動向」調査を踏まえ、21世紀に向けて我が国の学術研究の中心的存在として活躍を期待される30歳代から40歳代の若手研究者（約200人）を対照に、学術研究の基礎となる「研究環境」についてのアンケート調査（調査事項は、大別して「学術研究の組織・体制、研究者の養成・確保と国際化、研究費の調達・運用と研究設備、情報の収集・保存」）を行い、その結果を基礎に報告書を作成した。なお、本書は日学資料として刊行している。

日本学術会議主催公開講演会「日本の学術研究環境は21世紀に対応できるか」開催される

「日本の学術研究環境」の刊行を記念し、平成3年6月6日（木）13時30分～17時00分に日本学術会議講堂において開催された。近藤会長の開会のあいさつの後、澤登第2部会員の司会により、①「日本の学術研究環境—研究者の意識調査から—」（森第7部会員）②純粋基礎研究は大学しかやらない（有馬第4部会員）③私立大学の立場から（松本第2部会員）④「産業の立場から」（内田第5部会員）の講演の後、総合討論を経て、渡邊第7部会員（第3常置委員会委員長）の閉会のあいさつをもって盛況のうちに終了した。なお、本公開講演会の内容は、追って日学双書で刊行する予定である。

平成3年1月以降、委員会等別の対外報告

部	1件	特別委員会	4件
常置委員会	1件	研究連絡委員会	23件

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

「地球化学の振興に関するミニシンポジウム」の報告

1991年6月24日(月) 午後1時5分～5時20分に日本学術会議第4部会議室で標記シンポジウムが開かれた。これは地球化学宇宙化学研究連絡委員会と本会将来計画委員会との共催であった。これを企画した者の一人として概要を報告させていただく。

増田彰正研連委員長の開会の挨拶の後、直ちに3部からなるシンポジウムに入った。第1部は、報告と提言と題して、主に地球化学の内部にいる者から話を聞き、討議するものであった。

まず、立川涼氏から主に学部教育に携わった経験をもとに地球化学教育に対する提言をいただいた。氏が属する環境科学系の学科において学部4年間で関係する学問のすべてをマスターすることは不可能であり、標準的あるいは最低ラインをカバーする程度の規格化が必要と説かれた。つまり、カリキュラムを絞って、必須部分を記述した教科書が必要ということである。

高柳和夫氏は、外国で博士の学位をとり、また研究を行う立場から、日米仏の教育研究システムの比較を行った。特に、米国の大学では必須科目として国語(英語)を課し、書く力を養うとともに発表する力の向上が重視されていること、例えば、学会発表で指導教官の助けを求めるような学生はそれだけで学界から追放されるという話は印象的であった。

松尾禎士氏は、化学教室において多数の大学院生を教育された経験をもとに話された。一人のUreyを造れという主張には多くの共感があったが、現行のような日本地球化学会は不要であるとの主張には議論が沸騰した。日本の地球化学が化学教室から減りつつある時、今後どのような方向に向かっていくべきかについては、確かに議論が分かれるところである。

活発な討論で予定の時間をオーバーし、休憩時間がなくなってしまったが、小休止の後、第2部の関連分野のコメントに入った。最初は、秋山雅彦氏から地質学の立場からコメントをいただいた。ハンマーとクリノメーターに象徴される地質学分野においても新しい動きがあることを、大規模大学と小規模大学に分けて話された。そして、信州大学に新設され、来年度教授を選考する物質循環講座が紹介され、地球化学関係者にとっても明るい話題となった。

高岡宣雄氏の話は隕石学の立場からであった。隕石学あるいは宇宙化学においては、むしろ地球化学は母屋であり、その振興に地球化学関係者がもっと協力してほしいと述べられた。例えば、極地研の南極隕石センターなどその後の進展が見られないのは、研連や学会の活動が

不足しているためではないかとの指摘であった。

藤井直之氏は、地球物理学の立場からと題して物理屋と化学屋との間に立ってその違いを話された。‘事’派の多い地球物理学においての‘物’派の利点を強調された。逆に‘物’派の多い地球化学において‘事’あるいはプロセスに通じている者の強味を話された。将来の地球科学において地球物理と地球化学の役割を示唆するものであった。

小池勲夫氏は、生物学の立場から地球化学との接点について話された。生物屋と化学屋の物の見方の違いを例をあげて説明した。そして、地球、特に海洋の生物学的研究において化学的手法の有用性を強調され、意を強くする者が多かった。

第3部の総合討論は、すでに30分超過していたので、短縮せざるを得なかったが、活発なものであった。冒頭に増田委員長が平成5年度より科研費の分科として地球科学ができ、その細目として地球化学が生れる予定であると報告した点から議論が始まった。確かにこれは地球化学者にとって歓迎すべきことであろう。しかし、一方でこれにより化学教室から離れていくことも確実であろう。日本の現状は、地球物理教室はあっても、地球化学教室はない。いくつかある地球化学教室の多くは地質学系の教室に属している。このような状況下で地球化学が‘独立’したら消えてしまうのではないかという心配である。特に、大気・水・生物圏関係者の間にその危惧がある。また一方で、学問そのものの重要性は世界認知しており、日本の地球化学の火はいったん小さくなっても、また大きくなるとの見方もある。

議論は活発であったが、ここに出席した者の多くは、すでに安定したポストにいる者が大部分であり、これからどうなるかによってもっとも影響を受ける若手研究者や学生の出席者がほとんど見られなかった。秋の年会の際に将来計画委員会の企画による夜間セッションが開かれる予定である。ここでは若手からの発言を期待したい。最後に協田宏将来計画委員会委員長の挨拶で閉会した。

1992年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び研究助成候補者の推薦依頼について

下記の2件の推薦依頼が「女性科学者に明るい未来をの会」から学会宛来ておりますのでお知らせいたします。猿橋賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50歳未満)に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)をえます。

3. 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、略歴、主な業績文献リスト、及び、主な論文別刷10編程度をそえて、本会事務局までお送りください。
5. 締切は1991年11月末日(必着)。
6. 第12回の賞贈呈式は、1992年5月、東京において行う予定です。

研究助成金

1. 女性研究者で、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する者に対して行われます。
2. 助成金は1件10万円とし、年3件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者(各締切日において、満40歳未満)の略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、年月日)、発表論文題目、推薦理由等を記入して本会事務局までお送りください。
4. 締切は1991年11月末日と、1992年4月末日の2回。
女性科学者に明るい未来をの会
〒166 東京都杉並区高円寺北 4-29-2-217
☎03-3330-2455 (FAX 兼用)

[X線マイクロアナライザー(EPMA)講習会]

[主催] 日本鉱物学会 [協賛] 日本地球化学会・他

[講習会]

期 日: 平成3年10月7日(月)、8日(火) [2日間]
会 場: 新橋住友ビル・1階会議室 (東京都港区新橋5丁目11番地3)
内 容: EPMA-特長・精度・補正法、ハードと自動化プログラム、分析TEMと分析SEMの特長・精度・補正法、各種分析試料の取り扱い、無機材料物質と金属材料の定量分析、アルカリ元素-ガラスの分析

[実 習]

期 日: 10月24日(木)と10月25日(金)の2回行います(1回20人以内)。
会 場: 日本電子株式会社開発館(東京都昭島市武蔵野3丁目1-2)
内 容: EPMA、分析SEM、分析TEMの実習[1日]
[定 員] 講演会 120名、各回20名(定員に達し次第締め切ります。)
[申込方法] 下記宛に参加をお申込み下さい。参加申込用紙をお送りしますので、必要事項をご記入の上、郵送あるいはFAXにてお申込み下さい。御送金確認の上、受講表をお送りいたしますので、当日会場で御提示下さい。申し込み期限は平成3年9月30日とします。

[申込先] 日本鉱物学会事務局

〒107 東京都港区赤坂9丁目6-41

乃木坂ビル

電話 03-3475-5287 FAX 03-3475-0824

[講習会費・実習費送金先]

郵便振替 口座番号: 東京 0-601203

加入者名: 日本鉱物学会 EPMA 講習会

[参加費] (テキスト代、交流会費を含む。カッコ内の金額は実習も希望の場合)

日本鉱物学会会員 20,000円(30,000円)

日本鉱物学会賛助会員 30,000円(40,000円)

協賛学会会員 40,000円(50,000円)

一 般 50,000円(60,000円)

IGC ニュース No. 7

29th IGC 事務局 (1991年4月)

参加登録、アブストラクトの受付を開始しました。

4月1日にセカンド・サーキュラーが発行されました。このサーキュラーには参加登録<様式A>、巡検参加<様式B>、アブストラクト<様式C>のそれぞれの申込用紙が同封されています。現在これらの申込を受付中ですので、早めにお申込みください。事前登録期限(1992年2月1日)以前に申し込むと割引特典があります。

セカンド・サーキュラーは、ファースト・サーキュラーのアンケート回答者全員にすでに直接または郵送で配布されましたが、それ以外の方でも入手希望者には郵送料実費で配布しています。一部につき郵便切手260円を添えて、下記の事務局まで申し込んでください。

ファースト・サーキュラーの回答者数は3月31日の最終集計で4,316人に達しました。このうち国内の回答者は626人。日本を除く地域別順位は、ヨーロッパ(972)、アジア(827)、ソ連(714)、米国・カナダ(712)、アフリカ(185)、中・南米(151)の順でした。

日本ではどんな“おみやげ”?!

写真とロゴマークを募集中

IGC事務局では登録者全員に配布するカバンや天然石製の記念品、および売店で売る“おみやげ”について検討中です。日本らしい特徴のある心暖まる品物を探していますので、良い案がありましたら事務局へ提案下さい。また事務局では日本の地質現象を紹介する「絵はがき」用の写真および印刷物やTシャツにつけるロゴマークを募集中です。作品応募については下記事務局へお問い合わせ下さい。

〒305 筑波学園郵便局私書箱65号

第29回万国地質学会議事務局(29th-IGC事務局)

TEL: 0298-54-3627

FAX: 0298-54-3629

IGC 開催閣議決定!

政府は 6 月 7 日の閣議で日本学術会議から提案されていた第29回万国地質学会議の京都開催を了承しました。今後は関係各省庁がその開催に協力していくことが申し合わされました。日本学術会議は 8 月 1 日に同会議主催の「組織委員会」を開催することにしています。

また日本学術会議は郵政省に「IGC 記念切手」の発行を申請しました。29th IGC までにはすばらしいデザインの記念切手がお目見えし、地球科学の役割が広く社会にアピールされる絶好の機会になることが期待されます。

夏のボーナスで早めに事前登録を!

4 月 1 日にセカンド・サーキュラーが発行されたあと、すでに多くの方々による登録がなされています。割引登録期限は1992年 2 月 1 日ですが、出席予定者はできるだけ早めに登録して下さい。募金活動が開始される 8 月末日までに登録していただくと財政上たいへん助かります。サーキュラーに挟み込まれた<様式 A>の登録用紙を用いて、下記宛にお申込み下さい。

〒103 東京都中央区日本橋 2-14-9 加商ビル 2F
第29回 IGC
銀行口座: [銀行名] 東京銀行丸の内支店
[口座名] 29th IGC
[口座番号] 0973416

アブストラクトの書き方と講演のしかた

アブストラクトは1992年 1 月 1 日までに組織委員会宛

に郵送して下さい。<様式 C>を用い必ず英文でカメラレディーの原稿を作成して下さい。なおセカンド・サーキュラーには用紙が 4 枚はさみ込まれていますが、原稿は 1 編につき用紙 1 枚以内ですからおまちがえないようにして下さい。

アブストラクトは筆頭著者として 1 人 2 編まで投稿できます。プログラムに載っていないトピックスについての論文も受けつけます。その場合必要ならば新たなセッションがもうけられる可能性もあります。投稿された論文は科学プログラム委員会で審査し、口頭またはポスターセッションのいずれかに振り分けます。

受理されたアブストラクトは全て講演要旨集として出版され登録者全員に配布されます。会議後に論文集を発行する計画は現在ありませんが、コンピーナーがプロシディングとして他の出版社や科学雑誌から公表されることを歓迎しています。

論文の発表はすべて英語で行われます。同時通訳はいたしません。口頭発表は 1 件 15 分とし 5 分間の討論時間を加えます。会場では 35mm スライドプロジェクター 2 台、OHP 1 台、スクリーン 2 面が使えます。投稿に関するいっさいの資格基準はありませんから、どなたでも積極的にご応募ください。

問い合わせ先:

〒305 筑波学園郵便局私書箱 65 号
第29回万国地質学会議事務局
(29th IGC 事務局)

* 地質調査所の「地質ニュース」ではほぼ毎月「IGC 事務局ニュース」を連載しています。併せてご覧下さい。

Σ15-314

日本地球化学会ニュース

No. 127

1991. XI. 20

海洋フラックスに関する広島シンポジウムの開催について

半田 暢彦

(名古屋大学水圏科学研究所)

1991年 8 月 27 日-30 日、広島厚生年金会館において、「地球環境変動における海洋の役割に関する国際シンポジウム-特に海洋フラックスの観測を中心として」(International Symposium on Role of the Ocean in the Change of Global Environment, 略称広島シンポジウム)が開催された。この国際シンポジウムは、広島大学総合科学部の坪田博行教授が開催責任者となり、平成 3 年度国際シンポジウムの開催を文部省に申請し、採択されたので開催の運びとなったものである。コンピーナーは坪田博行(広大)、半田暢彦(名大)で、実行に際しては広島大学総合科学部の方々の協力による。「海洋フラックス」研究は、IGBP (International Geosphere-Biosphere Programme, 地球圏-生物圏国際共同研究計画)の基幹プロジェクトとして発足している JGOFS (Joint Global Ocean Flux Study, 地球規模海洋フラックス研究)に対応するもので、現在先進諸外国においては海洋フラックスの実測や、それに関連するプロセス研究が実行されている。また、得られた成果に関する国際的規模でのシンポジウムも開催され、研究成果の評価、今後の研究方針の設定などが具体的に論議されている。

今回、発表の対象となった研究海域および課題は、西部北太平洋海域・海溝域(8 報)、東部北太平洋(2 報)、沿岸域・縁辺海(7 報)、インド洋海域(1 報)、極域(南極海、北極海、ベーリング海、4 報)、動植物プランクトンおよび物質生産関係(3 報)、その他(7 報)などであった。

しかし、今回、赤道域および低緯度海域の海洋フラックスに関する報告は皆無であった。これは、今後の課題としたい。また、動物プランクトンによるフェーカルペレット形成の実験的研究の進歩をかいまみる事が出来たが、化学物質の鉛直輸送プロセスの詳細を検討するため、生物および化学分野の研究協力の実現が望まれる。

本シンポジウムには、9 名の外国人研究者(アメリカ合衆国、3 名、カナダ、1 名、韓国、1 名、台湾、1 名、ドイツ、2 名、フランス、1 名)と延べ約 35 名の日本人研究者の参加を得て実施された。3 日目の午後は中国工業試験所へのエクスカージョンにより多少の息抜きもあったが、海洋フラックスに関しての情報交換としては大変気せわしい 4 日間であったと言える。この点も今後の課題と言える。

日本地球化学会「柴田賞、学会賞、奨励賞、功労賞」

1992年度 受賞候補者推薦の募集

応募期限 1992年 1 月 31 日(金)

日本地球化学会授賞規定により、柴田賞、学会賞および奨励賞、功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記ご参照のうえ会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を自薦他薦を問わずご推薦下

さるようお願いいたします。

候補者の資格:

(柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場 3 丁目 8 番 1 号 東京大学教養学部化学教室 電話 03 (3467) 1171
発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル (4 F)
日本学会事務センター内 電話 東京 03 (3817) 5801

(学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた
本会会員。

(奨励賞) 1957年4月2日以降に生まれた本会正会員
(学生会員を含む)で、地球化学の進歩に
寄与する秀れた研究をなし、なお将来の発
展を期待しうる者。

(功労賞) 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関
し特に寄与のあった者。

募集の方法: 本会会員の推薦による。

推薦の方法: 所定用紙に記載した推薦書を、1月31日
(金)までに学会事務所へ(当日消印有
効)。

提出先: 〒113 東京都文京区弥生 2-4-16

日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

☆推薦書は同封の所定用紙もしくはこれを複写したもの
をご使用下さい。なお、この件についてのお問いわ
せは本会庶務担当幹事(下記)まで。

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学理学部地殻化学実験施設 野津憲治

電話 (03) 3812-2111 内線4624

FAX. (03) 3816-1784

なお、各賞の性格については、地化ニュース No. 123
に角皆静男、1991年度受賞者選考委員会委員長による一
文があります。

1992年地球惑星科学関連学会合同大会

日時 1992年4月7日(火)~10日(金)

場所 京都大学教養部

講演申込締切日 1992年1月25日(土)

1992年度日本地球化学会春季シンポジウムは標記合同
大会の固有セッションとして開催されます。

詳細は、先にお送り致しました「地球惑星科学関連学
会連絡会ニュース」No. 2を御参照下さい。

1992年合同大会実行委員: 松田准一

大阪大学理学部 宇宙地球科学科

Tel. 06-844-1151 (内) 4177

日本地球化学会

1991年度 第2回評議員会議事録

日時: 1990年6月24日 18:00-20:45

場所: 南青山会館会議室

出席者: 綿祓邦彦会長、脇田宏副会長、鳥居鉄也監事、
海老原允、金森悟、北逸郎、佐野有司、清水洋、
下山晃、鈴木俊雄、高岡宣雄、高野穆一郎、立

川涼、田中剛、角皆静男、長尾敬介、野津憲治、
藤原祺多夫、松田准一、松久幸敬、柳暁、吉田
稔各評議員

1. 前回議事録を了承した。

2. 報告事項

2-1 庶務(野津評議員)

日本鉱物学会 EPMA 講習会の協賛を承認した。地球
化学研究協会学術賞「三宅賞」、「朝日賞」の受賞候補者
の推薦依頼があった。トヨタ財団、地球化学研究協会
から研究助成の募集があった。学会・研究会プログラ
ム3件、国際会議案内1件、国際会議報告2件が回覧
された。献本が2冊あった。平成3年度科学研究費補
助金「研究成果公開促進費」の交付内定が通知され、
Geochemical Journal に対して1,400,000円の補助が
内定し、交付申請書を提出した。

2-2 幹事会(野津評議員)

6月15日東京大学理学部において幹事会を行った。出
席者は、綿祓会長、脇田副会長、海老原、清水、野津、
各幹事で、第2回評議員会の議題内容について議論し
た。

2-3 編集

(1) Geochemical Journal (松久評議員)

Vol. 25, No. 1は印刷中、No. 2は編集完了。No. 3
またはNo. 4で「日本の地熱系」の特集号を発行。
今年度の投稿件数は6月24日現在16編、他に特集号原稿
7編。著作権を明文化して、雑誌に印刷することにし
た。

(2) 地球化学(金森評議員)

Vol. 25, No. 1は、原稿が少し不足しており編集未
了。近く編集委員会を開催。

(3) ニュース(高野評議員)

No. 125は配布完了。No. 126は年会プログラムを中
心に8月中に配布予定。

2-4 行事

(1) 春季シンポジウム(清水評議員)

4月3、4日、地球惑星科学関連学会1991年合同大会
に参加する形で、共立女子大学で開催された。一般講演
28件、招待講演2件、登録者146名、講演要旨集販売数
60部であった。

(2) 地球惑星科学関連学会連絡会(清水評議員)

4月26日10学会から委員が出席して連絡会を行った。
1992年度の合同大会は4月7-10日京都大学教養部で開
催。地球化学会からは実行委員として松田准一評議員が
参加。連絡会は年に数回ニュースレターを発行するが、
連絡委員は清水評議員があたる。

(3) 1991年度愛媛年会(立川評議員)

9月30日から10月2日愛媛大学教養部で行う。講演件

数は240件を超えるもようである。前日の9月29日に一
般向けの講演会を予定している。

(4) 1992年度東京年会(小倉評議員より文書連絡)

1992年10月1-3日を予定している。

2-5 将来計画委員会(脇田副会長)

6月24日午後1時より、地球化学・宇宙化学研連との
共催で、「地球化学の振興に関するミニシンポジウム」
を開催した。愛媛年会の初日の夜にシンポジウムを計画
している。

2-6 選挙管理委員会(高野評議員)

1992-1993年度役員選挙について説明があった。

2-7 学術会議

(1) 第15期会員選挙(綿祓会長)

日本地球化学会からは、会員候補者として脇田会員
を届け出たが、日本地下水学会の新藤静夫氏が選出され
た。

(2) 地球化学・宇宙化学研連(角皆評議員)

今期最後の委員会では、平成5年度から科学研究費の
分科細目が変更されることへの対応が話し合われた。次
期の研連では日本地球化学会からの3名を増やして5名
の委員が出せるように要求した。6月24日午後1時より、
将来計画委員会との共催で、「地球化学の振興に関する
ミニシンポジウム」を開催した。

(3) IGBP 専門委員会(角皆評議員)

8月下旬に東京で開催予定の国際委員会がストックホ
ルムに変更になった。

2-8 その他

本年9月22-25日に北海道大学で行われる日本化学会
第62秋季年会で「地球環境と化学」のシンポジウムが開
催される。

3. 審議事項

3-1 入退会承認

1991年1月1日から4月30日までの入退会は、以下の
通り承認された。

入会(13名-すべて正会員): 酒井隆太郎、池谷元伺、
遠嶋康徳、早稲田周、武田信従、坪俊彰、池田和隆、
斎藤貴之、東原雅実、佐野栄、金栄華(外)、鈴木淳
(学)、岩田尚能(学)

退会(16名-すべて正会員): 比留川貴、河合貞吉(逝
去)、志賀史光、亀谷勝昭、本田克久、大貫佐一郎、
鈴木忍(逝去)、阿部喜久男、児玉理彦、近藤忠裕、
藤田誠、Byung Yul Moon(外)、J. P. Saheurs
(外)、M. W. Rowe(外)、加藤淳平(学)、信楽義
夫(学)。

また、その他の異動は、以下の通りである。

海外→国内(1名): 中井俊一

学生→一般(2名): 鮎沢 潤、渋谷靖弘

この結果、会員数は以下ようになった。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1991年1月1日	929	19	4	952
入会	13	0	0	13
退会	16	0	0	16
1991年4月30日	926	19	4	949

学生69、在外32を含む

3-2 1990年度決算

鳥居監事の監査を受けた1990年度会計決算報告案が提
出され、審議の上、了承された。

3-3 学会賞など受賞者の決定

学会賞等受賞者選考委員会(角皆委員長)から1991年
度の受賞者の選考結果が報告され、以下の通り授賞を決
定した。

柴田賞: Paul Kazuo Kuroda(黒田和夫)博士(Ne
vada 大学客員教授)

「太陽系初期におけるプルトニウム-244の存
在の発見および天然原子炉の予言」

日本地球化学会奨励賞: 中井俊一博士(東京大学理学部
助手)

「鉱床の年代と成因に関する同位体地球化学
的研究」

3-4 名誉会員の推薦

名誉会員推薦委員会(脇田委員長)から「名誉会員推
薦に関する申し合わせ」が提案され、審議の結果了承さ
れた。さらに、この申し合わせの要件を満たしている、
西村雅吉会員、鳥居鉄也会員の名誉会員推薦が提案され、
審議、投票の結果、両会員の名誉会員推薦を本年度の総
会へ提案することが決まった。

3-5 Goldschmidt Conference 共催要請への対応

1992年5月8-10日に米国、Virginia 州、Reston
で開催される第3回 Goldschmidt Conference への共
催要請が、事務局の Dr. Bruce R. Doe から来ており、
審議の結果、共催することが了承された。

3-6 学術法人法(仮称)制定運動への対応

日本工業学会から、学術法人法(仮称)制定運動への
協力要請があり、審議の結果、賛意を表明することとなっ
た。

1991年度 第3回評議員会議事録要旨

1991年度第3回評議員会は、9月29日18時より愛媛大
学理学部会議室で開かれ、出席者は綿祓会長を始め24名
であった。以下に議事の概要をまとめる。正式の議事録
は、次回評議員会で承認されたのち、ニュースに掲載の
予定である。

1. 庶務, 編集, 行事に関する報告があった。1992年春季シンポジウムは, 地球惑星科学関連学会1992年合同大会に参加する形で, 4月7-10日の期間中に京都大学教養部で開催される。1992年度の年会は10月1-3日に東京農工大学農学部で行われる。
2. 1992-1993年度役員選挙結果が報告された(詳細は, 本号のニュースに掲載)。
3. 日本学術会議第15期研究連絡委員会委員候補者を以下のように推薦した。地球化学・宇宙化学研究連絡委員会(5名): 石渡良志, 角皆静男, 増田彰正, 酒井均, 野津憲治。鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会(1名): 松久幸敬。海洋科学研究連絡委員会(1名): 酒井均。陸水研究連絡委員会(1名): 安部喜也。
4. 1990年5月1日から7月31日までの入会21名(すべて正会員), 退会15名(すべて正会員)が承認された。この結果, 会員数は7月31日現在, 正会員932名(学生61名, 在外31名を含む), 賛助会員19名, 名誉会員4名, 合計955名となった。
5. 1991年度総会議事次第, および総会に提出される案件が審議された。なお, この件は本号のニュースに「総会報告」として掲載されている。
6. 1992年度学会賞等受賞者選考委員会委員5名を投票により選出した。

新入会員紹介 (1991.5.1-1991.7.31)

入会 (21名)

正会員 (21名)

澤田 淳 動力炉・核燃料開発事業団東海事業所
氏家 真澄 地質調査所地殻化学部地球化学課
吉川 英樹 動力炉・核燃料開発事業団東海事業所
相馬 悠子 国立環境研究所
山田 努 東北大学理学部地質学古生物学教室
堀内 一穂 東北大学理学部地質学古生物学教室
稲葉 一穂 国立環境研究所地域環境部
竹花 大介 住鉱コンサルタント(株)地質部
堀 雅明 応用地質(株)応用化学部
マリウス オリオン イェンドリセク 三菱化成生命科学研究所
薦田 康夫 神岡鉱業(株)技術室
中野 孝教 筑波大学地球科学系
原田 一行 ジオサイエンス(株)
宮崎 昭仁 舞鶴工業高等専門学校
岡井 貴司 工業技術院地質調査所地殻化学部地球化学課
白幡 浩志 室蘭工業大学材料物性工学科
杉谷健一郎 名古屋大学教養部地学教室
S大和田淳子 愛媛大学大学院地球科学専攻

S鍵 裕之 東京大学理学部化学教室
S伊藤 孝 筑波大学地球科学研究科地質学専攻
S池見 洋明 九州大学理学部地球惑星科学教室

1991年度 日本地球化学会総会報告

1991年度日本地球化学会総会は, 1991年10月1日17時15分から, 愛媛大学教養部において, 下記の総会次第に従って行われた。

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会実行委員長挨拶
5. 議事
 - 1) 1990年度事業報告ならびに決算報告
 - 2) 監査報告
 - 3) 1991年度事業中間報告ならびに会計中間報告
 - 4) 1992年度事業計画ならびに予算案
 - 5) 1992-93年度役員選挙結果報告
 - 6) 名誉会員の推挙
 - 7) その他
6. 名誉会員証の贈呈
7. 閉会宣言

総会において了承された1990年度事業報告, 1990年度決算報告, 1991年度事業中間報告, 1991年度会計中間報告, 1992年度事業計画, 1992年度予算案を以下に順次示す。

1990年度事業報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1990年1月1日	891	12	5	908
入会	88	7	0	95
退会	50	0	1	51
1990年12月31日	929	19	4	952

2. 年会, 委員会等開催数

年会1回(10/3-5: 新潟), 総会1回(10/4: 新潟), 評議員会3回(2/17, 6/23, 10/2), 幹事会3回(2/10, 6/16, 9/8), 編集委員会4回, 春季シンポジウム1回(4/7: 東京, 地球惑星科学関連学会1990年合同大会に参加), 国際地球物理金沢会議(WPGM)(8/21-25: 金沢, 国内8学会およびAGUと主催), 学会賞等受賞者選考委員会2回, 賞規程, 受賞者選考細則見直し委員会1回, 会員問題検討委員会3回, 将来計画委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 24 (1-6), 地球化学

- Vol. 24 (1, 2)
ニュース発行
Nos. 120, 121, 122, 123
学会賞等の授与(日本地球化学会賞1件, 奨励賞2件)
学会共催, 協賛
第27回理工学における同位元素研究発表会(共催)
日本宇宙生物学会第4回大会(共催)
国際腐植物質学会第5回国際会議(協賛)

1990年度決算報告

収支決算書

(自1990年6月30日 至1990年12月31日)

収入の部		
科目	決算額(円)	(予算額, 円)
1. 会費収入	7,694,000	(6,800,000)
1.1. 正会員	6,490,000	
1.2. 学生会員	366,000	
1.3. 賛助会員	422,000	
1.4. 海外会員	262,000	
1.5. 入会金	154,000	
2. 刊行物売上	4,790,988	(4,600,000)
2.1. 別刷	633,608	
2.2. Back No.	4,157,380	
3. 広告料	104,300	(200,000)
4. 助成金	1,400,000	(1,340,000)
5. 雑収入	106,903	(30,000)
6. 前年度名簿積立金	0	(0)
7. 前年度基本財産充当引当金	2,000,000	(500,000)
8. 国際会議預金利息	562,014	(150,000)
9. 前年度繰越金	12,261,472	(10,500,000)
収入合計	28,919,677	(24,120,000)

支出の部

科目	決算額(円)	(予算額, 円)
1. 事業費	12,456,433	(12,600,000)
1.1. 出版費	9,958,515	(9,800,000)
編集	(1,200,000)	(1,200,000)
印刷	(7,674,581)	(7,800,000)
発送	(1,083,934)	(800,000)
1.2. 行事費	517,368	(500,000)
1.3. 学会賞経費	33,959	(50,000)
1.4. 委員会活動費	123,500	(150,000)
1.5. 名簿積立金	300,000	(300,000)
1.6. 名簿作成費	0	(0)

1.7. 事務委託費	1,443,731	(1,600,000)
1.8. 会員業務郵税	79,360	(200,000)
2. 管理費	1,063,334	(1,281,600)
2.1. 庶務費	200,000	(200,000)
2.2. 会議費	135,982	(200,000)
2.3. 通信費	22,166	(30,000)
2.4. 旅費	506,000	(600,000)
2.5. 選挙費	0	(0)
2.6. 雑費	27,586	(80,000)
2.7. 会誌保管料	171,600	(171,600)
3. 予備費	0	(500,000)
4. 基本財産充当引当金	2,000,000	(500,000)
5. 次年度繰越金	13,399,910	(9,238,400)
支出合計	28,919,677	(24,120,000)

(注) 次年度繰越金には1990年度発行出版物の出版費未払い分約400万円を含む。

1991年度事業中間報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1991年1月1日	929	19	4	952
入会	34	0	0	34
退会	31	0	0	31
1991年7月31日	932	19	4	955

2. 年会, 委員会等開催数

年会1回(9/30-10/2: 松山), 総会1回(10/1: 松山), 評議員会3回(2/16, 6/24, 9/29), 幹事会3回(2/9, 6/15, 9/21), 編集委員会4回, 春季シンポジウム1回(4/3-4: 八王子, 地球惑星科学関連学会1991年合同大会に参加), 地球化学の振興に関するミニシンポジウム1回(6/24: 東京), 日本地球化学会市民講演1回(9/29: 松山), 将来計画委員会2回, 学会賞等受賞者選考委員会2回, 会員問題検討委員会1回, 名誉会員推薦委員会3回, 選挙管理委員会2回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 25 (1)

4. ニュース発行

Nos. 124, 125, 126

5. 会員名簿発行

学会賞等の授与(柴田賞1件, 日本地球化学会賞1件)

7. 1992~1993年度役員選挙

8. 学会共催, 協賛

第28回理工学における同位元素研究発表会(共催)

日本宇宙生物学会第5回大会(共催)

1991年度質量分析連合討論会(共催)

1991年度会計中間報告

(自 1991年1月1日 至 1991年6月30日)

[収入の部]

科 目	収入額(円)	(予算額, 円)
1. 会費収入	7,040,300	(7,100,000)
1.1 正会員	6,178,000	
1.2 学生会員	300,000	
1.3 賛助会員	413,000	
1.4 海外会員	93,300	
1.5 入会金	56,000	
2. 刊行物売上	2,597,687	(4,600,000)
2.1 別刷	371,767	
2.2 Back No.	2,225,920	
3. 広告料	635,000	(300,000)
4. 助成金	0	(1,400,000)
5. 雑収入	168,924	(50,000)
6. 前年度名簿積立金	300,000	(300,000)
7. 前年度基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)
8. 前年度繰越金	13,399,910	(10,500,000)
(収入合計)	24,141,821	(26,250,000)

[支出の部]

科 目	支出額(円)	(予算額, 円)
1. 事業費	5,727,628	(13,350,000)
1.1 出版費	5,178,399	(10,000,000)
編 集	(1,200,000)	(1,200,000)
印 刷	(3,627,608)	(8,000,000)
発 送	(350,791)	(800,000)
1.2 行事費	445,630	(400,000)
1.3 学会賞経費	0	(50,000)
1.4 委員会活動費	60,789	(300,000)
1.5 名簿積立金	0	(0)
1.6 名簿作製費	0	(800,000)
1.7 事務委託費	0	(1,600,000)
1.8 会員業務郵税	15,810	(200,000)
2. 管理費	930,226	(1,748,400)
2.1 庶務費	200,000	(200,000)
2.2 会議費	85,982	(300,000)
2.3 通信費	5,735	(30,000)
2.4 旅費	629,000	(800,000)
2.5 選挙費	0	(100,000)
2.6 雑費	9,509	(100,000)
2.7 会誌保管料	0	(218,400)
3 予備費	0	(500,000)
4 基本財産充当引当金	0	(2,000,000)
5 次年度繰越金	0	(8,651,600)
(支出合計)	6,657,854	(26,250,000)

1992年度事業計画

1. 年会1回 (東京農工大学)
2. 総会1回 (東京農工大学)
3. 春季シンポジウム: 地球惑星科学関連学会1992年合同大会 (京都大学)
4. 評議員会3回
5. 幹事会3回
6. 会誌発行
Geochemical Journal Vol. 26(1-6),
地球化学 Vol. 26 (1,2)
7. ニュース発行
Nos. 128, 129, 130, 131
8. 学会賞等受賞者の選考
9. 学会共催, 協賛
第29回理工学における同位元素研究発表会
Goldschmidt Conference
29th International Geological Congress

1992年度予算

[収入の部]

科 目	1992年(円)	(1991年, 円)	増 減
1. 会費収入	7,500,000	(7,100,000)	400,000
2. 刊行物売上	4,600,000	(4,600,000)	0
3. 広告料	200,000	(300,000)	△100,000
4. 助成金	1,400,000	(1,400,000)	0
5. 雑収入	300,000	(50,000)	250,000
6. 前年度名簿積立金	0	(300,000)	△300,000
7. 前年度基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)	0
8. 前年度繰越金	11,500,000	(10,500,000)	1,000,000
(収入合計)	27,500,000	(26,250,000)	1,250,000

[支出の部]

科 目	1992年(円)	(1991年, 円)	増 減
1. 事業費	13,450,000	(13,350,000)	100,000
1.1 出版費	10,400,000	(10,000,000)	400,000
編 集	(1,200,000)	(1,200,000)	0
印 刷	(8,200,000)	(8,000,000)	(200,000)
発 送	(1,000,000)	(800,000)	(200,000)
1.2 行事費	500,000	(400,000)	100,000
1.3 学会賞経費	50,000	(50,000)	0
1.4 委員会活動費	300,000	(300,000)	0
1.5 名簿積立金	400,000	(0)	400,000
1.6 名簿作製費	0	(800,000)	△800,000
1.7 事務委託費	1,600,000	(1,600,000)	0
1.8 会員業務郵税	200,000	(200,000)	0
2. 管理費	1,650,000	(1,748,400)	△98,400
2.1 庶務費	200,000	(200,000)	0

2.2 会議費	300,000	(300,000)	0
2.3 通信費	30,000	(30,000)	0
2.4 旅費	800,000	(800,000)	0
2.5 選挙費	0	(100,000)	△100,000
2.6 雑費	100,000	(100,000)	0
2.7 会誌保管料	220,000	(218,400)	1,600
3 予備費	500,000	(500,000)	0
4 基本財産充当引当金	2,000,000	(2,000,000)	0
5 次年度繰越金	9,900,000	(8,651,600)	1,248,400
(支出合計)	27,500,000	(26,250,000)	1,250,000

1992~1993年度

日本地球化学会役員選挙結果報告

1992年度選挙管理委員長 高野稔一郎

1. 投票総数	176	有効投票	176
2. 会 長	当選	脇 田 宏	164
		石 渡 良 志	1
		小 坂 丈 予	1
		兼 岡 一 郎	1
		北 野 康	1
		酒 井 均	1
		柴 田 賢	1
		半 田 暢 彦	1
		半 谷 高 久	1
		綿 祓 邦 彦	1
		白 田 暢 彦	3
3. 副会長	当選	半 田 暢 彦	159
	次点	角 皆 静 男	3
		綿 祓 邦 彦	2
		石 渡 良 志	1
		小 倉 紀 雄	1
		小 島 稔	1
		兼 岡 一 郎	1
		田 中 剛	1
		脇 田 宏	1
		白 票	6
4. 監 事	当選	一 國 雅 巳	166
	次点	鳥 居 鉄 也	2
		佐 藤 和 郎	1
		大 隅 多 加 志	1
		松 井 義 人	1
		綿 祓 邦 彦	1
		白 票	4
5. 評議員	当選	日 下 部 実	144
	当選	清 水 洋	139
	当選	北 逸 郎	136
	当選	石 渡 良 志	133
	当選	杉 崎 隆 一	132
	当選	大 隅 多 加 志	131
	当選	海 老 原 允	128
	当選	佐 野 有 司	124
	当選	下 山 晃	123

当選	松 田 准 一	123
当選	長 尾 敬 介	122
当選	富 樫 茂 子	121
当選	藤 原 棋 多 夫	112
当選	中 井 俊 一	104
当選	野 尻 幸 宏	104
当選	鈴 木 徳 行	103
当選	安 部 喜 也	101
当選	高 岡 宣 雄	47
当選	野 崎 義 行	33
当選	立 川 涼	32
当選	松 本 英 二	27
当選	松 葉 谷 治	26
当選	中 井 信 之	23
当選	兼 岡 一 郎	22
当選	吉 田 稔	21
当選	水 谷 義 彦	20
当選	金 森 悟	19
当選	梶 原 良 道	14
当選	乗 木 新 一 郎*	14
当選	中 山 英 一 郎	14
当選	増 田 彰 正	14
当選	坪 田 博 行	11
当選	小 嶋 稔	9
当選	川 辺 岩 夫	9
当選	木 越 邦 彦	9
当選	和 田 英 太 郎	8
当選	綿 祓 邦 彦	7
当選	植 松 光 雄	6
	他 198 名	
		334
	無 効 投 票	7
	白 票	714
	投 票 総 数	3,520

*役員選出細則第6条(2) 1による。

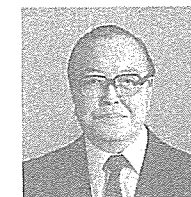
新名誉会員の紹介

鳥 居 鉄 也 氏

綿 祓 邦 彦

理学博士鳥居鉄也先生というよりも“南極の鳥居さん”と皆に敬愛される鳥居先生が今日、地球化学会の名誉会員になられた。

鳥居先生は1946年9月東京大学理学部化学科を卒業され千葉大学教授、千葉工業大学教授を歴任、



現在日本極地振興会常務理事である。日本の南極地球化学は先生なくては考えられない。多くの地球化学者がお世話になり、また御援助をいただいている。鳥居先生の南極とのつき合いは長く、第1次南極観測から参加されている。IGYと共に始まった日本の南極観測は現在

も観測隊を送りこんでいるが、宗谷時代の苦勞をした人は少なくなってしまった。先生は地球化学の隊員として、また、越冬隊長として、日本の南極観測をリードし、中断期にはニュージーランドと共同研究を開始し、マクマード地域の地球化学的研究は南極石の発見、南極の塩湖の研究に対する地球化学協会賞の受賞へと発展した。

一方、多くの研究者が不得手とする経理の面で長い間地球化学会の監事として会のお世話をいただいた。

鳥居先生にはこれから地球化学会にいろいろと御助言をいただきたいと思っている。南極地球化学のメンバーにとって先生は南極のおじさんなのである。

西村雅吉氏

角皆 静男

西村雅吉先生は、現在74歳、札幌で活発にご活躍中です。最近は、豪華房より「環境化学」(1991)を出版されました。



西村先生は、1940年北海道大学理学部を卒業の後、そのまま助手、講師、助教授として勤務され、北海道や青森県の温泉について研究されました。主成分のほか、マンガンやホウ素について自ら工夫した分析法で測定し、湧出機構の解明を試みた結果が学位となりました。

1959年より2年間米国に留学し、隕石の亜鉛について研究されました。そして、1965年北大水産学部に教授として赴任され、これまでの分析化学の基礎を海洋環境の解明に応用されました。これが日本分析化学会賞ともなりました。また、多数の卒業生を世に送り出し、先生の下で研究し、学位を得た者として、ご退官までに、松永勝彦、中谷周、城戸勝利、野崎義行、乗木新一郎、小西繁樹、南川雅男、日下部正志、植松光夫、品川高儀がいます。

書評

『宇宙と地球の化学』

佐野 有司

本書は日本化学会編集の新化学ライブラリー(全30巻)の内の1巻として最近刊行されたものである。3人の著者は現代日本を代表する宇宙化学・地球化学者であり、新しい研究成果もとり入れて書かれた本書の内容の信頼度は高い。裏表紙にある各章の分担を見ると、主として宇宙化学については中川直哉氏が担当し、地球化学については田中剛氏が執筆している。増田彰正氏には特定の分担がなく、全体を監修したものと推測される。

本書は、宇宙化学・地球化学の専門家にも十分満足できる内容をもちながら専門外の人にも理解できるように平易に記述するよう意図されている。難しい数式や化学式は多用されていないので、理工系の学部学生だけでなく文科系の教養課程の学生や一般の技術者にも理解できる内容である。特に、中川氏が担当した章では随所に著名な科学者たちの肖像画や写真が図に登場して、科学史の勉強にもなる。一方、田中氏が担当した章では、時としてユーモアをまじえた軽妙な文体が印象的である。

宇宙化学・地球化学の専門家にとっては、2年前に刊行された松尾禎士氏の監修になる『地球化学』やかなり古い小沼直樹氏著の『宇宙化学』に比較すると少し物足りない内容である。たとえば大学院の講義で使用するには、さらに勉強する人のために図の出典や原著の参考文献が必要と思われる。

全体としては良く書かれた本であり、肩の凝らない読み物に仕上がっている。宇宙化学・地球化学に興味をもつ人にはぜひ進めたい入門書である。

首都圏における多摩川およびその流域の 環境浄化に関する基礎研究、応用研究、 環境改善計画のための研究、募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団(会長 横田二郎)は、昭和50年度より、多摩川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に259件の研究に助成金を交付し、198件の研究報告書を受領しています。

平成4年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

研究を専門とする方に限らず、一般のどなたでも研究に意欲のある方でしたら、奮って応募して下さい。

1. 研究について

多摩川は山梨県笠取山を水源とし、東京都と神奈川県の間境を経て、東京湾に至る138kmの1級河川です。その流域面積は1,240km²といわれています。

多摩川を浄化するためには、その流域の環境をも改善しなければ目的は達成できません。

従って、河川や地下水の水質や水量、それらと関わりにある生物相や生物群集の研究、多摩川およびその流域の地質、地形などの自然科学的研究だけでなく、土地利用・地域計画、都市化に関連する諸問題、川の歴史や文化、環境観や環境教育など広く自然科学と社会科学にまたがった研究も大いに歓迎いたします。

また、治水、利水、親水、流域改善計画に関するあらゆる領域にわたる広汎な研究を期待しております。

欧米に例をみない速さで、高齢化がすすみ人口の増加

な首都圏の環境のなかで、水域と陸域の統合体である多摩川の河川からその影響圏の環境を見直してみることは、極めて大切なことと考えます。

公募締切日 平成4年1月16日

応募についての詳細は、下記財団事務局へお問い合わせ下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号

(渋谷地下鉄ビル内)

財団法人・とうきゅう環境浄化財団

電話 (03) 3400-9142

V.M. GOLDSCHMIDT CONFERENCE

An International Conference
for the Advancement of Geochemistry

General Information

The V.M. Goldschmidt Conference will be held from Friday, May 8 to Sunday, May 10, 1992. It will focus on the chemical aspects of the earth and planetary sciences. It is sponsored by the Association of Exploration Geochmists, the Division of Geochemistry of the American Chemical Society, the European Association of Geochemistry, The Geochemical Society, the Geochemical Society of Japan, the International Association of Geochemistry and Cosmochemistry, the Society of Environmental Geochemistry and Health, and the United States Geological Survey.

The Goldschmidt Conference will be held at the Hyatt Regency Reston, 12 km from Dulles Airport, 1.5 km from the U.S. Geological Survey, and 40 km from downtown Washington, D.C. (reachable by bus.) The hotel will provide shuttle service from Dulles Airport. It is scheduled just prior to the spring meeting of the American Geophysical Union, which will be held in Montreal, Canada, 11-15.

Registration Fees

Registration and field trip costs will be announced in the second brochure.

Response to the First Brochure

Please return the attached response card by September 30, 1991. Early responses are important to the organizing committee as a planning aid. All respondents will receive a copy of the second brochure. Please note that nothing in this first brochure should be considered final.

Schedule

September, 30, 1991—Response cards expected

December 16, 1991—All abstract due

March 16, 1992—Preregistration deadline

May 8, 1992—Conference begins

Special conference events:

Wednesday and Thursday (May 6-7)—Field trips

Friday evening (May 8)—General reception

Saturday evening (May 9)—Banquet

Special Activities for Guests

A guest package will be distributed.

Scientific Program

Abstracts: All abstracts submitted will be reviewed and accepted for presentation by the Technical Program Committee. Abstract forms will be mailed to those responding to this circular and to members of sponsoring and participating societies as well as to all geochemistry departments in North America and Europe. Additional abstract forms can be obtained from:

Donna Ricketts: The Pennsylvania State University, 409 Keller Conference Center, University Park, PA 16802-1304, fax (814) 865-3749.

The deadline for all abstracts is December 16, 1991.

Presentations: Technical sessions will consist of both oral and poster presentations. One 35mm (2"×2") projector and one overhead projector will be available. All papers must be presented in English, as there will be no simultaneous translation facilities. If you feel that your command of English is insufficient to deliver a paper orally, you may wish to present a poster paper. The program committee reserves the right to transfer papers from oral to poster sessions.

Symposia: A short course before the Goldschmidt Conference on submarine hydrothermal processes is also being considered.

1. Symposium in Honor of H. D. Holland.

H. Ohmoto, Department of Geosciences, The Pennsylvania State University, University Park, PA 16802; phone (814) 865-4074; fax (814) 865-3191.

2. International Geochemical Mapping (AEG).

Peter Davenport, Department of Mines and Energy, P.O. Box 8700, St. Johns, Newfoundland, CANADA A1B 4J6; phone (709) 729-2171; fax (709) 729-3493.

3. Environmental Geochemistry and Health (SEGH).

Bobby Wixson, Dean, College of Sciences, Clemson University, 120 Kinard Laboratory, Clemson, SC 29634-1901; phone (803) 656-3472; fax (803) 656-0245.

4. Geochemical and Isotopic Record of Global Change

Milan Pavich, U.S. Geological Survey, 908 National Center, Reston, VA 22092; phone (703) 648-6963; fax (703) 648-6941.

5. Isotopic and Trace Element Modeling.

Robert Zartman, U.S. Geological Survey, Box 25046/DFC/MS 963, Denver, CO 80225; phone (303) 236-7908; fax (303) 233-7984.

6. Ocean Ridge Magmatic Processes.

Emily Klein, Department of Geology, 317 Old Chemistry Building, Duke University, Durham, NC 27706; phone (919) 684-5965; fax (919) 484-5833.

7. Advances in Laser- and Ion-probe Mass Spectrometry.

Wayne C. (Pat) Shanks III, U.S. Geological Survey, 954 National Center, Reston, VA 22092; phone (703) 648-6336; fax (703) 648-6684.

8. Ab-initio Methods.

Tony Lasaga, Department of Geology and Geophysics, P.O. Box 6666, Yale University, New Haven, CT 06511; phone (203) 432-3127; fax (203) 432-3134.

9. Diagenesis of Clay Minerals in Sedimentary Basins.

Lee Kump, Department of Geosciences, The Pennsylvania State University, University Park, PA 16802; phone (814) 863-1274; fax (814) 865-3191.

10. Surface Chemistry of Natural Materials (ACS/GS).

James A. Davis, U.S. Geological Survey, Mail Stop 465, Menlo Park, CA 94025; phone (415) 329-4484; fax (415) 329-4463.

11. Measurement and Estimation of Kinetic and Thermodynamic Data for Low-temperature Geochemistry.

J. Donald Rimstidt, Department of Geological Sciences, Virginia Polytechnic Institute, Blacksburg, VA 24061; phone (703) 231-6589; fax (703) 231-3386.

12. Geochemistry of Accessory Minerals.

E. Bruce Watson, Department of Earth and Environmental Sciences, Rensselaer Polytechnic Institute, Troy, NY 12180-3590; phone (518) 276-6475; fax (518) 276-6003.

13. Trace Element Chemistry/Crystal Chemistry of the Rock-forming Silicates.

J.J. Papike, Department of Geology and Institute of Meteoritics, University of New Mexico, Albuquerque, NM 87131; phone (505) 277-1644; fax (505) 277-3577.

Those who wish to contribute to a symposium should correspond with the organizers.

Field Trips

The following field trips are planned for Wednesday, May 6, or Thursday, May 7.

1. Igneous Rocks of the Eastern Triassic Basins.

Albert Froelich and David Gottfried, U.S. Geological Survey, 926 National Center,

Reston, VA 22092; A. Froelich, phone (703) 648-6950; D. Gottfried, phone (703) 648-6310.

The U.S. Geological Survey study of these basins is being concluded and an Open File Report of more than 900 chemical analyses should be available. This field trip will concentrate on the Culpepper Basin that is in the Reston area.

2. Geochemistry of Small Drainage Basins.

Owen Bricker, U.S. Geological Survey, 432 National Center, Reston, VA 22092; phone (703) 648-5824. This field trip will concentrate on basins underlain by bedrocks that leave the basins sensitive to the effects of acid rain.

Response Card

V.M. Goldschmidt Conference

May 8-10, 1992

Mail to be received by: September 30, 1991.

Last name	First name	Middle initial
Title or position		
Company or organization		
Business address (number and street or box no.)		
(city)	(state)	(zip code)
()		
Business telephone (include area code)		

- () Check here to be kept on the list for all subsequent mailings.
- () Check here if you would like information on submitting an abstract.
- () Check here if you will be accompanied by a guest.
- () Check here if you are interested in the igneous rocks field trip.
- () Check here if you are interested in the small drainage basins field trip.

Mail to: Donna Ricketts, The Pennsylvania State University, 409 Keller Conference Center, University Park, PA 16802-1304, fax (814) 865-3749.

IGCニュース No. 9

29th IGC事務局 (1991年8月)

第7回組織委員会開催

<組織委員長報告>

6月7日第29回 IGC 開催が閣議了解された。

後援官庁は一部依頼中も含めると文部・農水・通産・運輸・建設・北海道開発・科学技術・環境・国土の9省庁と工業技術院になる予定。

6月7日 IUGS の Cordani 会長が来日し、京都 IGC の開催準備状況等について意見を交わした。

8月1日に学術会議主催の組織委員会が開催された。

<事務総長報告>

2nd Circular を合計18,000部印刷し、4月中旬 JAL により N. Y., London へ空輸し、北米・欧州へは現地公認エージェント経由で配布した。その他の国々へは5月初旬に学術会議が航空便で配布した。

7月末現在の登録者は63人。ビジネス委員会の申込は7月1日の締め切り段階で35件。ジオホストは10月1日まで受付中だが8月6日現在で82名の申込があった。

IGC 記念切手発行の申請が学術会議から郵政省郵務局に出された。9月下旬にその採否が決定される予定。

登録者に配布するみやげ物を検討中。事務局案としてはバッチ、マーク入り文鎮のほか、本年9月に IUGS が発行する“Episode” (IGC 特集) を同封の予定。地質からも地質図・絵はがき等の案が出されている。その他のアイデアを募集している。

ついで以下の議題について審議されました。

1. 新たに副会長として藤森正路氏 (住友金属鉱山株式会社会長)、高橋良平氏 (九州大学学長) を推薦し、委員の交代を含む新組織委員が承認された。
2. 財務局の会計運用に関する「会計管理規定」と関連する「組織委員会運営規約」の改正を承認した。
3. ジオホスト選定委員会のメンバーとして組織委員長、事務総長、プログラム委員長、ジオホスト委員長と、IUGS から2名、UNESCO, AGID、及び28th IGC から各1名の委員が加わることが提案され承認された。
4. 個人および学会の募金協力に対して、一定額以上については登録料を無料にするなど、何らかの特典をつける案が提案され承認された。企業・法人については継続して審議することとなった。
5. 以下のような今後のスケジュールが検討され承認された。

今後のスケジュール

1991年

- 8月24日 指定寄付金受付開始 (1993年8月23日まで)
- 9月 末 記念切手発行決定
- 10月1日 ジオホスト申込締め切り
- 10月上旬 ジオホスト選考委員会
- 11月下旬 プログラム委員会
- 12月1日 アブストラクト申込締め切り
- 12月 アブストラクトの採否決定と通知
ジオホスト候補者の決定と通知

1992年

- 1月 第8回組織委員会
- 2月1日 事前登録申込締め切り
- 2月 巡検コース最終案決定
- 3月初旬 第9回組織委員会
3rd Circular 原稿締め切り、印刷
- 中旬 巡検ガイドブック完成
- 5月初旬 3rd Circular 発送
- 6月 第10回組織委員会
- 6月中旬 プログラム、アブストラクト集完成
講演者に通知
- 8月中旬 おみやげ品納入
- 8月23日 第11回組織委員会
- 8月24日～9月3日 本会議

お詫びと訂正

前号の「IGC ニュース No. 8」でアブストラクトの申込締め切り日を誤って1992年1月1日と報告しましたが、正しくは1991年12月1日締切です。お詫びして訂正します。

ご質問ご意見は下記事務局へご連絡ください

〒305 筑波学園郵便局 私書箱65号

第9回万国地質学会事務局 (29th IGC 事務局)

Tel: 0298-54-3627 Fax: 0298-54-3629

IGC ニュース No. 10

29th IGC事務局 (1991. 10. 10)

アブストラクトの〆切は12月1日です。

IGC アブストラクトの〆切は1991年12月1日です。

セカンドサーキュラーにとじこみの用紙をお使い下さい。原稿の長さは、1件につき1枚です。筆頭筆者として2件まで (招待講演も含む) 応募できます。原稿は50%縮尺で掲載されます。詳細はセカンドサーキュラーを御覧下さい。

ジオホストに800件近くの応募がありました。

10月1日に〆切ったジオホストに800件近くの応募

がありました。中国・ソ連・インドからの応募が半数を占めています。採否はIUGS, ユネスコ等からの推薦委員も含まれたジオホスト選考委員会で決定されます。

記念切手の発行が正式に決定しました。

郵便省の審議会で1992年度にIGC 記念切手の発行が決定しました。デザインその他に関しては1992年度にはいつから検討されます。なお記念切手の発行日は会議開催日(1992年8月24日)となります。

世界にアピールする絶好のチャンス—科学展示会—の参加を募集中です。

内外の公的機関、国際機関、民間企業などからの申込みがきています。世界中から地質分野の研究者が集まるこの機会をぜひ活用して下さい。申し込み、お問い合わせは学会事務局科学展示係までご連絡下さい。

重要な日程

12月1日 アブストラクト申込締め切り
12月 アブストラクトの採否決定と通知
ジオホスト候補者の決定と通知
1992年
2月1月 事前登録申込締め切り
3月中旬 巡検ガイドブック完成
5月初旬 3rd Circular 発送
6月中旬 プログラム、アブストラクト集完成
講演者に通知
8月24日～9月3日 本会議

「CO₂と海洋とのかかわりに関する国際ワークショップ(第1回)」のお知らせ

標記のワークショップ(The 1st International Workshop on Interaction of CO₂ and Ocean)が下記の要領で開かれます。

記

日時:平成3年12月3・4日(火・水)
会場:財団電力中央研究所 我孫子研究所
主催:財団法人電力中央研究所
協賛:日本地球化学会ほか
組織委員会:

半田暢彦 名古屋大学水圏科学研究所教授(委員長)
石谷 久 東京大学工学部資源開発工学科教授
酒井 均 山形大学理学部地球科学科教授
高橋正征 東京大学理学部植物学科助教授

目的:地球温暖化の抑制に向けて、世界各国で様々な努力が進められている。そのような中で、地球の炭素循環を解明するために、海洋(特に深海)を対象にして、海洋とCO₂との関わりを明らかにする。

プログラム概要:①大気と海洋とのCO₂交換
②海洋の生物活動とCO₂
③海底火山活動とCO₂
④海洋への炭素ストックの可能性

参加申込先:11月20日(水)までに下記事務局あてお申し込みください。なお、会場の都合により、組織委員会にて人数を制限させていただくことがあります。

〒270-11 千葉県我孫子市我孫子1646

財団法人電力中央研究所 我孫子研究所
大隅多加志 または 坂口 勇・丸山康樹
(電話(0471)82-1181, FAX(0471)83-2966)

三菱化成生命科学研究20周年記念シンポジウム

＜21世紀—新しいライフサイエンスの展開＞

日時:1991年12月12日(木) 9:20(開場)～18:10
12月13日(金) 13:00(開場)～16:30
場所:経団連会館(14F:経団連ホール)
東京都千代田区大手町1-9-4
TEL 03-3279-1411(代)

プログラム

第一日目(9:50より)

挨拶 古川昌彦(三菱化成株式会社 取締役社長)
今堀和友(三菱化成生命科学研究 所長)

第一部:脳神経系の仕組みを解く(10:25より)
神経系の機能分化・回路形成機構解明への糸口

宋 時英

神経回路の可塑性の分子機構を探る

高橋正身

第二部:高次機能への挑戦(13:30より)

アルツハイマー病の解明をめざして

—Tau Protein Kinase—

石黒幸一

“哺乳動物の冬眠”—低体温への適応—

近藤宣明

生物の昼と夜はいかにして作られるか

井上慎一

ショウジョウバエの配偶行動を支える

山元大輔

遺伝子のはたらき

第三部:免疫系における自己制御(16:20より)

細胞傷害性T細胞(CTL)の機能と役割

高山 大

T細胞レパトア形成におけるグルコ

コルチコイドホルモンの役割

岩田 義

第二日目(13:30より)

“環境問題のブレークスルーを求めて”

パネルディスカッション

“自然と共生する新しい技術文明”

—地球の歴史の中で考える—

挨拶

今堀和友

パネルディスカッション

パネリスト

中村 桂子(三菱化成生命科学研究 所名誉研究員, 早稲田大学教授)

和田英太郎(三菱化成生命科学研究 所特別客員研究員, 京都大学教授)

和田 秀徳(前東京大学教授)

村上陽一郎(東京大学教授)

米本 昌平

南川 雅男

来聴ご希望の方は、11月15日までに(必着)、住所(参加証の送り先)、氏名、所属、身分、来聴希望日、(第一日目、第二日目、または両日)を明記の上、下記宛、葉書またはFAXにてお申し込み下さい。(参加費無料。先着順で参加証をお送り致します。参加証をお持ちでない方は御入場をお断りする事もあります。)

申込先:〒194 東京都町田市南大谷11号

三菱化成生命科学研究 所・

20周年シンポジウム実行委員会

TEL 0427-24-6247

FAX 0427-29-1252

1992年度質量分析連合討論会

主催:日本質量分析学会

共催:日本地球化学会ほか

会期:1992年5月13日(水)～15日(金)

会場:工業技術院筑波研究センター共用講堂(茨城県

つくば市東1-1-4, 電話0298-54-2095) 交通:JR

常磐線“荒川沖”下車, 関鉄バス“並木2丁目”

下車徒歩約7分または高速バス(東京駅八重州口

→つくばセンター)“並木大橋”下車徒歩約20分

討論主題:①バイオサイエンスにおける質量分析, ②質量分析の高度利用をめざしたシステム化と情報処理, ③イオンの生成と反応

発表の形式は(A)ポスター発表および(B)

シンポジウム講演の2種類です。ポスター発表は,

質量分析全般にわたる一般研究発表を対象としま

す。シンポジウム講演は, 上記①～③をテーマと

し, 発表者の研究成果を中心とした総括的な内容

で, 討論の素材を提供できるものとします。講演

時間は, 討論を含め20～25分の予定です。

発表申込締切:1992年1月20日(月)

申し込み1件ごとに, B5版用紙に①発表形式(プログラム編成の都合によりご希望に添えないことがあります), ②演題, 所属, 氏名(発表者に○印), ③申込者氏名, 連絡先(所属・所在地・電話番号・FAX), ④概要(200字程度)を記入したもの, 連絡用宛名書き(葉書大, そのまま封筒に貼り付けできるもの),

以上の2点をまとめて下記あてにお送り下さい。申込者には2月中旬に要旨執筆要領をお送りします。

要旨原稿締切:1992年3月23日(月)

参加費:(要旨集代を含む)主催・共催・協賛学協会員
5,000円, 学生3,000円, 非会員6,000円

懇親会:5月14日(木), 会費5,000円

申込先:305 茨城県つくば市東1-1

化学技術研究所基礎部 丹羽吉夫

電話 0298-54-4526・4503

FAX 0298-54-4487

「生物界の安定同位体に関する国際シンポジウム」開催のお知らせ

生物過程・生態系における軽元素安定同位体の自然存在比の変動, 挙動に関する国際シンポジウムを下記の要領で開催します。関心のある方はふるって御参加ください。

主催:SIサロン

共催:日本アイソトープ協会, 日本土壌肥科学会, 日本質量分析学会, 財サントリー生物有機科学研究 所, 三菱化成生命科学研究 所, 京大大学生態学研究センター

日時:1992年9月1日(火)～9月3日(木)

会場:三菱化成生命科学研究 所(東京都町田市)

主な海外招待講演者:

E. Bengsh (FRANCE), B. Fry (USA), E.

M. Galimov (USSR), J. M. Hayes (USA) D.

H. Kohl (USA), G. J. Martin (FRANCE), M.

H. O'Leary (USA), H.-L. Schmidt (GERMANY),

R. L. Schowen (USA)

参加締切:1991年12月20日までに事務局宛郵送

要旨締切:1992年4月30日までに事務局宛郵送

発表形式:口頭発表, ポスター, 及び招待講演

発表はすべて英語でおこなうこととします。

申込方法:指定の用紙を期日までに事務局宛に郵送してください。会場の都合で参加者は100名までとさせていただきます。

参加費:一般 20,000円

企業関係者 50,000円

学生 5,000円

なお, 学生には特別優待料を設けますので問い合わせください。

パンケット:9月2日(水)1名 5,000円

申込先/問い合わせ先:

〒194 東京都町田市南大谷11号

三菱化成生命科学研究 所

国際SIサロン事務局

TEL 0427-24-6283

FAX 0427-24-6301

第15期最初の総会開催される

平成3年8月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議の第15期が7月22日から発足し、7月22日～24日の3日間、第15期最初の総会が開催されましたので、その総会等についてお知らせします。

日本学術会議第112回総会報告

7月22日の第15期の発足に伴い、内閣総理大臣による日本学術会議会員の辞令交付が行われた。第15期の会員は、選出制度が学術研究団体を基礎とする推薦方式になって、3回目の会員である。この第15期会員による最初の総会である、第112回総会が7月22日から24日までの3日間、本会議講堂で開催された。

第1日目(22日)は、午前は新会員への辞令交付式があり、午後総会が開会され、直ちに、会長及び両副会長の選挙が行われた。会員による互選の結果、会長には近藤次郎第5部会員が13期、14期に引き続き三選された。人文科学部門の副会長には、川田侃第2部会員、自然科学部門の副会長には、渡邊格第4部会員が選出された(渡邊副会長は再選)。選挙終了後、近藤会長から「新人の方が半数以上おられ、大きな抱負をもっておられると思う。挫折感を持つことのないようできるだけの努力をしたい。皆様にも御協力をお願いしたい」との就任のあいさつがあり、又、川田、渡邊両副会長からもそれぞれ就任のあいさつがあった。

会長、副会長選出後は、直ちに各部会が開会され、各部の部長、副部長、幹事の選出が行われた。(第15期の役員については、別掲を参照)

第2日目は10時に総会が開催され、近藤会長が14期の会長という資格で第14期の総括的な活動報告を行った。その報告の折々には、国際交流とか、将来計画委員会、学術会議の予算等、会長の感慨、または感想をも交えてその所感を述べた。続いて、会員推薦管理会報告として、久保亮五委員長代理として事務総長が、第15期会員の推薦を決定するまでの経過報告を行った。

引き続き、会長から3日目の総会で提案・審議する予定の「第15期活動計画委員会の設置について(申合せ案)」に関する各部での事前討議について、並びに各常置委員会の各部での委員の選出について、それぞれ各部へ依頼した。

総会終了後、各部会が開会され、前述の申合せ案の討議及び各常置委員会委員の選出等が行われた。

第3日目(24日)10時に総会が開会され、会長から「第15期活動計画委員会の設置について」の提案が行われた。

これは、第15期の活動の基本計画の立案を目的とする臨時の委員会を次の定例総会までの間、設置するという内容を内容としている。そしてこの提案は原案どおり可決された。総会終了後、直ちに各部会が開会され、設置が決定された第15期活動計画委員会委員の選出等が行われた。

なお、この第15期活動計画委員会は、総会期間中に第1回の会議を開き、全会員を対象にした第15期の学術会議の活動に関するアンケートの実施を決めるなど、早速その活動を開始した。

また、運営審議会附置委員会、常置委員会、国際対応委員会等も活動を開始した。

第15期日本学術会議の辞令交付式等について

第112回総会に先立ち、第15期日本学術会議会員の辞令交付式が7月22日(月)11時から、総理大臣官邸ホールで行われた。辞令交付式は、海部内閣総理大臣、坂本内閣官房長官、大島、石原両官房副長官、稲橋総理府次長等の出席を得て執り行われた。

第1部から第7部までの会員1人ずつの名前が読み上げられた後全会員の最年長である渡邊格第4部会員が代表して海部総理から辞令を手渡された。この後、海部総理大臣から「会員の皆様には、創造性豊かな科学技術の発展、総合的観点に立った学術研究に係る諸活動に御尽力いただきたい。」とのあいさつがあり、これに応じて第15期会員を代表して渡邊格会員が「微力ながら全力を尽くし、重要な責務を全うし、国民の期待に応えたい。」とあいさつがあり、式は終了した。式には192名の会員が出席した。

また、総会2日目の夕方には、学術会議ホールで、坂本官房長官主催の第15期会員就任パーティーが開催された。パーティーは坂本官房長官のあいさつで開会し、日本学士院長代理の藤田良雄幹事の祝辞があり、これに対する近藤会長の答礼のあいさつ、沢田敏男日本学術振興会会長の発言による乾杯の後、懇談に入った。ホールには溢れんばかりの人々で歓談が続き盛会であった。

日本地球化学会(学会賞等)受賞候補者推薦用紙

日本地球化学会授賞規程により、下記の者を日本地球化学会(柴田賞、学会賞、奨励賞、功労賞)受賞候補者として推薦します。

年 月 日

推薦者

氏名

印

記

1. 候補者氏名、生年月日、略歴(わかる範囲でお書き下さい)

2. 受賞の対象となる業績等の題目

3. 推薦理由

第15期日本学術会議役員

会 長	近藤 次郎 (第5部・経営工学)
副会長	川田 侃 (第2部・政治学)
副会長	渡邊 裕 (第4部・生物科学)
<各部役員>	
第1部	部 長 肥田野 直 (心理学)
	副部長 弓削 達 (歴史学)
	幹 事 一番ヶ瀬康子 (社会学)
	" 山本 信 (哲学)
第2部	部 長 西原 道雄 (民事法学)
	副部長 細谷 千博 (政治学)
	幹 事 正田 彬 (社会法学)
	" 山下 健次 (公法学)
第3部	部 長 大石 泰彦 (経済政策)
	副部長 島袋 嘉昌 (経営学)
	幹 事 岡本 康雄 (経営学)
	" 藤井 隆 (経済政策)
第4部	部 長 中嶋 貞雄 (物理科学)
	副部長 田中 元治 (化学)
	幹 事 竹内 郁夫 (生物科学)
	" 樋口 敬二 (地球物理学)
第5部	部 長 岡村 総吾 (電子工学)
	副部長 市川 惇信 (計測・制御工学)
	幹 事 内田 盛也 (応用化学)
	" 増子 昇 (金属工学)
第6部	部 長 中川昭一郎 (農業総合科学)
	副部長 水間 豊 (畜産学)
	幹 事 志村 博康 (農業工学)
	" 平田 熙 (農芸化学)
第7部	部 長 岡田 晃 (社会医学)
	副部長 伊藤 正男 (生理科学)
	幹 事 渥美 和彦 (内科系科学)
	" 金岡 祐一 (薬科学)

(注) カッコ内は、所属部・専門

平成4年(1992年)度共同主催国際会議

本会議は、昭和28年以降、学術関係国際会議を関係学術研究団体と共同主催してきたが、平成4年(1992年)度には、次の6国際会議を開催することが、6月7日の閣議で了解された。(カッコ内は、各国際会議の開催期間と開催地)

- 第9回国際光合成会議
(平成4年8月30日～9月5日、名古屋市)
共催団体：日本植物生理学会
- 国際地質科学連合評議会及び第29回万国地質学会議
(平成4年8月24日～9月3日、京都市)
共催団体：(社)東京地学協会外5学会
- 第5回世界臨床薬理学会議
(平成4年7月26日～31日、横浜市)
共催団体：日本臨床薬理学会

第15期日本学術会議会員の概要について

この度任命された210人の第15期日本学術会議会員の概要を以下に紹介する。(カッコ内は前期)

1	性別	男子207人(207人)	女子3人(3人)
2	年齢別	50～54歳 3人 60～64歳 105人 70～74歳 15人	55～59歳 29人 65～69歳 58人
	最年長	74歳(76歳)	
	最年少	54歳(51歳)	
	平均年齢	63.5歳(63.1歳)	
3	勤務機関及び職名別		
(1)	大学関係	国立大学 71人(78人) 公立大学 2人(4人) 私立大学 93人(88人) その他 3人(2人) 計 169人(172人)	
(2)	国公私立試験研究機関・病院等	11人(9人)	
(3)	その他	法人・団体関係 9人(10人) 民間会社 9人(6人) 無職 10人(13人) その他 2人(0人) 計 30人(29人)	
4	前・元・新別	前 会 員 88人(109人) 元 会 員 3人(4人) 新 会 員 119人(97人)	
5	地方別(居住地)	北海道 4人(3人) 東北 8人(6人) 関東 133人(130人) 中部 20人(17人) 近畿 34人(42人) 中国・四国 5人(4人) 九州・沖縄 6人(8人)	

(注) 詳細については、日本学術会議月報7月号を参照

- 第11回国際光生物学会議
(平成4年9月7日～12日、京都市)
共催団体：日本光生物学協会
- 第14回国際平和研究学会総会
(平成4年7月27日～31日、京都市)
共催団体：日本平和学会
- 第8回国際バイオレオロジー会議
(平成4年8月3日～8日、横浜市)
共催団体：日本バイオレオロジー学会

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

草津白根山観測所の紹介

大 場 武
(東工大・草津白根火山観測所)

草津白根火山観測所は1987年11月に発足し、かれこれ4年余りが経過した。当観測所は東京工業大学に所属するが学部の下部組織ではなく付属の研究所と同じ扱いになっている。当所は標高1,000mの群馬県吾妻郡草津町に位置し夏は涼しく冬はとても寒く積雪に覆われる。このスタッフは所長に吉田稔教授を戴き平林順一助教授、大場武助手とつづき、臨時職員の山本玉枝さん、草津町事業部から出向している細谷英男君の総勢たったの5名からなっている。5名と言っても常に全員観測所にいる訳ではなく、休日を除く平日の勤務日の標準的な勤務時間に占める観測所における滞在時間の割合で各氏の存在状態を表すと、吉田教授がほぼ0%、平林助教授が約60%、大場助手が約80%、山本玉枝さんが58%、細谷英男君が74%となる。これらの値はあくまでも私の感覚によるもので絶対的のものではないが各氏の100%に足らざる理由を考えると、先ず所長の0%というのは吉田教授が本来、理学部化学科教授で観測所の所長職は併任であるため、平林助教授が60%というのは大岡山キャンパスで事務的な仕事があることと他の火山におけるフィールドワークが多いことによる。大場助手が80%であるのは平林助教授に伴い火山におけるフィールドワークがあるため。山本玉枝さんと細谷英男君の値はあらかじめ勤務時間がこのように決められている。

当観測所は火山観測と火山化学研究の両側面をもって。おもな火山観測の項目は、湯釜火口湖については温度、水位、電気伝導度、湖水溶存成分の化学組成、ハイドロフォンによる音波振動。草津白根山の湯釜火口湖は湖水のpHが1から2で、ある意味で極限的なこの湖は多くの研究者の関心を集めている。火山周辺に見られる火山ガスや強酸性温泉水については温度、化学組成を

観測する。湯釜火口の近くには地震計と傾斜計が深さ100mに埋まっている。山頂と町の間には殺生河原と呼ばれる噴気地帯がありそこでは地温と大気中のガス組成を観測している。火山ガスや温泉水の化学組成の観測は毎月1回、定期的に採取分析を行なう。そのため観測所には化学実験室がある。火山化学研究については観測所としてテーマをもっているわけではないが個人的には強酸性温泉水と火山ガスの発生場を物理化学的に解明したいと考えている。全国の活火山に配置する大学の火山観測所がする化学研究という見方からも、かつて例がない珍しい施設だと思う。草津白根山は興味深い対象であるが当所の人員は少なく、学生の受け入れもない現状では観測が主体であり研究には余り時間がさけない。これは普賢岳のように他の火山が長期にわたり活動を続けると更に拍車がかかる。将来は観測所が増築され、研究/観測比が増えればより魅力的な場所になると思う。

ところで草津白根山は3,000年前を最後に溶岩を流出していない(早川, 由井, 1983)。有史時代の記録によると、最近では水蒸気爆発を繰り返す活動期と噴気温泉活動のみとなる静穏期を交互に繰り返している。1882-1905年の23年間は活動期、それから20年静穏で1925年から1942年まで17年活動が続いた。それから32年休んで1976年から活動期にはいり現在も活動期にあると思われる。現在の活動は前二回の活動よりも弱く、百年単位の時間尺度でみると草津白根山の活動は低下傾向にあるのかもしれない。まもなく静穏期に入ってしまう恐れもあるが東大地震研の観測によると水釜溶岩円頂丘の直下約1kmに火山性微動の発生源があり(藤田, 他, 1991) マグマは健在であるらしい。現在火山ガスの組成は1982-83年の噴火の時の組成に近く、気象庁地磁気観測所によると白根山の下では温度が上昇している結果がえられている。また最近になり湯釜湖水にポリチオン酸が検出されるようになり(大沢, 他, 1991) 当分観測研究の甲斐がありそうである。

編集者 高野穆一郎 〒153 東京都目黒区駒場3丁目8番1号 東京大学教養学部化学教室 電話 03(3467)1171
発行者 日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内 電話 東京 03(3817)5801

日本地球化学会ニュース

No. 128

1992. II. 25

1992年度日本地球化学会春季シンポジウム

1992年度日本地球化学会春季シンポジウム(The 1992 Spring Meeting of the Geochemical Society of Japan)は地球惑星科学関連学会1992年合同大会(1992年4月7~10日、京都大学教養部)の中の固有セッションとして3日目(9日)と4日目(10日)にB会場で開催されます。プログラムは以下のように決まりました。

プログラム

—休憩(10:45~11:00)—

【招待講演】

(11:00~12:00) 座長 野津憲治

11:00 B31-08*

ダイヤモンドと海水をつなぐ懸け橋—地球と環境との一つの接点—

赤木 右(農工大工)

11:30 B31-09*

ミシシッピ・ヴァレイ型鉱床の閃亜鉛鉱のRb-Sr年代測定

中井俊一(東大理)

【一般講演2】

(15:30~17:15) 座長 石橋純一郎・益田晴恵

15:30 B32-01

西赤道太平洋(Ontong-Java 海台)より得られた後期更新世における酸素および炭素同位体比記録

岡田 誠・大河内直彦・平 朝彦(東大海洋研)

15:45 B32-02

カドミウム-カルシウム比から明らかにされる過去32万年の太平洋深層水の栄養塩量の変化
大河内直彦(東大海洋研), 川幡穂高(地調), 岡田 誠・平 朝彦(東大海洋研)

16:00 B32-03

西部赤道太平洋における²³⁰Th堆積速度の時間的変動について
成田尚史(放医研), 岡田 誠・野崎義行(東大海洋研)

16:15 B32-04

北フィジー海盆海底熱水系における熱水組成の時間的変動

4月9日(木)

【一般講演1】

(9:00~10:45) 座長 長尾敬介・植田千秋

9:00 B31-01

ICP-MSによるStevens Klint 堆積物(K-T boundary)中の白金族元素(特に白金)の定量的分析

藍川昌秀・M.B. Shabani・増田彰正(東大理), R. Ganapathy(J.T. Baker Inc.)

9:15 B31-02

Marine effects of huge underwater-shock wave at the K/T boundary
三浦保範(山口大理)

9:30 B31-03

アリゾナ隕石孔のESR年代
池谷元同・小河一敏・石井 博(阪大理)

9:45 B31-04

衝撃合成ダイヤモンド中への希ガスの取り込み機構

久住晶子(神戸大理), 松田准一(阪大理), 草場啓治・庄野安彦(東北大金材研)

10:00 B31-05

レーザープローブ法による希ガスの拡散係数決定の試み

松田准一・高畑直人・小嶋 稔(阪大理)

10:15 B31-06

アルミニウム箔中に検出された過剰He
長尾敬介(岡山大地球内部研)

10:30 B31-07

アモルファスシリカの結晶化による希ガスの挙動
松原佳代(阪大理), 山本綱志(神戸大理)